第５４回

九州中学校社会科教育研究大会

熊本大会

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求

～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

熊本城　初日の出

期日：令和４年１１月１８日（金）
会場：熊本大学教育学部附属中学校

九州中学校社会科教育研究協議会
熊本県中学校教育研究会社会科部会

目　次

大会あいさつ …… 九州中学校社会科教育研究協議会会長
熊本市立龍田中学校　校長　米村　均　1
あいさつ …… 熊本県教育委員会教育長　白石　伸一　2
あいさつ …… 熊本市教育委員会教育長　遠藤　洋路　3

大会要項 …… 4

基調提案 …… 熊本県中学校教育研究会社会科部会研究部長
熊本市立白川中学校　教諭　福島　輝浩　6

〈地理的分野〉
分野の研究提案 …… 熊本県中学校教育研究会社会科部会地理的分野部長
山鹿市立米野岳中学校　教諭　松山　誠一郎　13
学習構想案 …… 熊本市立下益城城南中学校　教諭　矢部　彰人　17
研究発表
宮崎県 …… 西都市立妻中学校　教諭　中武　秀一郎　20
長崎県 …… 対馬市立雞知中学校　教諭　賀嶋　雅也　26
熊本県 …… 上天草市立龍ヶ岳中学校　教諭　岸谷　祐太朗　32

〈歴史的分野〉
分野の研究提案 …… 熊本県中学校教育研究会社会科部会歴史的分野部長
熊本市立京陵中学校　教諭　龍野　成敏　39
学習構想案 …… 熊本市立桜木中学校　教諭　本田　悠介　43
研究発表
福岡県 …… みやま市立瀬高中学校　主幹教諭　溝上　恵　46
大分県 …… 大分市立南大分中学校　教諭　大野　亜希子　52
熊本県 …… 嘉島町立嘉島中学校　教諭　中村　俊介　57

〈公民的分野〉
分野の研究提案 …… 熊本県中学校教育研究会社会科部会公民的分野部長
合志市立合志中学校　教諭　松岡　政晴　63
学習構想案 …… 熊本市立清水中学校　教諭　山下　大輝　67
研究発表
鹿児島県 …… 南大隅町立根占中学校　教諭　大隣　佳甫　70
沖縄県 …… 東村立東中学校　教諭　比嘉　共樹　76
熊本県 …… 西原村立西原中学校　教諭　伊藤　文徳　82

九州中学校社会科教育研究大会のあゆみ …… 88
九州中学校社会科教育研究協議会会則 …… 90
令和４年度熊本大会役員 …… 91

あ　い　さ　つ

九州中学校社会科教育研究協議会
熊本県中学校教育研究会社会科部会
会　　長　　米村　均
（熊本市立龍田中学校長）

九州各地で，社会科教育の研究と実践に情熱を注いでおられる先生方におかれましては，ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。九州中学校社会科教育研究協議会会長として本研究協議会の活動にご理解とご協力をいただいておりますことに深く感謝申し上げます。

さて，令和元年に初めて沖縄の地で九州８県が参加した九州大会が開催されて３度目の秋を迎えます。その間，猛威を振るった新型コロナウイルスは本研究協議会にも多大な影響を及ぼし，各県工夫しながら「学びを止めない」研究を継続，新な歴史を刻まれたことと拝察いたします。

世界情勢は平和から遠ざかる方向へ推移し，人類の生き残りをかけて取り組むべき諸課題が山積している現状です。民主的で持続可能な実践が実行できる人材育成が学校現場でも急務である中，社会科の果たすべき役割はとても大きいと言えます。

そこで，本県中社研では，九州中社研の研究成果を踏まえつつ，現行学習指導要領が告示された年に，「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求」を研究主題として掲げました。民主主義を見つめ直し，「資質・能力」の育成が求められる昨今だからこそ，子どもたちが「なぜ社会科を学ぶのか」という目的意識に立ち返った研究が重要であると考えたからです。研究の視点を転換し，本研究会が以前から掲げてきた「未来を拓く力」の中身をさらに明確化して，子どもたちが「民主主義の担い手」として育っていくために必要な資質・能力に着目して研究を進めてきました。

この度，九州熊本の地より提案させていただく社会科教育の取り組みが，少しでもこれからの世界平和への一歩となればという思いが高まるところです。九州熊本大会の開催を担当いただいた熊本支部の先生方には厚く感謝申し上げます。授業会場となりました，熊本大学教育学部附属中学校のみなさまにも大変お世話になります。ご後援いただきました九州各県教育委員会をはじめ，熊本市教育委員会にも重ねて感謝いたします。

今年度の実践で見えた成果と課題をもって，来年度の九州中社研・宮崎大会につなげることを誓い，先生方のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げ，あいさつといたします。

あ　い　さ　つ

熊本県教育委員会
教育長　白石　伸一

本日ここに，第５４回九州中学校社会科教育研究大会「熊本大会」が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げますとともに，九州各県からお集まりの皆様を心から歓迎いたします。

また，九州中学校社会科教育研究協議会並びに熊本県中学校教育研究会社会科部会におかれましては，九州各県の社会科担当の先生方と連携を図りながら，長年にわたる研究活動を通して社会科教育の充実と発展に大きく寄与してこられましたことに，敬意を表します。併せて，一昨年度より新型コロナウイルスの影響を受け，参集による大会の実施が困難である状況の中で，可能な限り参集での授業研究会等を実施され，実践を積み重ねていただいておりますことに，感謝の意を申し上げます。

さて，令和３年１月の中央教育審議会答申では,「急激に変化する時代の中で，子供たちが，目の前の事象から解決すべき課題を見いだし，主体的に考え，多様な立場の者と協働的に議論し，納得解を生み出すなど,学習指導要領で育成を目指す資質･能力が一層強く求められている」と示されました。また，目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を,「すべての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現」と，義務教育段階で目指すべき子供の学びの姿を,「地域の魅力や課題を知り，地域の構成員の一人としての意識が育まれている姿」や「社会への関心を高めるなど主権者としての意識が育まれている姿」と示されています。

このような動向の中，子供たちに,「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を身に付けさせる」ことを目標とする中学校社会科の役割は，大変大きいものがあると考えます。

熊本県教育委員会では，学習指導要領改訂に併せて，義務教育段階における学力向上に関する計画である「熊本の学び推進プラン」を作成しました。本プランでは,「熊本のすべての子供たちが『学ぶ意味』を問いながら『能動的に学び続ける力』を身に付ける」という理念のもと，授業力の向上及び教師の視点から示していたこれまでの授業を，子供（学習者）の視点で再構築し，確かな学力の育成を図っているところです。特に，子供たちに期待する学びの姿の一つである「問いを発し，課題に主体的に立ち向かい，学びを深める熊本の子供」の実現に向けては，それぞれの教科等において，各学校の特色ある取組を推進しているところです。

本大会においては,「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求～社会的な見方・考え方を働かせる『問い』を通して～」というテーマのもと，これまで，子供たちから「問い」を引き出したり，子供たちを課題解決の主体に導いたりするために，教師の「発問」の工夫などに取り組まれてきました。このことは，本県教育委員会が子供たちに期待している学びの姿の実現に向けた実践であり，大変参考となるところであります。本大会が本県はもとより，御参会の先生方におきましても実り多い大会となることを期待しております。

結びに,本大会の開催に当たり,御尽力いただきました関係各位に心から敬意を表しますとともに，本研究大会の今後益々の御発展と御参加の皆様の御活躍を祈念いたしまして，あいさつの言葉といたします。

あ　い　さ　つ

熊本市教育委員会
教育長　遠藤　洋路

第５４回九州中学校社会科教育研究大会熊本大会が，この熊本の地に県内各地はもとより九州各県から多数の皆様をお迎えし，盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに，ご参会の皆様に心より歓迎のご挨拶を申し上げます。また，本研究会が長年にわたり，社会科教育の充実と発展に尽くしてこられましたご功績に対し，敬意を表します。

さて，未だに続くコロナ禍や国際情勢の不安，予期せぬ自然災害，そして，急速なデジタル化やグローバル化等，現代は先行き不透明で，将来の予測が困難な時代です。皆様ご承知のとおり，学習指導要領では，子どもたちが社会のつながりの中で学ぶことで，自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感を持つことが，変化の激しい社会において，子どもたちが困難を乗り越え，未来に向けて進む希望や力になるとしています。熊本市でも，令和２年７月に「熊本市教育振興基本計画」を策定し，「豊かな人生とよりよい社会を創造するために，自ら考え主体的に行動できる人を育む」ことを基本理念に進めているところです。

平成２８年より選挙権年齢が引き下げられ，更に今年度からは成年年齢が１８歳へと引き下げられることに伴い，児童生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなるとともに，自ら考え，積極的に国家や社会の形成に参画する環境が整いつつあります。

本市でも令和３年から子どもたちと教職員，保護者が議論し，校則の見直しを行う仕組みをつくりました。自分たちの決まりは，自分たちで作って，自分たちで守るという民主主義の基本を身に付けながら，自ら判断し行動できる児童生徒を育成するためです。

本研究会では，「『民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求』～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～」を研究主題に，「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育成する社会科の授業づくり」を通して，子どもたちに「よりよい社会と多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力」の育成をめざして研鑽を深められています。これは，学習指導要領や本市が目指す基本理念につながるものであり，本研究大会の成果に期待しております。

最後になりましたが，大会開催にあたりご尽力いただきました関係の皆様に感謝申し上げますとともに，九州中学校教育研究会社会科部会のますますのご発展と，ご参会の先生方のご健勝とご活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

大　会　要　項

1　大会主題

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求

～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

2　期　日　　令和４年１１月１８日（金）

3　会　場　　熊本大学教育学部附属中学校（全分野）

〒860-0081　熊本県熊本市中央区京町本丁５番 12 号

TEL　096-355-0375　　FAX　096-355-0379

4　日　程

8:50	9:20	10:10	10:30	11:20	11:40	12:40	13:40	15:00	15:10	16:30	16:40
受付	開会行事 基調提案	移動	公開授業	休息	授業研究会	昼食	研究発表	休息	研究発表 研究協議	閉会行事 諸連絡	

5　公開授業

分　野	授　業　者	単　元
地理的分野	熊本市立下益城城南中学校 教諭　　矢部　彰人	〈１年生〉 アフリカ州
歴史的分野	熊本市立桜木中学校 教諭　　本田　悠介	〈２年生〉 欧米の進出と日本の開国
公民的分野	熊本市立清水中学校 教諭　　山下　大輝	〈３年生〉 消費生活と市場経済

6　研究発表および研究テーマ

分野	研究発表者		研究テーマ
地理的分野	宮崎	西都市立妻中学校 教諭　　中武　秀一郎	社会について考え続ける主体を育む社会科学習の創造 ～社会的な見方・考え方を働かせる「単元構成」と「授業のフレームづくり」を通して～
	長崎	対馬市立雞知中学校 教諭　　賀嶋　雅也	よりよい社会を形成するための力を育む社会科学習 ～社会的な見方・考え方を生かし，一人一人の主体性を高める授業の工夫～
	熊本	上天草市立龍ヶ岳中学校 教諭　　岸谷　祐太朗	民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求 ～地理的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～
歴史的分野	福岡	みやま市立瀬高中学校 主幹教諭　溝上　恵	多面的・多角的に考察する力を育む学習指導法の研究 ～思考ツールを活用した交流活動を通して～
	大分	大分市立南大分中学校 教諭　　大野　亜希子	「社会について問い続ける力を育成する社会科学習のあり方」
	熊本	嘉島町立嘉島中学校 教諭　　中村　俊介	民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求 ～主権者の一人として，明治期の国づくりを追求する学習活動を通して～
公民的分野	鹿児島	南大隅町立根占中学校 教諭　　大隈　佳甫	より良い地域社会を築くために考え・行動できる生徒の育成 ～「くらしを支える地方自治」を題材に～
	沖縄	東村立東中学校 教諭　　比嘉　共樹	よりよい社会の形成に主体的に参画する態度を育む社会科学習 ～地域を素材にしたチームでの授業づくりを通して version 2～
	熊本	西原村立西原中学校 教諭　　伊藤　文徳	民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求 ～経済単元において「効率と公正」の視点で考える学習活動を通して～

7　指導助言者・司会者

分野	指導助言者	司会者
地理的分野	熊本大学教育学部附属中学校校長　山本　一雄 芦北町立佐敷中学校校長　光山　忠	熊本市立江原中学校教頭　佐方　法隆 山鹿市立米野岳中学校教諭　松山　誠一郎
歴史的分野	天草市立御所浦中学校校長　大平　宏 益城町立木山中学校校長　堅島　尚記	熊本市立西山中学校教頭　坂田　秀一 熊本市立京陵中学校教諭　龍野　成敏
公民的分野	熊本大学教育学部教授　藤瀬　泰司 玉名市立玉陵中学校校長　丸塚　慎一郎	熊本市立芳野中学校教頭　郷　英利 合志市立合志中学校教諭　松岡　政晴

基 調 提 案

熊本県中学校教育研究会社会科部会研究部長
熊本市立白川中学校　教諭　福島　輝浩

1　研究主題

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求
～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

2　主題設定の理由

（1）　研究主題設定の経緯

① なぜ「民主主義」を掲げるのか

世界の情勢を見ると，保護貿易主義や自国第一主義など排他的な風潮が広まり，社会の分断が起こっている。さらに，パンデミックによる世界的な混乱やヨーロッパにおける軍事侵攻が我々に突きつけたことについて考えるとき，民主的な対話を重ねて打開策を見出していかなければならないことに改めて気づかされる。「民主主義の危機」が叫ばれている現代において，もう一度「民主主義」を見つめ直し，私たち社会科教師が原点にかえって研究を進めるために，「民主主義」を研究主題に掲げることにした。

② 子どもたちの資質・能力を育成することが求められている背景

世界の教育界において，今後の予測困難な社会の変化に対応するためには，単なる知識の習得ではなく，汎用的な資質・能力の育成が必要不可欠であると主張されるようになった。[1)] こうした潮流を背景に，現行の学習指導要領（平成 29 年告示）の中で，資質・能力を育成するという方向性が打ち出された。[2)]

次世代を担う今の子どもたちには，「何を知っているか，何ができるか」とともに，「知っていること・できることをどう使うか」，そしてこれらの土台である「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」といった資質・能力を育んでいくことが求められるようになった。

③ 社会科と民主主義の担い手を育てること

我々教師の使命は「民主主義の担い手」を育てることである。では，子どもたちは，なぜ社会科を学ぶのか。それは「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者」，すなわち「民主主義の担い手（主体）」となるためであると言える。そもそも，戦後発足した社会科は，民主主義社会の形成とその主体（市民）の育成を重視してつくられた。

民主主義を見つめ直し，「資質・能力」の育成が求められる昨今だからこそ，子どもたちが「なぜ社会科を学ぶのか」という目的意識に立ち返って研究主題を設定した。本研究会が以前から掲げてきた「未来を拓く力」[3)] の中身をさらに明確化して，子どもたちが「民主主義の担い手」として育っていくために必要な資質・能力に着目した。

（2） 民主主義の担い手に必要な資質・能力とは何か

① 学習指導要領と「資質・能力」

これまでも学習指導要領に取り上げられてきた「生きる力」は，「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」と捉えられ，これらをバランスよく育成することを目指してきた。しかし，本来，これらの力は独立して存在しているのではない。知・徳・体の三つを縦割りではなく，一人の子どもの中で統合されるものと考えたときに登場してきたのが前述の「資質・能力」という観点である。

② 本研究会が示す「民主主義の担い手に必要な資質・能力」

新学習指導要領が求める社会科において育むべき資質・能力を，どのように捉えていけばよいのか。本研究会では，熊本大学教育学部教授の藤瀬泰司氏が提唱している「民主主義の担い手の育成」を参考に，社会科において育むべき資質・能力を「民主主義の担い手に必要な資質・能力」とし，具体的には次のように捉える。

> よりよい社会と幸福な人生をつくり出すために，社会の問題に気付き，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力。

自分が生きている社会の問題について考えるとき，自分の生活との関わりや利害などを踏まえて意思決定するだけでなく，同じ社会に生きる多様な立場の人々にも目を向けることが民主的であることは言うまでもない。子どもたちが民主主義の担い手となりうるためには，自分が良いと思う解決策や行動が，他者の生活や利害にどのような影響を及ぼすかについても考えさせていくことが大切である。さらに，歴史を踏まえ，世代を超えた他者の立場を考慮し，よりよい社会をつくろうとする姿勢や態度も含めた社会問題の民主的な解決を図ろうとする資質・能力こそが，「民主主義の担い手に必要な資質・能力」であると考える。[5)]

3 研究の進め方について

（1） 研究の新しい視点

① 授業研究の視点

学校現場で通常行われる授業研究や授業構想は，多くの場合，「教師」と「子ども」と「教材」という関係の中で考えられる。教師は子どもの実態を捉え，教材をどのように具体化し，どのような方法で子どもの理解を促すかを考え，授業を構成していく。

しかし，この視点のみで授業づくりを行うと，教材（例えば教科書）＝授業目標となり，特に社会科の授業においては，「教材（教科書）を教える授業」に陥ってしまう。「教科書を教える授業」では，民主主義の担い手に必要な資質・能力を育むことはできないと考える。これを図式化すると，**図１**のようになる。

② 発想の転換と新しい視点

授業の最終的な目的を「民主主義の担い手に必要な資質・能力の育成」とするならば，教材（教科書）は，それを達成していくための媒体でなくてはならない。すなわち，「教師が教科書を教える」のではなく「生徒が教科書で学ぶ」授業へと発想を変えることが不可欠である。（**図２**）。[4)]

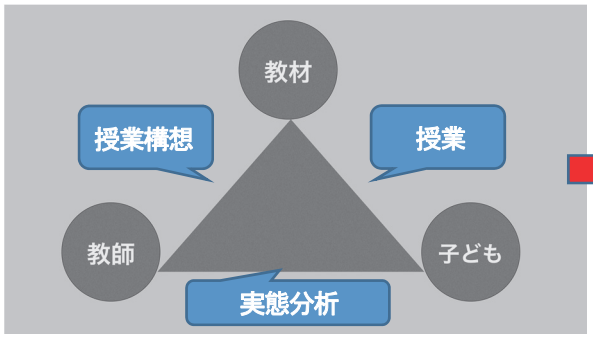


図１

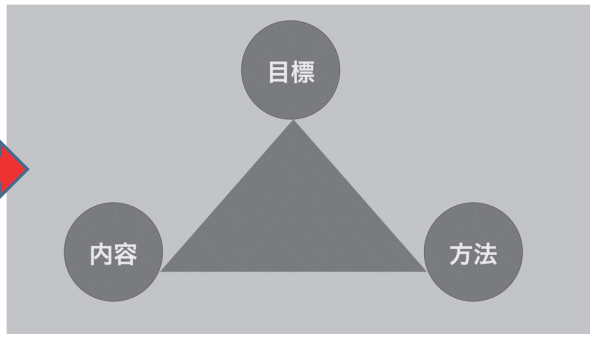


図２

（2） 本研究の視点 **図２**に照らし，本研究の視点は，次のように示される。

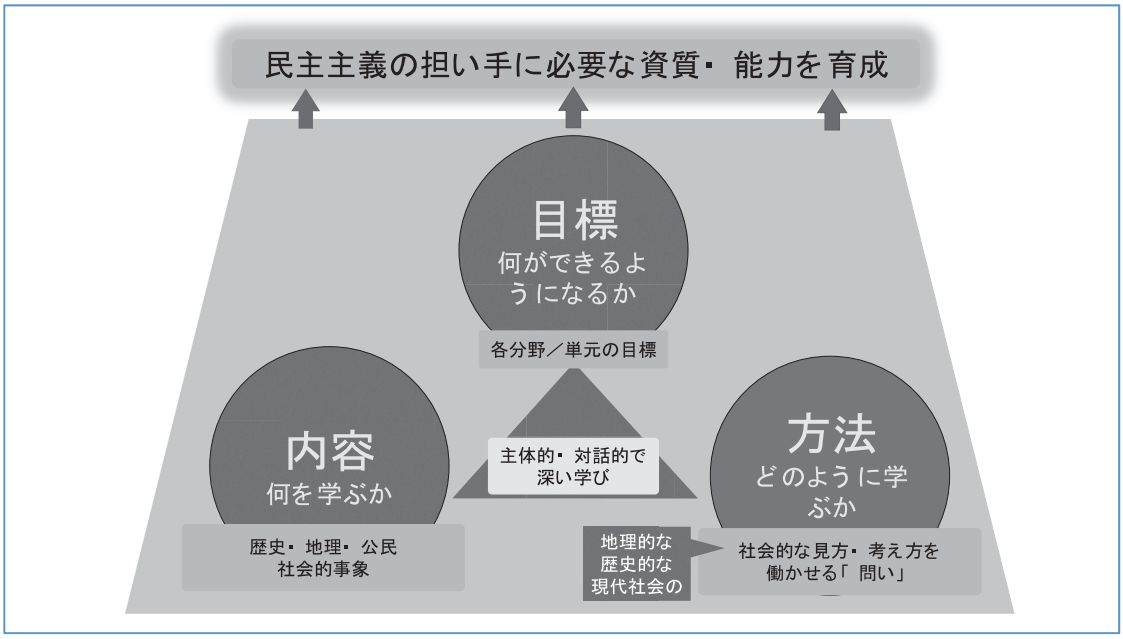


図３ 本研究の視点

授業づくりにあたっては，まず，単元終了後の子どもの姿をイメージした目標を定め，教材となる社会的事象を選定し，学習内容を明らかにしていく。具体的には，次の①～③の手順で進めていく。[6]

① まず，単元の学習に入る前に，子どもたちは教材となる社会的事象をどのように捉えているかを知る。日常生活の中で，子どもたちはどのような知識やイメージを身に付けているか，事前アンケートを実施し，分析する。

② 単元終了後，子どもたちの社会的事象に対する知識やイメージを，どのように変えたい，あるいは広げたいのかを明確にする。これが「単元終了時の子どもの姿」となる。

③ 子どもたちの社会的事象に対する知識やイメージが「変わる」「広がる」ために，どのような教材を発掘して，どのような授業を構想するのかを具体化し，学習構想案に盛り込んでいく。

（3） 研究の目的と目標

本研究の目的は**「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育成する社会科の授業づくり」**であり，**「授業を通して子どもたちの姿を変えていく」ことである。**

なお，「目的」と「目標」を区別し，目標は，個々の授業における「単元の目標」や「本時の目標」などを指す。

（4） 研究の内容

本研究の内容は，**「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育成するために，子どもたちが意欲的に学んでいくための教材開発を進め，子どもたちの思考を促す学習課題を工夫する」**ことである。ここで教材の中心となるのは，地理・歴史・公民各分野における社会的事象である。

子どもたちが，授業を通して，社会的事象に対する違った考えをもち，あるいは解釈を広げていくためには，教科書＋α（プラス　アルファ）の教材を発掘・開発することが必要になる。

（5） 研究の方法

本研究では，**学習構想案の形式**を準備し，授業づくりを検証する。

なお，学習構想案の中に，「単元終了時に期待する生徒の姿」として，授業後の姿（生徒が持つ感想や新たな疑問など）を予測して明記し，研究の可視化を図りたい。

（6） 社会的な見方・考え方を働かせる「問い」について

本研究では，社会的な見方・考え方を働かせる「問い」に着目する。

社会的な見方・考え方とは，学習の問題を追究・解決する活動において，社会的事象の特色や意味などを考えたり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりするための「視点や方法」である。[7)]

① 「見方・考え方」の二つのアプローチ

「見方・考え方」には，従来，社会科教育研究の中で提唱されてきたものと，新学習指導要領が示しているものの二つがあると捉えられる。

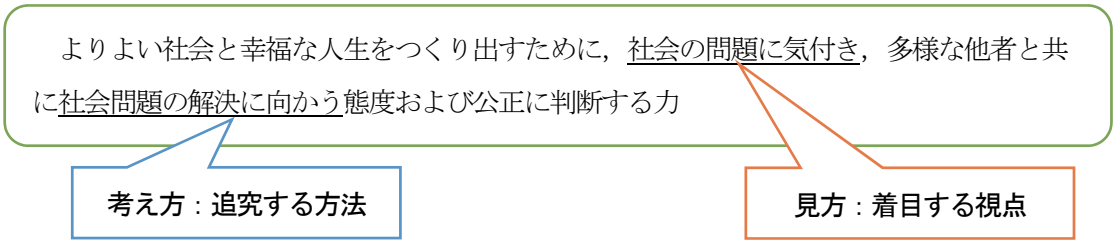
従来の社会科教育研究の中で提唱されてきたものは，子どもたちが学習前に持っていた社会的事象に対する知識やイメージに対し，「視点や方法」を与えることで，「子どもたちの社会的事象に対する見方や考え方が変化する」という文脈で説明されてきた。

一方，学習指導要領には「社会的な見方・考え方を働かせ」という表現があり，物事を捉える視点を増やし，考え方を深める学習過程を工夫して授業改善を図るよう示されている。

本研究会では，**子どもたちのもつ社会的事象に対する知識やイメージを，「社会的な見方・考え方」を働かせることで，再構築または創造していくことを目指していく。**

② なぜ社会的な見方・考え方を働かせる「問い」に着目するのか

前述した本研究会が捉える「民主主義の担い手に必要な資質・能力」と，「見方・考え方」の関係は次のように示される。



「見方・考え方」は，教え込むことのできる性質のものではない。子どもたちの中にあり，働かせることで鍛えられていくものである。そして，子どもたちの中にある「社会的な見方・考え方」を働かせるような「問い」をもたせることが重要である。

③ 社会的な見方・考え方を働かせる「問い」

「見方・考え方」は，資質・能力を育成するための「視点や方法（思考の枠組み）」である。「視点」は地理的・歴史的・社会的なものからなり，追究の「方法」とは，社会的事象を見出すこと，見出した事象を比較・分類・統合したり，関連づけたりすることである。社会的な見方・考え方を働かせるためには，「視点」「方法」「問い」「知識」を関係づけることが必要である。

次の表（**表４**）をもとにした「問い」に注目し，学習構想案の指導観に記述することで，研究の可視化を図りたい。

分　野	**見方・考え方（着目する視点と追究の方法）**	
地理的分野	位置や空間的な広がりとの関わりに着目して，社会的事象を見出すことのできる「問い」。	環境条件や他地域との結び付きなどを地域等の枠組みの中で人間の営みと関連付けて考えることのできる「問い」。
歴史的分野	時期，推移や変化などに着目して社会的事象を見出すことのできる「問い」。	類似や差異などを明確にしたり，事象同士を因果関係などで関連付けたりして考えることのできる「問い」。
公民的分野	現代社会をとらえる概念的枠組みに着目して，課題を見出すことのできる「問い」。	課題の解決に向けて多様な概念を関連付けて考えることのできる「問い」。

表４　各分野における見方・考え方（着目する視点と追究の方法）

④ 教師による「発問」と子どもからの「問い」

本研究会でこれまで取り組んできた単元を貫く課題の設定と発問の工夫は，社会的な見方・考え方を働かせる「問い」と大きく関係している。

まず，単元をいくつかの小単元で再構成し，「単元を貫く課題」を設定することで，学習過程の中に自分の考えを捉え直す場面を位置付け，社会的事象のもつ意義を捉えさせることができる。そして，「単元を貫く課題」－「本時の課題」とつながりをもちながら授業を構成していくと，子どもたちから出される「問い」を構造化することができる。

なお，「問い」をもつ主体は子どもであり，課題を設定する場面や課題を追究する過程で子どもたちから出てくる「問い」を指す。子どもたちの「問い」を引き出すために教師から発せられるものを「発問」として，「問い」と「発問」を区別する。

設定された課題に迫るためには，教師からの発問の工夫が必要になる。授業における発問を分類し，その特徴をまとめると次のような表（**表５**）になる。発問を意図的に使い分けることで，社会的な見方・考え方を働かせ，民主主義の担い手を育てるための授業展開が可能になる。

発問の種類	特　　徴	
「なに発問」	事実的な知識や事項を知るために必要な発問	→本質を問うものに発展させることも可能
「なぜ発問」	生徒を意欲的な追究活動の主体に導く発問	生徒の思考力を育てる
「どうなる発問」	未来予想型（未来を問うような）発問	
「どうする発問」	提案型発問（提案や行動に結び付くような）発問	

表５　授業における発問の分類

⑤　同じ社会に生きる多様な立場の人々に目を向ける

「民主主義の担い手に必要な資質・能力の育成」を，どのようにして授業の中に落とし込んでいけばよいのか。本研究主題においては，同じ社会に生きる多様な立場の人々に目を向けさせる学習課題や調査学習，話し合い活動などを想定している。自分たちとは異なる環境や文化，伝統，宗教などに目を向けさせることで，社会問題の民主的な解決に向かう姿勢や態度が育まれると考える。

民主主義においては，自分と他者とが同時に満足することを模索し続けるのではなく，より多くの納得が得られる意思決定が大切である。ただし，少数意見に耳を傾けることも忘れてはならず，多様な意見をもとに話し合う姿勢や態度を育てたい。こうした取り組みは，社会的マイノリティーの存在に目を向けることにもつながる。

さらに，授業者である教師の姿勢にも変化が生じるはずである。例えば，教師が教えたいことを整理して一方的に板書をする授業よりも，子どもたちの考えや意見を取り上げて授業を進める方が民主的である。「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を育むためには，民主的な風土を教室に築くことが大切である。授業者である我々教師が，改めて民主主義を強く意識する必要がある。

【注】

1) 高木展郎編著『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは –アクティブな学びを通して–』東洋館出版社，2016 年
2) 文部科学省　中学校学習指導要領解説　社会編　平成 29 年 7 月
3) 熊本県中学校教育研究会社会科部会『平成 24～30 年度・令和元～3 年度　研究紀要』
4) 日本教科教育学会編『今なぜ，教科教育なのか』文溪堂，2015 年
5) 藤瀬泰司「社会科授業研究における視点の構造転換–民主的な学校作りに寄与することをめざして」熊本大学教育学部藤瀬研究室特別講座, 2016 年
6) 藤瀬泰司『教科書（教材）「を」教える授業と教科書（教材）「で」教える授業は，何がどう違うのか？』熊本市社会科教育研究会主催　授業づくり研修会資料，2022 年
7) 澤井陽介・加藤寿朗『見方・考え方【社会科編】「見方・考え方」を働かせる真の授業の姿とは』東洋館出版社，2017 年

参考文献・資料

・『最新　教育キーワード　155 のキーワードで押さえる教育』時事通信社，2019 年
・熊本県教育委員会「熊本の学び推進プラン　熊本の未来の創り手となる子供たちの学び」，令和元年 12 月
・澤井陽介・唐木清志『小中社会科の授業づくり　社会科教師はどう学ぶか』東洋館出版社，2021 年
・宇野重規『民主主義とは何か』講談社，2020 年
・宇野重規『自分で始めた人たち–社会を変える新しい民主主義』大和書房，2022 年
・昭和 23 年・24 年文部省著作教科書『民主主義』径書房, 1995 年

ーメ　モー

〈地理的分野〉

分野の研究提案　熊本県中学校教育研究会社会科部会地理的分野部長
山鹿市立米野岳中学校　教諭　松山　誠一郎

学習構想案　熊本市立下益城城南中学校　教諭　矢部　彰人

研究発表

宮崎県	西都市立妻中学校	教諭	中武　秀一郎
長崎県	対馬市立雞知中学校	教諭	賀嶋　雅也
熊本県	上天草市立龍ヶ岳中学校	教諭	岸谷　祐太朗

地理的分野の研究提案

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む地理学習の探求
～地理的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

熊本県中学校教育研究会社会科部会地理的分野部長
山鹿市立米野岳中学校　　松山　誠一郎

公開授業の見どころ

本授業では，経済成長の期待が高まっているアフリカ州を取り扱う。「これからのアフリカ州を考えるためには，４つの課題をどのような順番で解決していくべきか」という学習課題を通して，アフリカ州が現在抱える課題について様々な「視点」から「問い」をもち,課題解決に向けた「方法」や「知識」を整理しながら学習活動を展開する。アフリカに滞在するＧＴ（ゲストティーチャー）には，アフリカ州の現状やこれからの可能性について語っていただく。単元での学びを根拠とし，アフリカ州の今後の展望について見方・考え方を働かせる活動を通して，アフリカ州に対する生徒の認識が変容していく姿に注目し，授業を参観していただきたい。

１　研究主題について

基調提案を踏まえ，地理的分野では「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を次のように整理した。

地理的分野における「民主主義の担い手に必要な資質・能力」とは,「様々に変化する地域社会を地理的事象(日本や世界の地域に関して位置や空間的な広がりとの関わりで捉えられる事物・現象)から地域的特色を捉えることを通して，現存する地域的課題に着目し，その課題解決のために私たちが今後どのようにして民主的に解決していけばよいか，今できること，そして将来できるであろうことを創造し，提起・提案していく過程の中で身に付けていくべき資質や能力のこと」であると捉えている。今回の九州大会においては，アフリカ州における地域的課題「砂漠化」「民族紛争」「貧困問題」「教育問題」に着目し,これらの課題に対しての「問い」を持つことで,アフリカ州における課題解決の方向性を考えていく。さらにアフリカ州がこれからの明るい未来のために解決すべきことについて，４つの課題をどのような優先順位で解決すればよいか，根拠をもとに提案していく過程の中で民主主義の担い手に必要な資質・能力を育めるような授業づくりに取り組んできた。

２　研究の視点について

熊本県中社研が示す研究の視点（目標・内容・方法）を，地理的分野の授業にあてはめると次のようになる。

（１）目標

単元の目標：①アフリカ州の自然環境や人々の生活，産業の特色に着目し，アフリカ州が抱える課題の原因や影響について理解することができる。②アフリカ州の地域的特色やアフリカ州が抱える課題を，多面的・多角的に考察し，優先して解決すべき課題やその課題について，考えることができる。③アフリカ州が抱える課題について知り，これからのアフリカ州の展望について考えることを通して，アフリカ州が抱える課題に目を向け，課題解決の意識を高める態度を養う。

本時の目標：課題解決の優先順位について考える活動を通して，これからのアフリカ州について自分なりに考えることができる。

（２）内容

学習指導要領の地理的分野の内容「Ｂ　世界の様々な地域」の「⑵世界の諸地域　③アフリカ州」を取り扱う。アフリカ州は植民地支配の歴史を抱え，「砂漠化問題」，「紛争問題」，「貧困問題」，「教育問題」など，様々な課題を抱えた地域とも言える。しかし近年では，広大な面積があること，人口増加に伴う労働人口の増大ならびに消費力の向上が期待されること，豊富な鉱産資源を保有することなど経済発展の要素を多く持っておりその可能性に期待が集まっている。

本実践では，「アフリカ州の課題と成長の可能性について知り，これからのアフリカ州について考えよう」という単元を貫く課題を通して，アフリカ州が抱える課題に目を向け，課題解決の意識を高める態度を養うことを狙いとしている。

（３）方法

地理的な見方・考え方を働かせる「問い」を中心とした学習活動を行う。

本授業では，単元を貫く課題として「アフリカ州の課題と成長の可能性について知り，これからのアフリカ州について考えよう」と設定した。なぜアフリカ州には砂漠化が起きているのか，貧困問題がなぜなくならないのか，十分な教育を受けられないのはなぜかなど，精選した図や表，グラフなどの資料を提示していくことで，生徒たちが自然とアフリカ州の課題について「問い」を発しながら，その解決に向けた取組の中に地理的な見方・考え方を働かせられるような工夫を行う。

３　地理的分野における研究の重点事項について

（１）地理的な見方・考え方を働かせる工夫

地理的な見方・考え方の捉え方には，①位置や空間的な広がり，②時期や時間の経過，③事象や人々の相互関係に着目して捉え（視点），比較・分類したり総合したり国民の生活と関連付けたりしていくこと（方法）が重要だと考える。思考力・判断力・表現力等の育成を図る学習活動を通してこそ身に付けられる資質・能力だといえる。

具体的には，これまで単元で学習してきたアフリカ州が抱える課題，「砂漠化」「民族紛争」「貧困問題」「教育問題」の中から１つを選び出し，それについてアフリカ州の自然環境や人々の生活，産業の特色に着目し理由を考えさせる。また，これら４つの課題については，どのような優先順位で解決していけばよいかという視点でも意見交換していく。こうした思考力・判断力・表現力等の育成を図る活動を通すことでより地理的な見方・考え方を働かせた根拠のある説明ができると考えた。

（２）主体的・対話的で深い学びのための資料提示の工夫

生徒たちが，社会的な見方・考え方を働かせながら「問い」を生み出していくためには，いくつかの段階的な学習過程が必要であると考える。

第一に，学習課題について社会的な問題をつかむ段階。ここでは，生徒たちが「問い」を発するような資料の提示が必要である。例えば，「アフリカ州には，チョコレートを食べることができない子どもたちがいるのだろうか」といった社会的な事実に向かう「問い」が，生徒に生まれるような資料を示すことが重要である。

第二段階としては，課題について追究する段階。本単元では，アフリカ州における「砂漠化」「民族紛争」「貧困問題」「教育問題」を追及するために，アフリカ州における歴史的背景やモノカルチャー経済，文化など考察する複数の視点に関する資料を提示することである。生徒の実態に即して，どのような資料を提示

した方がより主体的・対話的で深い学びになるかを十分検討する必要がある。

第三段階は，問題解決における段階。社会とのつながりを考えるための資料提示の工夫が重要。複数の視点から考察した考えや意見，思い等について，選択や判断，根拠などを交えながら，最終的な価値判断に向かうための「問い」ができるような資料提示が重要であると考える。

（３）ＧＴ（ゲストティーチャー）の効果的な活用

社会科の授業においてＧＴを活用するメリットは，①生徒たちの関心や意欲を喚起して当事者意識を高める，②教員にはない専門的な知識や技能，経験談などについて学習できる，③現地の方々との交流や関わりがあるからこそ聞くことができる貴重な考えや思いを学習できる，などが挙げられる。

今回ＧＴをお願いしたナイジェリア在住の一宮氏は，ビジネスと社会課題を解決することを両立させるという目標のもと，現地のスタートアップ企業と協力して新しい事業をおこしている。本時において，取り扱う４つの課題について，現地の目線から語ってもらい，生徒の課題に対する見方を広げさせたい。また同氏が思い描く「これからのアフリカ州」についての思いを生徒が知ることで，自らの考えに深まりを持たせたい。

４　公開授業までの取り組み

（１）熊本市中学校社会科研究会　学習会（R4.7.22）

熊本市社会科研究会と熊本県社会科研究会が一緒になって授業における組み立てを協議した。何かについて協議するというよりもこの会では，それぞれの意見を出し合うという学習会となった。本時の目標を，「モノカルチャー経済」を視点の中心として行った。授業構成の内容としては，企業側ではなく，現地の人々の視点で企業を誘致する視点で考えさせ，アフリカ州の自然環境や歴史的背景などを活用し，どのような産業が適切かを考えさせたらどうかなどが挙げられた。

（２）熊本県中学校教育研究会社会科部会　夏季研修会（R4.8.1）

夏季研修会の地理的分野部会では，単元を貫く課題として「日本よりも資源が豊富なのに，なぜアフリカ州の国々は経済発展が遅れているのだろう」がいいのではないかという意見をはじめ，「経済発展」の視点に立った授業づくりについて議論が交わされた。グループ討議中では次のような意見が出された。

- 映像「チョコレートを知らない子どもたち」を最初に見せて授業を行うと，自然と生徒たちの中から「なぜ，アフリカが発展しないのか」という生徒たちからの「問い」が出くるのではないか。
- 児童労働を扱った授業を行ったが，生徒たちの感想からは「募金をする」といった意見が多く思考を深める授業にはならなかった。
- 経済発展している国とそうではない国とあるため，そこを比較するのもいいのではないか。
- ＧＴの話を授業の最初に持ってくると，生徒たちに視点が与えられ，単元を貫く課題が生きてくるし，授業者が大切にしている「アフリカの人に寄り添って」という点で生徒が考えるのではないか。
- アフリカ州における様々な課題については，政治的背景もあるのでその点については注意をして行った方がよいのでは。ＧＴに２回出演してもらうのも選択肢の一つではないか。
- 様々な論点が出てくると思われるので，それを整理して日本として何ができるかを考えさてもよいのではないか。また，アフリカの現地の人として何ができるのかについても一緒に整理するといいのではないか。

（3）熊本市中学校社会科研究会　学習会(R4.8.23)

これまで出された意見を踏まえて授業の再構成を行った。この会では，指導計画や評価計画の見直しについて検討され，授業展開の中で，地理的な見方・考え方を働かせた「問い」になっているかどうかの協議が行われた。

・課題の設定については，「アフリカの人々」「外国企業」「私たち」の視点からそれぞれ調べたことを書き出し，グループごとに課題を設定(焦点化)し，解決策を出していったらどうだろう。しかし，発言の信憑性をどこまで求めるのか，根拠となる資料の収集がとても大事になる。
・「経済発展」ではなく，「豊かさ」の方向で考えるとよいのではないか。自然環境や紛争など様々な視点から考えられやすくなる。
・学習課題について，焦点化を図らないＧＴの話とマッチしていかない可能性がある。また，「経済」を主軸として多面的・多角的に考えさせるような授業展開もありなのではないか。
・課題意識を毎時間持たせていき，解決策はこれまで学んだことを自由に関連させてもいいのではないか。

（4）熊本市授業研究会(R4.10.4)

最終的に，これまでの協議の中で出された意見をもとに事前授業を行った。単元を貫く課題を「アフリカ州がよりよく発展するために，優先すべき課題は何だろうか？」と設定した。アフリカ州には，様々な課題があるが，その中から特に「砂漠化」「民族紛争」「貧困問題」「教育問題」の４つの課題を取り上げ，その後意見交換を行ったのち各グループで発表を行った。事前収録の動画でＧＴのお話を聞いた。

この事前授業では，本時の発問が適切であったかかどうか，参観者の先生方のこれまでの実践やアイデアをもとに，次のような意見が出された。

・「砂漠化」「紛争」は特定の地域で起こっているので，１つの国に設定して授業を行った方が良かったのではないか。
・ジグソー形式の活動を通して，生徒から意見が出てくると，さらに深められたのではないか。
・「よりよく発展する」は，明確化しないとわからないのではないか。
・ＧＴの話は，有効で日本の感覚からすると，「豊か」ではないが現地の状況について話を聞くことで生徒の思考を揺さぶることができたのではないか。

５　授業研究会における協議について

これまでの複数回にわたる授業づくり学習会の中で，アフリカ州における経済や教育，自然環境，貧困などを考察していく際，様々な視点について検討を重ねてきた。単元を貫く課題をどのように設定していけばよいのか，また課題解決のためにどのような視点を設けていけばより深い学びとなるのかなど，まだまだ検討の余地がある。その中で，九州大会本番では，学習課題を「これからのアフリカ州のために，４つの課題をどのような優先順位で解決していくべきか」と設定し，「砂漠化」「紛争問題」「貧困問題」「教育問題」の４つの視点をもとに優先順位を考えながら意見交換していくという構想に至った。

「アフリカ州」を題材として取り上げることで，私たちが今後どのようにして民主的に解決していけばよいか，今できること，そして将来できるであろうことを主体的・対話的で深い学びに向かう学習活動を通して，地理的分野の学習の中で，民主主義の担い手に必要な資質・能力を育んでいきたい。本時の授業については，「地理的な見方・考え方を働かせる問いを生み出すために，どのような資料や場面設定をしていけばよいか」を協議の柱として，ご参加いただきました方々から様々なご意見等をいただきたい。

社会科（地理的分野）学習構想案

期　日　令和４年１１月１８日（金）第２校時
場　所　熊本大学教育学部附属中学校　社会科教室
学　級　１年１組　３２名
指導者　下益城城南中学校　教諭　矢部　彰人

１　単元構想

単元名	第２章　３節「アフリカ州」（帝国書院 P.82～93）
単元の目標	(1)アフリカ州の自然環境や人々の生活，産業の特色に着目し，アフリカ州が抱える課題の原因や影響について理解することができる。 (2)アフリカ州の地域的特色やアフリカ州が抱える課題を多面的・多角的に考察し，優先して解決すべき課題やその課題の解決について，考えることができる。 (3)アフリカ州が抱える課題について知り，これからのアフリカ州の展望について考えることを通して，アフリカ州が抱える課題に目を向け，課題解決の意識を高める態度を養う。

単元終了時に期待する生徒の姿

アフリカ州が抱える課題と経済成長の可能性を学び，アフリカ州が抱える課題のうち，優先して解決すべき課題は何かを考え，アフリカ州の今後の展望について考える活動を通して，当事者意識をもって課題解決の意識を高めつつ，アフリカ州に対するポジティブなイメージをもった生徒。

指導計画と評価計画（９時間取扱い　本時８／９）

過程	時間	主に働かせたい見方・考え方と発問	身につけさせたい力 （知・技 ／ 思・判・表 ／ 態）
課題把握	1	【位置や分布】　【地域】 ・なぜアフリカ州にはチョコレートを食べることができない子どもたちがいるのだろうか。 ・なぜアフリカ州で日本人が働いているのか。	・「チョコレートを知らない子どもたち」の動画を視聴してアフリカ州が持つ課題を捉え，ナイジェリアで働く日本人の仕事内容を通して，アフリカ州の経済発展の可能性を知ることで，アフリカ州への関心を高めることができる。（態）
	単元を貫く課題：アフリカ州の課題と成長の可能性について知り，これからのアフリカ州について考えよう。		
課題追究	1 1 1 1 1	【位置や分布】 【人間と自然環境との相互依存関係】 ・アフリカ州の自然環境の，魅力と課題は何か。 ・なぜ砂漠化は起きているのか。 【地域】 ・なぜアフリカ州では，民族紛争が多く起きているのだろうか。 【空間的相互依存作用】 ・経済成長の期待をされているアフリカ州では，なぜ貧困問題がなくならないのか。 ・モノカルチャー経済がアフリカ州の人々にどのような影響を与えているのだろうか。 【空間的相互依存作用】 ・なぜアフリカ州の子どもたちの多くが，教育を十分に受けられないのだろうか。 【空間的相互依存作用】　【地域】 ・なぜ様々な立場から，アフリカ州の課題解決に向けた取り組みを行なっているのだろうか。	・アフリカ州の自然環境の特色や砂漠化が進行する原因や影響について理解できる。（知・技） ・アフリカ州の文化の特色や民族紛争が多い理由について，資料をもとに説明できる。（思・判・表） ・アフリカ州の貧困問題がなくならない背景について，モノカルチャー経済の視点から説明することができる。（思・判・表） ・アフリカ州が抱える教育問題の原因やその影響について理解できる。（知・技） ・アフリカ州が抱える課題に対する解決の取り組みを調べ，課題解決に向けて関心を高めることができる。（態）
課題解決	1 1 本時 1	【位置や分布】【場所】【自然環境】 【空間的相互依存作用】【地域】 ・アフリカ州が抱える課題(「砂漠化」「民族紛争」「貧困問題」「教育問題」)の中で，優先して解決すべき課題は何だろうか。 **・これからのアフリカ州のために，４つの課題をどのような優先順位で解決すればよいか。** ・自分が考えたアフリカ州になるために，自分自身が関われることは何だろうか。	・アフリカ州が抱える課題の中で，優先して解決すべき課題について選択し，自分の考えをまとめることができる。（思・判・表） ・課題解決の優先順位について考える活動を通して，自らが考えるアフリカ州の明るい未来について説明することができる。（思・判・表） ・前時で考えたこれからのアフリカ州になるために，自分が関われることについて考え，課題解決に対する関心を高めることができる。（態）

2　本実践のねらいと生徒の実態

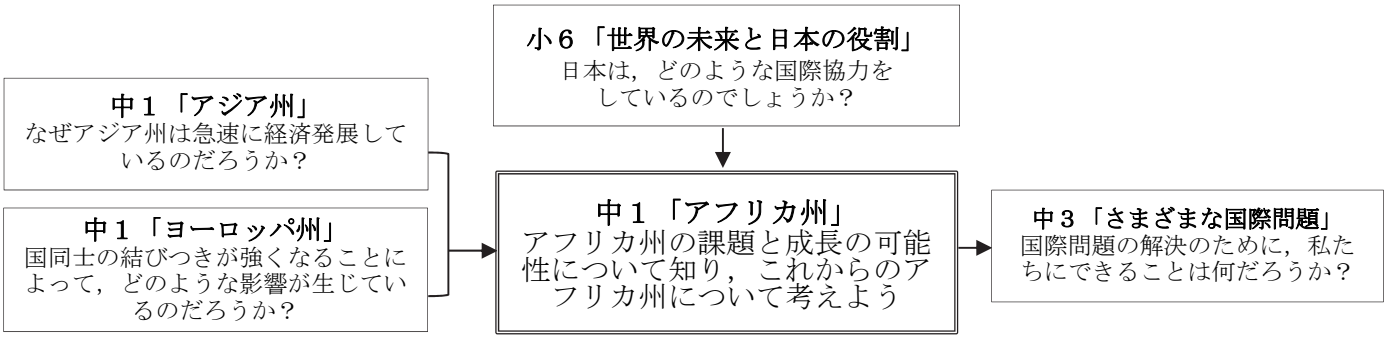
本実践（単元）のねらい

本単元は，学習指導要領の地理的分野における「B世界の様々な地域」の「(2)世界の諸地域」にあたる。アフリカ州は植民地支配の歴史を抱え，そのことに起因する経済発展の遅れや，砂漠化問題，紛争問題，貧困問題，教育問題など，様々な課題を抱えた地域と言える。しかし近年では，広大な面積があること，人口増加に伴う労働人口の増大ならびに消費力の向上が期待されること，豊富な鉱産資源を保有することなど経済発展の要素を多く持っており，その可能性に期待が集まる。また2022年8月に開催されたTICAD8で岸田総理大臣は「日本はアフリカと，ともに成長するパートナーでありたい」と述べた。「ともに成長するパートナー」として，アフリカ州が抱える課題について考察し，解決しようとする態度が求められているのではないかと考えた。

本実践では，「アフリカ州の課題と成長の可能性について知り，これからのアフリカ州について考えよう」という単元を貫く課題を通して，アフリカ州が抱える課題に目を向け，課題解決の意識を高める態度を養うことを狙いとする。生徒が対話的な学びを通して，課題に気づくこと大切さを体感し，これからの社会科を学ぶ意欲も高めていく。

そこで，アフリカ州に進出する企業のナイジェリア法人代表であり，ナイジェリア在住の一宮氏をゲストティーチャーとして取り上げる。一宮氏は，現地のスタートアップ企業と連携して，現地の人と共に新しい価値を生み出している。アフリカ州で働く人から，アフリカの実情を知り，課題解決に向けて働きかける姿勢を学ぶことで，「課題の多いアフリカ州」という見方から，「伸びしろのある，多くの可能性を秘めたアフリカ州」というイメージ転換を図りたい。

本単元における系統



生徒の実態（単元の目標につながる学びの実態）

■本単元を学習する以前の内容理解　（単位：２９人）

調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない
アフリカ州がどこにあるか説明することができる	６	６	８	９
アフリカ州にある国名を知っている。	２	０	１７	１０

■本単元の学習に関する意識の状況　（単位：２９人）

調査内容	
アフリカ州と言えば何を思い浮かべるか？（複数回答）	・動物が多い：11人　・砂漠：９人　・ピラミッド：５人　・サバンナ：４人 ・発展途上国：３人　・暑い：２人　・紛争：２人　・黒人：２人 ・石油：１人　・ナイル川：１人　・民族：１人　・原始的：１人 ・貧困：１人　・猿人：１人　・乾燥帯：１人　・自然：１人 ・工業：１人　・カカオ：１人　・人口が多く面積が広い：１人
アフリカ州のイメージは？（二択）	・発展している　９人　・発展が遅れている　２０人
アフリカ州が抱える課題について，どのようなものがあるか？	・わからない：２４人　・貧困：３人　・医療機関が少ない：１人 ・教育格差：１人　・経済発展の遅れ：１人　（複数回答）

■考察

生徒のアフリカ州に対するイメージは，「動物が多い」や「砂漠」など自然環境に対する視点が多く見られ，歴史的な側面や経済的な側面を捉えている生徒は少数である。また，発展が遅れているイメージをもつ生徒が７割ほどいる。アフリカ州が抱える課題については，「貧困」「医療機関が少ない」「教育格差」という課題を捉えている生徒もいる一方，「わからない」を回答する生徒が２４人いる。

そこでまず，アフリカ州がどのような地域なのか現状把握させて，課題追究に臨む必要がある。そして，身近な事例や映像資料など活用して課題意識を高める手立てが必要と考える。生徒同士の対話的な交流を促し，授業の中で課題に対する認識を共有し，高めていきたい。

3　指導に当たっての留意点

○単元の毎時間で効果的な資料を提示して，アフリカ州の課題と発展の可能性を視覚的に捉えさせたい。
○授業アプリケーションのロイロノートを活用して，単元全体を捉えやすいように授業テキストを整理させる。
○アフリカに住む人々が貧しいというような安易な考えにならないよう人権教育の視点からも十分配慮する。

4　本時の学習

(1) 目標　課題解決の優先順位について考える活動を通して，これからのアフリカ州について自分なりに考えることができる。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 (◇予想される生徒の発言)	指導上の留意事項
導入	3分	1　同じ課題についてまとめたグループで，前時の確認を行う。	○前回の学習でまとめた課題を確認させる。 ○どれも重要な課題であるが，一つ一つ解決していく必要性を話し，本時の学習課題を提示する。
		【学習課題】これからのアフリカ州のために，４つの課題をどのような優先順位で解決していくべきか。	
展開	22分	2　「砂漠化」「民族紛争」「貧困問題」「教育問題」を考察した４人班を作り，それぞれの考えを発表したのち，班で解決すべき課題に優先順位をつけ，これからのアフリカ州について考えをまとめる。	○班の中で，優先順位をつけさせ，そのように序列した理由について根拠を明らかにして考えさせる。 ○班のそれぞれが最優先に解決すべき課題は違うことから，対話を通して，その班の最適解を導かせる。
	15分	3　各班が全体発表する。 ◇「砂漠化」→「民族紛争」→「貧困問題」→「教育問題」の順に解決すべきです。なぜなら「砂漠化」が食料問題や土地の奪い合いを生み出しているからです。さらに，砂漠化問題の解消は地球温暖化にとっても重要なことなので最優先に解決すべきです。そして「民族紛争」がなくならなければ，住み場所も追われ，働くこともできない人が減らないでしょう。砂漠化や紛争などの周りの状況が解決されてから「貧困問題」に取り組まなければいけないと思います。貧困状態が少しでも解消したところで，将来のことを考え，「教育問題」にしっかりと力を入れていくべきです。 　このように課題を解決していけば「地球環境を救い，協力して発展し合うアフリカ」になれると思います。	○班活動で随時必要な資料等を提示し，班での思考を促すようにする。 ○全体共有して，発表に対する生徒の反応(良い点や疑問点など)を聞き出し，生徒間の対話を生み出す。 ○解決の順序が同じでも，理由が異なっているものを発表させる。 ○アフリカ州やアフリカ州に住む人々の未来像を共有する。 ○生徒の思考を揺さぶる資料を提示し，生徒の思考を深める。
終末	5分	4　発表を通して，個人で考えをまとめる提出する。	○発表者の提出物をモニターに写して全体で共有する。
	5分	5　GT の話を聞き，感想を発表する。	○生徒の発言から「自分たちが関われること」を引き出し，次の学習へつなげる。

(3) 本時の評価

評価の観点	評価基準
思考・判断・表現	A：課題解決の優先順位を，他者の意見と比較しながら考察することを通して，これからのアフリカ州について，アフリカの人に寄り添った考えを持ち，表現している。
	B：課題解決の優先順位を考察することを通して，これからのアフリカ州について自分の考えを持ち，表現している。

地理的分野研究発表

社会について考え続ける主体を育む社会科学習の創造
～社会的な見方・考え方を働かせる「単元構成」と「授業のフレームづくり」を通して～

宮崎県西都市立妻中学校　教諭　中武　秀一郎

Ⅰ　はじめに

今後の激変する時代を生きていく生徒たちに，よりよい社会の在り方について考え続ける態度を育むことが大切であることは改めて言うまでもない。そのため，宮崎県中学校教育研究会社会科部会（以下，宮中社研）ではこの２０年余，本主題とほぼ同じテーマについて，１単元１サイクルの概念探究型の学習過程をベースとしながら研究を進め，一定の成果を上げてきた。しかし一方で，次のような課題も指摘されてきた。

①研究対象とする学習内容が１単元にとどまってしまっていること。

②育成したい力の「転用」についての評価が，ほとんどなされていないこと。

一方，私が勤務する妻中学校を含む，市内６校の社会科の教職員により構成される西都市教科等研究会社会科部会（以下，西都市社研）では，３年前より「単元を貫く学習課題（以下，「ＢＱ」）」と「毎時間の学習課題（以下，「ＳＱ」）」との関連を意図した授業づくりを積み重ねている。私自身も，昨年から同様の実践研究に取り組んでおり，学習者の主体的な学びを促進したり思考を鍛えたりする上で一定の成果を上げることができた。今後，社会の在り方について考え続ける態度を更に育成するためには，学習者が既習の社会的事象に自分の解釈を踏まえ，課題についての答えを自ら練り上げていくことのできる能力を身に付けさせたいと考えている。

そこで，こうした西都市社研の研究成果と展望を踏まえながら，上述した①・②の課題解決にアプローチしていきたいと考えたのが本研究の動機である。

Ⅱ　社会について考え続ける主体とは

宮中社研では，社会について考え続ける主体を「社会的事象の矛盾に気づき，習得した知識や技能をもとに，よりよい社会形成と自己のために的確な応答ができる学習者」と定義している。

このような学習者を育成するためには，学習指導要領解説に記載されている「主権者として，持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養」や「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」につながるような授業を目指す必要があると考える。

そこで本研究では，宮崎大学・藤本将人准教授の「授業で取り扱う問いの構造」を参考に，学習者が学びを活かすことのできる「単元構成の工夫」と，主体的・対話的で深い学びを促進するような「学習活動の工夫」を行うこととした。これらの工夫により，まず学習者が「新しいことを知りたい」という思いに支えられた知識や技能を身に付け，それに自分の解釈を加えた「伝えたい意見」を構成させる。そしてその意見を持ち寄り，「伝えたい」「聞きたい」という思いをもちながら議論を重ねる中で，比較や関連付け，批判的な見方などが起こり，社会について主体的に考える態度を育てていくことができると考える。また，課題の答えにたどり着いた後も再び新たな課題に気づき，「こうするともっといいのでは」という視点をもつことで，当該授業で身に付けた見方・考え方をその授業以外の場面でも活かすことができるようになる。本研究では，このような姿の育成を目指すこととし，地理的分野の「日本の諸地域」及び「地域の在り方」の内容を研究対象とする授業を構成していくこととした。

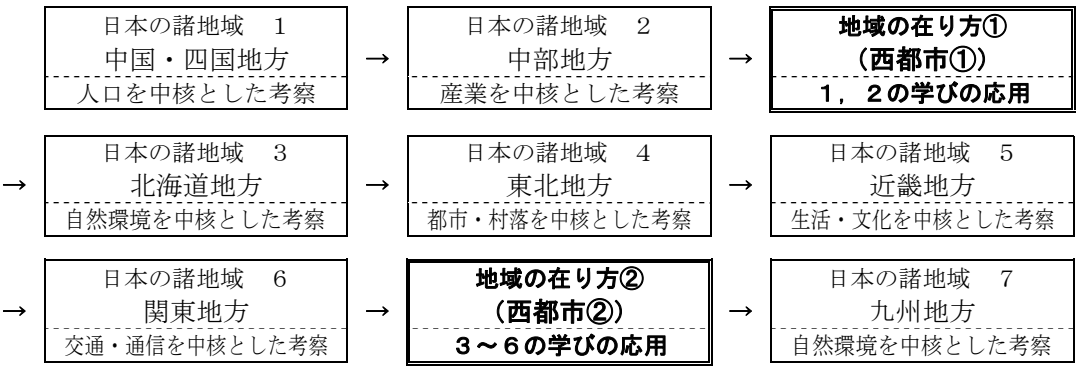
Ⅲ　社会について考え続ける主体を育成する授業の構想

1　学習者が既習の学びを転用していける「単元構成の工夫」について

「日本の諸地域」の学習においては，主題に基づいて課題を探究したり解決したりする活動を通して，地域的特色や地域の課題を理解することと，地理的事象や課題を地域間で関連付け，多面的・多角的に考察し，地理的な思考力，判断力，表現力等を身に付けることを主なねらいとしている。しかし，取り扱う地域や事象，課題等は，必ずしも生徒にとって身近なものとは言えないため，構成の仕方によっては，知識定着のウェイトが大きくなり過ぎたり，地域間の関連が上手く図れなかったりする恐れがある。また，「地域の在り方」の学習においては，地理的な課題について多面的・多角的に考察し表現する力を身に付けることが求められているが，学習者が地域の実態や課題解決のための取組を理解し，自分が暮らす地域について主体的に考え続けるには，各単元で習得する見方・考え方の有機的な関連付けが特に重要であると考える。

そこで本研究では，「地域の在り方(西都市)」を二単元に分割して「日本の諸地域」の単元間に組み込む単元構成**【図１】**を行い，「日本の諸地域」の学習で獲得した地理的な見方・考え方を，他地域の学習や「地域の在り方」の学習に転用させていくこととした。なお，各単元の授業を通し身に付けさる地理的な見方・考え方は，**【図２】**に示すとおりである。

【図１】「日本の諸地域」と「地域の在り方」の指導の流れ



このような単元の配列を行うことで，例えば，**「地域の在り方①」**の学習においては，西都市が抱える課題について中国・四国地方で習得した人口増減の視点を用いて説明したり，西都市の農業の特色を中部地方で獲得した農業の地域的特色の背景と関連付けてとらえたりすることが可能となる。また，後半に設定する**「地域の在り方②」**の学習には，更に多くの見方・考え方を身に付けて臨むことができるため，地域的課題についての考察の深まりと，地域の展望についてより主体的に自分の意見をまとめることが期待される。

あわせて，本研究では，後述する授業のフレームワーク**【図３】**をもとに，各段階の授業を構成している。この中で，単元を貫く学習課題「ＢＱ」と各段階の学習課題「ＳＱ」の関連を意図し，各段階での「ＳＱ」の答えを積み重ね，「ＢＱ」の答えの深まりを図ることとした。

このように，「地域の在り方(西都市)」と「日本の諸地域」の学習において，学習者が既習の学びを転用することができる単元構成を工夫することで，地理的な思考力，判断力，表現力等を身に付けるとともに，地理的事象や地域的課題を多面的・多角的に考察し，よりよい地域の在り方について考え続ける態度を育てることができると考えている。

【図２】「日本の諸地域」と「地域の在り方」の単元構造図

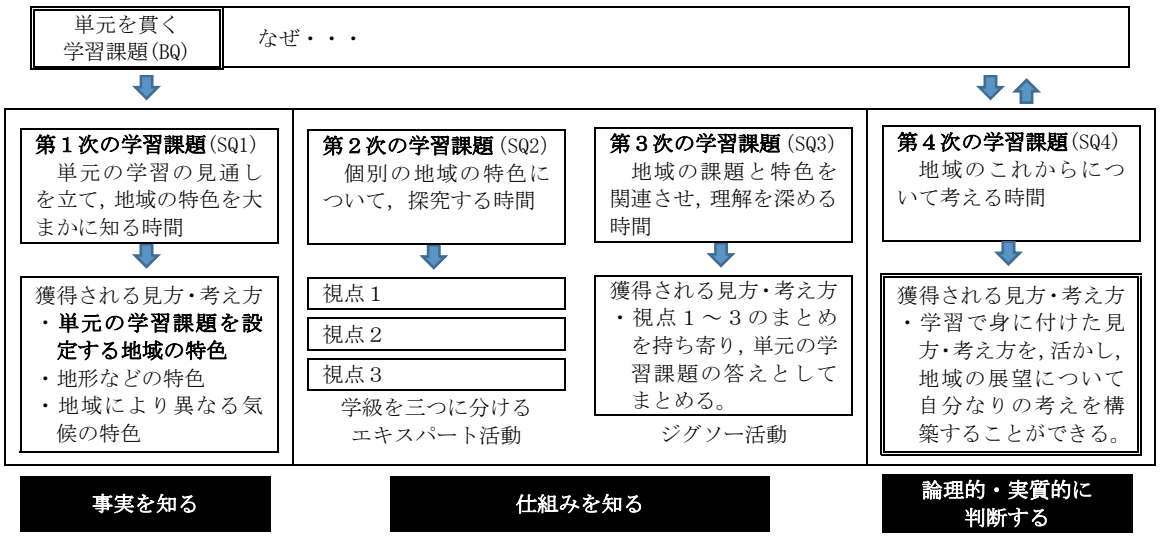
単元名	身に付けさせる地理的な見方・考え方	配当時間
日本の諸地域１ 中国・四国地方～人口を中核とした考察～	瀬戸内海沿岸の都市で工業や交通が発達した結果，山間部や農村部から都市部への人口移動（ストロー現象）が見られるようになり，地域内での人口の偏りが顕著になった。	5
日本の諸地域２ 中部地方～産業を中核とした考察～	東海・中央高地・北陸での気候の違いや，陸上，海上の交通網を利用した他地域との結びつき，それらと関連した歴史的背景等を理由に，地域の中でも産業に異なる特色が見られる。	5
地域の在り方① 西都市①～人口，産業，自然環境を中核とした考察～	他地域への流出や出生率の低下により，西都市の人口は年々減少している。人口減少を抑えるため，気候を活かした農業や観光業をより活性化させ，魅力を発信することが望まれる。	4
日本の諸地域３ 北海道地方～自然環境を中核とした考察～	広大な土地の改良による農業，養殖漁業を導入した漁業などで特産物を増やしたり，厳しい気候を観光資源としたりすることで地域の魅力を生み出してきた。	5
日本の諸地域４ 東北地方～都市・村落を中核とした考察～	東北地方では近年，高速道路の整備に伴い工業団地が建設されている。反面，人口減少の影響もあり，伝統産業や伝統行事の面では高齢化と後継者不足が課題となっている。	5
日本の諸地域５ 近畿地方～生活・文化を中核とした考察～	都市部では，人口問題への対応や商業地，行楽地の整備のため都市開発が進められてきたが，京都，奈良などの古都としての魅力も守り続けており，どちらも近畿地方の魅力である。	5
日本の諸地域６ 関東地方～交通・通信を中核とした考察～	首都東京には，政治，経済，教育などの中枢が集中しており，交通網も東京を中心に整備されている。大消費地であるため，周辺地域での近郊農業も盛んである。	5
地域の在り方② 西都市②～まちづくり，生活・文化，交通を中核とした考察～	歴史を中心としたまちづくりと市街地の活性化が図られている。道路も整備され，他地域とのアクセスにも便利である。市の魅力を発信し，広く移住者を募っている。	4
日本の諸地域７ 九州地方～自然環境を中核とした考察～	九州北部では広い平野での稲作，南部ではシラスでの畑作や畜産，また，温泉や温暖な気候を活かした観光業等，自然環境を利用した産業が盛んであるとともに，自然災害も多い。	5

２　主体的・対話的で深い学びを促進する「学習活動の工夫」について

生徒が生活する，宮崎県西都市を取り扱う「地域の在り方」の学習においては，上述した「日本の諸地域」の学習で身に付けた地理的な見方・考え方を活かすとともに，西都市の地理的な課題について生徒が主体的に考え続ける態度を育むことが求められる。そのためには，授業の中で他地域の特色や地域的課題との比較や関連付けを行わせることや，資料等から読み取ることのできた情報に自分の解釈を加え説明したり，意見交換をしたりする活動を十分に取り入れていくことが重要である。しかし，「日本の諸地域」と「地域の在り方」の全単元において，生徒主体の課題探究活動を十分に行おうとすると，学習者・授業者ともに負担が大きくなることや，時間的な制約もあることから，私自身，この単元の扱いには長年苦慮してきた。

そこで本研究では，学習者が自分たちの力で課題探究に取り組むことができるよう，**【図３】**のような授業フレームを作成し，各段階（第何次と表記）の授業を構成することとした。この中で，各段階の学習課題の関連を図るとともに，「第１次は事実を知る時間」「第２次，３次は仕組みを理解する時間」「第４次は論理的・実質的に判断する時間」と位置付けた上で，特に第２次において学級を三つのグループに分けてのエキスパート活動，第３次には学びを伝え合いながら学習を深めていくジグソー活動を取り入れることとした。ジグソー学習を取り入れることで，学習者が，自らが担当する視点について深く考え，他の学習者との話し合いを通して主体的に学習を進めることができる。また，この活動を通し，学習内容の習熟度の高まりが期待される。

【図３】「日本の諸地域」と「地域の在り方」の授業フレーム



※各段階は一単位時間で完結するとは限らないため，「第何次」と表記している。

以上のような授業フレームで学習内容や学習活動を構成することにより，学習者の主体的な学びによって社会的な見方・考え方が段階的に高まっていくような授業が展開しやすくなる。また，ジグソー学習を通し，学習者は，一人一人が違った視点を持つエキスパートとなり，「調べたことを伝えたい」という気持ちをもちながら仲間と協働して考えを出し合うことで，地域的特色についての理解をより深めることができる。これらを通し，学習者に「答えは自分たちで練り上げていくもの」という探究学習に向かう態度が身に付くことにより，単元を貫く学習課題の答えにたどり着いた後も，社会的事象について新たな疑問をもち，地域の課題（答えのない問い）に主体的に向き合い続ける姿勢を育成できると考える。

Ⅳ　研究仮説

上述の「Ⅲ　社会について考え続ける主体を育成する授業の構想」をもとに，次の二つの研究仮設を設定した。

A　学習者が既習の学びを転用していける単元構成を工夫すれば，社会について考え続ける力を育成することができるであろう。

〈下位の研究仮説〉

A①　ＢＱとＳＱによるフレームワークを用いた単元構成を行う。

A②　「地域の在り方(西都市)」を「日本の諸地域」の単元間に組み込む単元の配列を行う。

B　主体的・対話的で深い学びを促進する学習活動を工夫すれば，社会について考え続ける力を育成することができるだろう。

〈下位の研究仮説〉

B　三つの視点から課題を追究するジグソー法による学習活動を行う。

Ⅴ　実践例

１　学習指導案

第２学年３組　社会科学習指導案

指導者　中武　秀一郎

１　単元名　　地域の在り方①　西都市①～人口，産業を中核とした考察～

２　単元の目標

○　地図，雨温図やグラフなどの資料を関連付けながら，宮崎県西都市の自然環境や産業の特色，人口に関する課題を大まかにとらえ，地域の現状について理解することができる。（知識・技能）

○　現在，宮崎県西都市が抱える，人口減少などの諸課題に向き合う際，これまでの学習で身に付けた地理的な見方・考え方を使い，地域のこれからについての考察を深めることができる。（思考・判断・表現）

○　宮崎県西都市の，特色ある自然環境を活かした産業と人口に関する問題を関連させ，意欲的に学習課題を追究することができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３　指導観

○　本単元は，中学校学習指導要領社会科（地理的分野）の内容　C　日本の様々な地域，（４）地域の在り方を，（３）日本の諸地域の内容との関連を図り，４時間扱いで構成したものである。

西都市は，宮崎県のほぼ中央に位置する。市域の約８割が山林であり，二級河川である一ツ瀬川をはじめ多くの河川が市内を流れている。豊かな水と土，温暖な気候に恵まれた西都市では，施設園芸での野菜の栽培が盛んで，完熟マンゴー，きんかんなどの果実の栽培にも力を入れている。畜産業も盛んであり，野菜とともに，肉用牛の産出額は県内上位である。また，国の特別史跡に指定されている西都原古墳群を有し，歴史をテーマとした観光も市の魅力である。交通の面では，市の中心を通る国道 219 号線と東九州自動車道西都 I.C.の整備により，宮崎市や他県への移動時間も短縮されている。温暖な気候と他地域の施設とのアクセスのしやすさなどから，毎年，プロ・アマチュアを問わず多くのスポーツキャンプや合宿が行われている。

多くの魅力をもつ西都市であるが，県内多くの市町村と同様，人口に関する課題を抱えている。令和 2 年，西都市の人口は 28,500 人で，年々減少しており，令和 22 年には 20,000 人を切り，令和 42 年には 12,000 人台，高齢化率も 50%を超えると予想されている。

こうした西都市の地域的特色は，全国の多くの自治体にも共通するものだと考えられる。そのため，日本の諸地域の学習で身に付けた地理的な見方・考え方を転用させながら西都市の課題を探究していくことは，本単元内容の理解を深める上で有効なだけでなく，今後の様々な学習での思考を深めていくことにもつながると考える。

○　本学級は，「資料から情報を読み取り，自分の考えをまとめ，適切な文章にして表現することができる」ことに苦手意識を感じている生徒が少なく，多くの生徒が，授業での読み取り，まとめ，説明するという一連の活動に意欲的に取り組んでいる。しかし，読み取った内容に自分の解釈を加えて論述するという段階にはまだ至っておらず，授業での育成の必要性を感じている。

生徒に，「将来西都市で暮らしたいと思いますか？」と聞くと，半数以上の生徒が市外，県外に出て生活することを希望している。素直な意見であるが，生まれ育った西都市を今後も維持していくために，生徒自身が地域の実態をとらえ，活性化のための具体的な手立てを考えることは重要である。生徒自身が西都市に魅力を感じることが，地域的課題の解決のきっかけになるのではないかと考える。

○　そこで指導に当たっては，主として次の二つの手立てを講じることとする。

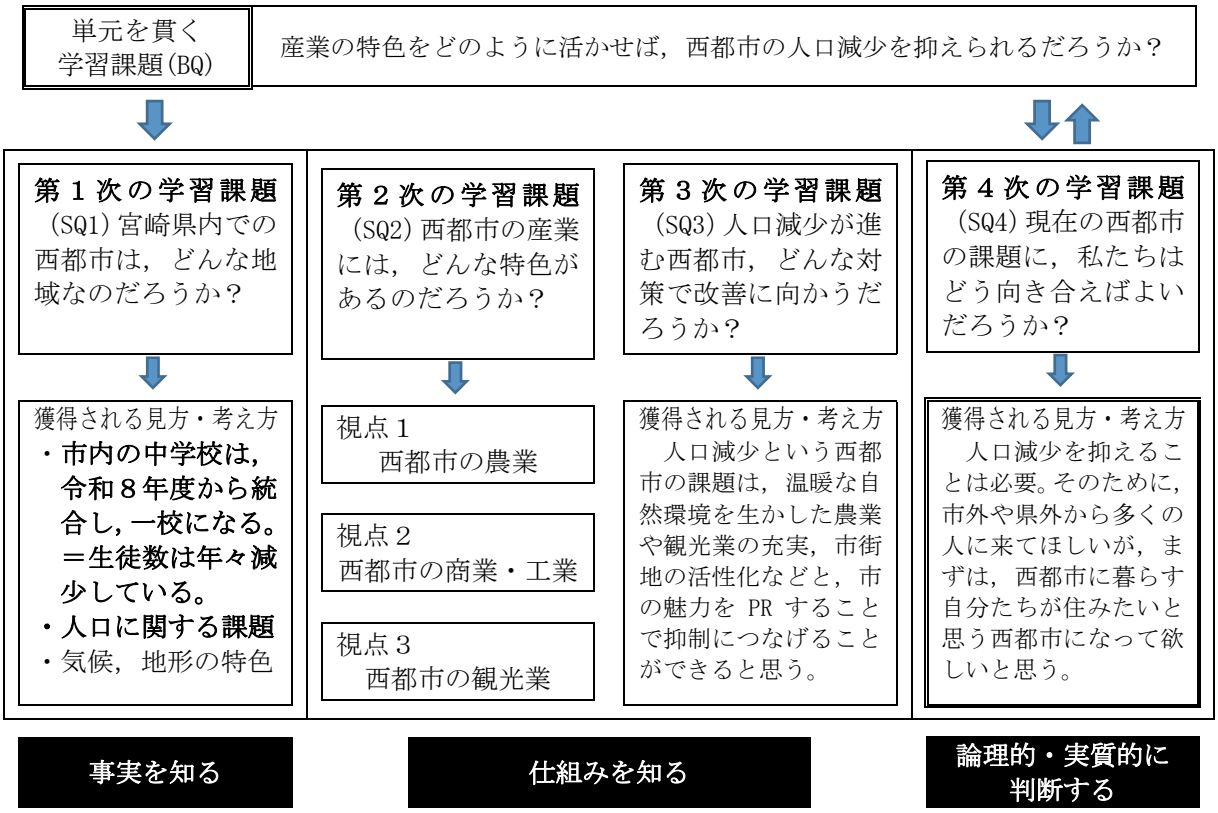
１：日本の諸地域の学習と関連した課題探究の視点）西都市の地域的課題を探究する上で設ける視点を，これまでの「日本の諸地域（２地域）」の学習で扱った人口，産業とすることで，学習で身に付けた地理的な見方・考え方を応用しながら考察を深めさせていきたい。

２：ジグソー的な学習形態）地域的課題についての考察を多面的に深めていけるよう，３つの視点に分かれて学んだことをグループに持ち帰るジグソー的な学習活動を取り入れ，各自の学びを伝え合いながら学習を深めていく学び方を習得させていきたい。

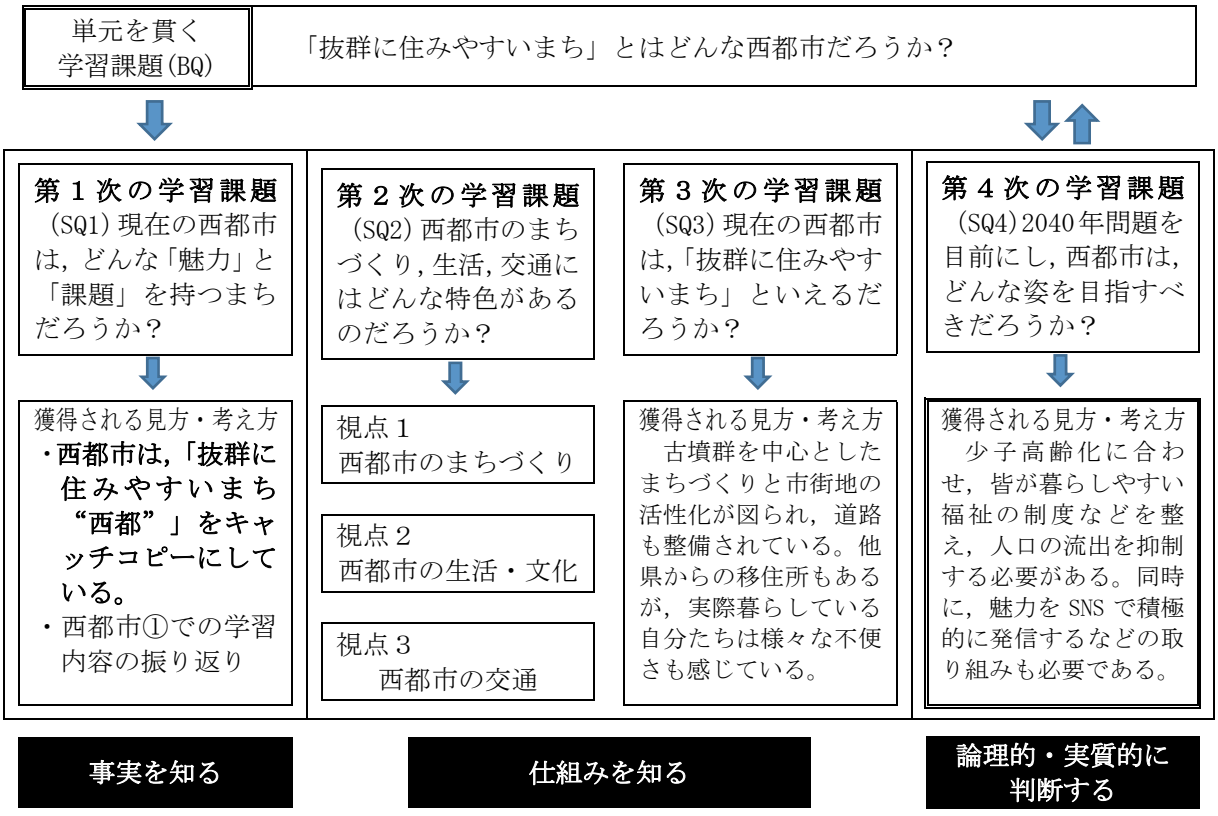
以上二つの手立てを意識し，授業を展開することで，現在西都市が抱えている地域的課題と，地域の魅力などをとらえ，これからの西都市が目指すべき姿を，生徒自身に考察させることができると考えている。

２　授業展開例

（１）「地域の在り方①　西都市①～人口，産業を中核とした考察～」



（２）「地域の在り方②　西都市②～まちづくり，生活・文化，交通を中核とした考察～」



地理的分野研究発表

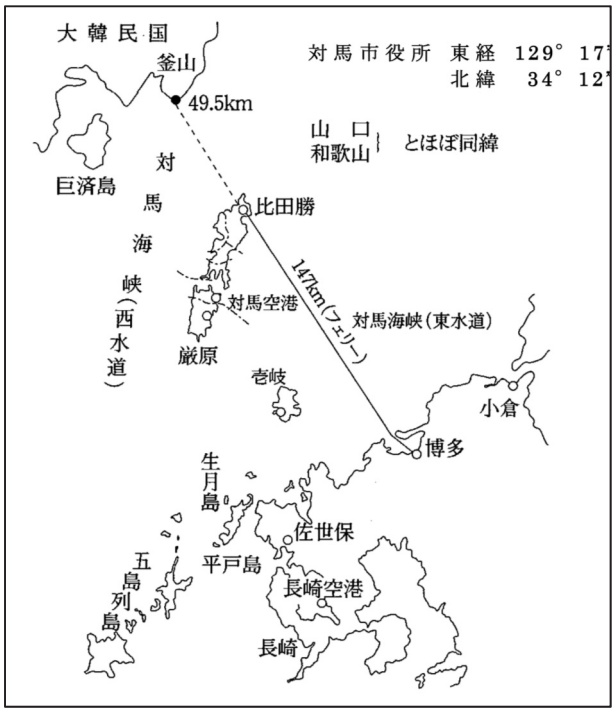
よりよい社会を形成するための力を育む社会科学習

～社会的な見方・考え方を生かし，一人一人の主体性を高める授業の工夫～

長崎県対馬市立雞知中学校　教諭　賀嶋　雅也

１　はじめに（対馬市を取り巻く状況）

対馬市は，九州と朝鮮半島の間に位置し，玄界灘に浮かぶ面積約 700k ㎡，人口約 28,000 人を有する国境の島である。韓国までの距離が約 50km，晴れた日には釜山の街並みが肉眼で見えるほど近いため，古くから日本と大陸との政治・文化の交流の拠点として，また，時には国防の最前線として，その歴史的役割を果たしてきた。



（長崎県対馬振興局発行「つしま百科」から引用）

近年は，日本政府のビザ要件緩和などのインバウンド政策や釜山との定期航路増便などの影響を受け，韓国人観光客が急増し，2018 年には年間 40 万人以上が来島するなど，島内が韓国からの観光客で溢れかえる状態となった。その結果，宿泊施設や飲食店などが増加し，働き手が不足するなど，島の経済は活況となり，さながらバブルの様相を呈する状況が見られた。しかし，2018 年 10 月に元徴用工訴訟で日本企業に賠償が命じられたことを契機に日韓貿易紛争が発生し，韓国人観光客は激減。新型コロナウィルス感染拡大が追い打ちを掛け，対馬経済は大打撃を受け続けている。まさにバブルが弾けた瞬間であった。

韓国との関係だけに留まらず，本年２月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は，これまでの国際秩序や日露関係を崩壊させた。台頭する中国，ミサイル実験を繰り返す北朝鮮など，不透明さを増す東アジア情勢において，地理的に最前線に位置する対馬は，こうした国際関係の動向に常に大きな影響を受ける存在である。

こうした背景を持つ本市では，生徒達に対馬の特色や良さを気づかせ，誇りを持たせるふるさと学習に力を入れている。過疎化・高齢化が急速に進み，地域の活力が失われつつある郷土への理解を深め，主体的に課題解決できる力を培い，世界的な視野に立って将来の対馬を担う人材を育成することは急務であり，社会科はその一翼を担う大きな使命があると考える。

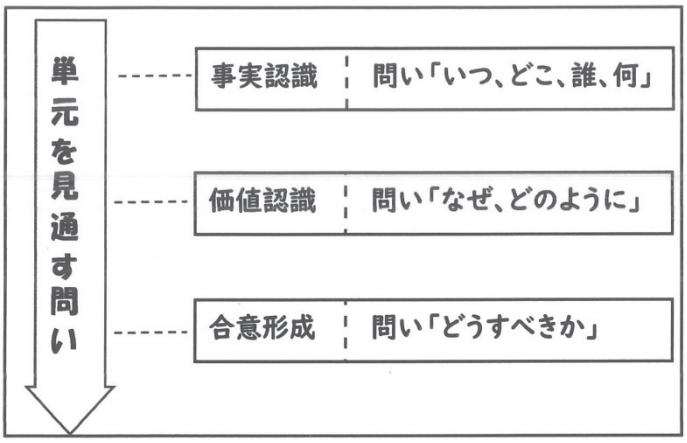
２　研究構想

長崎県では，研究主題に迫るため，これまでに「三つの学習」（事実認識，価値認識・価値判断，意思決定・合意形成）や「四つの能力」（多面的・多角的な考察，社会的事象の意味・意義の解釈，公正な判断，特色や関連の表現）を定義して研究実践に取り組んできている。対馬市の社会科部会においては，こうした研究や実践を踏まえながら，次の２点について研究を進めてきた。

（1）生徒の主体性を引き出す単元構想のあり方

第４８回全国大会で岐阜県が提案した単元構造図を参考に，各部員が分担して，平成 29 年度から３年間の年次計画で３分野の全単元の構造図を作成した（実践例参照）。それを基にしながら，長崎県が取り組む３つの学習等を単元の中に位置づけ，「単元を見通す問い」と「本時の問い」との関連を考慮しながら，生徒の主体性を重視した授業を構想し，研究授業を通してその有効性を検証した。（図１）

（図１）単元学習の流れ



（2）「単元を見通す問い」「本時の問い」の効果的なあり方

単元レベルで授業を構想するにあたって，生徒の主体性を引き出しつつ，教科の本質も追究していくためには，どのような問いを設定するかは極めて重要である。これまでの県の研究大会においても，「問い」が効果的であったかについての検証が不十分との反省も見られた。

そこで，授業で学ばせたい教材の価値と生徒の実態を踏まえ，「単元を見通す問い」や，それにつながる「本時の問い」を効果的に設定するための９条件を考案し，「主体的・対話的で深い学び」と関連づけながら「効果的な問いの条件」を整理してみた。

（図２）効果的な問いの条件

	観点	内容	生徒の反応
主体的	具体性	生徒にとって身近であったり、馴染みがあったりするような問い	「よく知っている。テレビなどでお馴染みだ。」
	意外性	既有知識やこれまでの経験とは逆だったり、異なったりするような問い	「あれっ、どうして。なんでだろう。おかしいな。」
	探究性	生徒の知的好奇心をかき立て、追究意欲が高まるような問い	「おもしろそう。やってみたい。どうしてそうなるのかな。」
対話的	計画性	課題に対して、調べ方やまとめ方、予定などの方向性が立てやすい問い	「こうすれば、なんとなく分かりそうだ。これについて調べれば良さそう。」
	対立性	賛成・反対など、議論が分かれそうな自らの価値判断が必要な問い	「どっちがいいのだろう。私はこっちの意見に賛成だ。」
	必然性	課題を追究することへの必要性や切実性が感じられるような問い	「人ごととは思えない。地域のためにぜひ考えてみたい。」
深い学び	本質性	単元の教材的な価値に迫れるような、学びがいのある問い	「社会を見る目がより拡がったり、深まったりした。」
	発展性	到達した答えから、さらに新たな問いが生まれやすいような問い	「さらに別の疑問が出てきた。この後はどうなるのだろう。」
	転移性	様々な事象に応用・適用できるような汎用性のある問い	「この場面にもあてはまりそうだな。あの学習でも使えそう。」

（図２）問いを設定するにあたっては，ここに示した条件を複数満たすような問いを中心とした単元構想が生徒の主体性を促し，友達と協働しながら，深い学びにつながっていくために望ましいものと考えている。

単元レベルで授業を構想する際の，また，部会や各学校で授業を行う際の評価の視点として活用し，問いの有効性について検討を進めている。

こうした取組を踏まえて実践した事例を紹介する。

3　実践の概要

（1）単元名　2年　第4章　「地域の在り方」

（2）単元構造図

単元名　地域の在り方 第4章　身近な地域の調査 （7時間）	指導要領上の位置づけ　ア　知識　　イ　思考力，判断力，表現力等 ア(ア)地域の実態や課題解決のための取組を理解すること (イ)地域的な課題の解決に向けて考察、構想したことを適切に説明、議論しまとめる手法について理解すること イ(ア)地域の在り方を、地域の結び付きや地域の変容、持続可能性などに着目し、そこで見られる地理的な課題について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること

これからの対馬の進むべき道はどっち？　国内重視？　海外重視？

単元の中心概念　対馬を訪れる韓国人観光客に動向ついて調べることを通して、対馬の地理的特性や特色を多面的・多角的に理解し、これからの韓国との望ましい関係を主体的に考え、判断し、提案させる。

課題1	対馬の観光客数の移り変わりは、対馬にどのような影響を与えたか？	
	急増の影響	急減の影響
1時間	○プラス　経済の活性化 ・消費額や宿泊施設数の増加 ▲マイナス　様々なトラブル ・マナー問題　・仏像盗難事件	▲マイナス　経済への打撃（北部地域） ・宿泊、飲食、小売業の売り上げの減少 ・雇用の悪化　・倒産や休業

課題2	近年、対馬を訪れる観光客が急増・急減したのはなぜか？	
	急　増	急　減
予想 1時間	・近いから、旅費が安いから ・対馬の自然が好きだから	・日韓関係が悪化したから ・新型コロナの影響

分類	地理的要因	歴史的要因	文化的要因	行政的要因	国際的要因
調査 1時間	・距離 ・自然	・良好な歴史 ・暗い歴史	・食文化 ・買い物	・インフラ ・イベント	・日韓貿易紛争 ・徴用工問題
	タブレットによる調査・まとめ				

発表 1時間	地理：距離約49.5㎞、移動1時間、片道8千円(ﾋﾞｰﾄﾙ)、韓国から最も近い外国 歴史：白村江の戦い、元寇、朝鮮出兵、朝鮮通信使、倭館、竹島 文化：自然豊かな観光地、郷土料理、登山、魚釣り、トレッキング、買い物 行政：国際航路整備、港の整備、姉妹都市縁組、音楽祭、国境マラソン、祭り 国際：日韓貿易紛争、徴用工問題、輸出規制

課題3	これからの対馬の進むべき道はどっち？　国内重視？　海外重視？	
	国内重視	海外重視
討論 3時間	・韓国だけに頼るべきではない ・国内客だと治安やマナーなどで安心	・コロナ終息後は、海外客が有望 ・位置的関係からアジアを重視すべき ・外国人に魅力的なコンテンツが豊富

生徒のゴールの姿　学習を通して、次のような見方・考え方を獲得する。

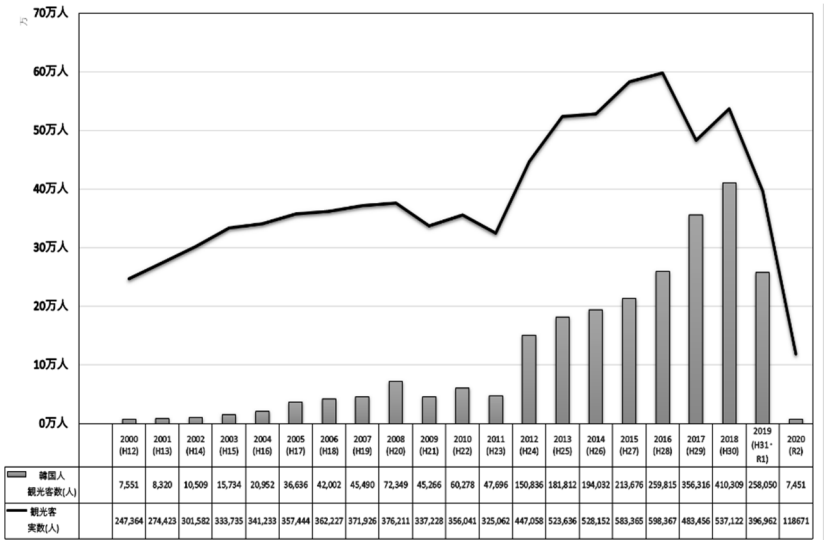
①対馬の地理的・歴史的特性を活かした韓国人観光客誘致は島内経済活性化につながったが、一方でそれが途絶えた場合の反動が大きい。（一極集中の良さや弊害、多角的経営やリスク分散の重要性）

②対馬の現状や課題、良さが理解できた。答えはわからないが、これからの対馬について真剣に考えた。

（3）単元の基本的な構想

地理学習の最後に位置づけられている本単元は，地域の実態や課題解決の取組を理解したり，その課題解決に向けて，多面的・多角的に考察，構想し，表現したりする力を育成することが求められている。これまでに積み上げてきた地理学習の成果を駆使し，実際の地域の課題やその解決のための取組について実践的に学ぶ，地理学習の総まとめとなる単元である。

そこでこの単元では，郷土対馬を訪問する観光客数の推移をキーとなる資料として取り上げ，特に韓国人観光客の動向について調べることを通して，対馬の置かれている地理的な特性について多面的・多角的に考察し，まとめ，表現する学習を設定した。



	2000 (H12)	2001 (H13)	2002 (H14)	2003 (H15)	2004 (H16)	2005 (H17)	2006 (H18)	2007 (H19)	2008 (H20)	2009 (H21)	2010 (H22)	2011 (H23)	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (H31・R1)	2020 (R2)
韓国人観光客数(人)	7,551	8,320	10,509	15,734	20,952	36,636	42,002	45,490	72,349	45,266	60,278	47,696	150,836	181,812	194,032	213,676	259,815	356,316	410,309	258,050	7,451
観光客実数(人)	247,364	274,423	301,582	333,735	341,233	357,444	362,227	371,926	376,211	337,228	356,041	325,062	447,058	523,636	528,152	583,365	598,367	483,456	537,122	396,962	118671

（資料１　対馬の観光客数の推移）

対馬は，朝鮮半島に最も近いという地理的条件から，平時には朝鮮通信使に代表されるような交流の窓口となったり，一方で元寇・文禄慶長の役・日露戦争・第二次大戦など，戦時には国防の拠点となったりするなど，朝鮮半島・アジア大陸からの影響を強く受けてきた。そのため，隣国の韓国との関係は，政治的・経済的に繋がりが強く，交流も盛んである。しかし，植民地時代の影響もあり，住民の意識は肯定・否定が入り交じり様々である。今回の学習では，こうした歴史的な経緯にも気づかせ，未来志向で韓国との関係について考え続ける生徒を育成することもねらいとした。

（4）授業の様子

「これからの対馬の進むべき道はどっち？　国内重視？　海外重視？」という，単元を見通す問いを設定し，主体的・対話的で深い学びの実現を目指して単元を構成した。

課題１：急増・急減の影響［事実認識］

対馬を訪れる観光客数の推移のグラフを元に，急増・急減が対馬に与えた影響をプラス面・マイナス面の視点で考察する事実認識の学習を行った。（資料２）

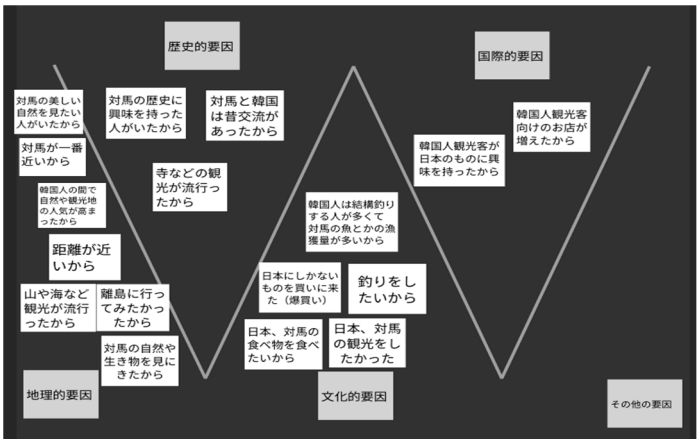
（資料２　タブレットを使用した班活動）

課題２：急増・急減の理由［価値認識］

対馬を訪れる観光客の急増・急減の理由について，各個人で予想を立てさせ，その予想した内容を班ごとに分類・検証する価値認識･価値判断の学習を行った。

その際，タブレット端末を活用して，シンキングツールで学習内容をまとめたり（資料３），発表ツールを利用してプレゼンを行ったりした（資料４）。

こうした比較や推論を通して多様な考え方に触れる機会を設定することで,「社会的な見方･考え方」を身に付けさせるようにした。



（資料３　シンキングツールの利用）

課題３：これからの対馬の観光は国内重視 or 海外重視？［意思決定］

意思決定･合意形成の学習として，課題１･２の学習成果を踏まえ，単元を見通す問いに対する自分の考えを表現する活動をディベート形式で設定した。（資料５）

［両者の主な主張］

国内重視派
・国内からの観光客は政治などの影響も少なく，安定した利益を得ることができるから。 ・マナーや習慣の違いから，対馬の環境が壊されるから。 ・日本人の方が対馬に来やすく，移住する可能性も高いため，人口増加につながるから。
海外重視派
・韓国を始め，海外の国との関係を良くしないといけないから。 ・日本や対馬の文化を，たくさんの外国の人に知ってもらいたいから。 ・海外の人がたくさん来る方が，利益が大きく，新たな雇用が生まれるから。

（資料４　急増・急減の理由をプレゼン）

（資料５　ディベートの様子）

単元のまとめ：これからの対馬の観光客数の予想と振り返り

今回の学習のまとめとして，キー資料である観光客数推移のグラフの今後 20 年の続きを予想させる課題を与えた。また，一連の学習を終えて考えたことを，それぞれにまとめさせた。（資料６）

（資料６ 学習のまとめのワークシート）

（５）成果と課題

生徒達が小学生の頃は，観光バスが島内を何十台も走り回り，町並みや観光地に韓国人観光客があふれかえる光景が日常的に見られた。そうした状況が瞬く間に消え失せた状況を実際に体験しているため，生徒達は観光客数の移り変わりという地理的事象が，地域に大きな影響を与えることを，今回の学習を通して意欲的に学んでいた。また，ディベートを通して，多面的・多角的に考察することの必要性や，地域を担っていく者としての自覚の高まりも感じられた。

一方，今回の学習の単元を見通す問いについて，前述の問いの条件に照らし合わせてみると，概ね次の条件に該当するものと思う。

・郷土資料を取り上げる⇒「具体性・必然性・本質性」
・観光客数の推移のグラフ⇒「意外性・探究性」
・単元を見通す問いを２択にし，ディベートを実施⇒「対立性」

複数の条件を含んだ問いであり，生徒達自身にとっても取り組みやすいものになったのではないかと考える。ただし，ディベート形式で国内重視か海外重視かの２択の設定については，現実的には０か 100 ではなく，どちらの要素も考慮すべき問題であり，例えば「観光予算の何割をどちらに充てるべきか」といった予算配分を議論させたり，昨年度の全国大会（東京）で提案のあった「在り方コンパス」という思考ツールを活用して３つの視点から考察させたりなどの工夫が必要と思われる。

４　今後に向けて

対馬市社会科部会では，今年度の県大会・九州大会の発表に向け，平成２９年度から単元構造図の作成や年２回の授業研究などに取り組んできた。十分深めることはできなかったが，今後も，生徒の主体性を高める単元構想や効果的な問いのあり方，基本的事項の精選などについて，研究を継続していきたいと考えている。

研究発表

地理的分野研究発表

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求
～地理的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

熊本県上天草市立龍ヶ岳中学校　教諭　岸谷　祐太朗

1　はじめに

龍ヶ岳中学校のある上天草市龍ヶ岳町は，全域を雲仙天草国立公園に指定されており，天草富士とも呼ばれる龍ヶ岳からは美しい海に浮かぶ天草や鹿児島の島々に加え，遠く阿蘇山も望むことができる。このような豊かな自然に囲まれながら，本校では１年生 20 人，２年生 26 人，３年生 17 人が，学校教育目標「独立自尊～自立への一歩～」のもと，自立に向けて日々の勉学に励んでいる。

さて，龍ヶ岳町をはじめ天草全体が抱える大きな課題は，少子高齢化や過疎化に伴う人口減少である。特に，龍ヶ岳町内の高齢化率は年々高まっており，限界集落の目安である 50%を超えている地区もあるほど厳しい現状である。この現状を目の当たりにし，「天草で生まれ育った一人として，社会科教員の一人として私にも何かできることはないか」という熱意が年々高まっていった。

そのような折，令和３年度熊本県中学校社会科教育研究大会で地理的分野の公開授業を行う機会をいただいた。本研究を通して，生徒に民主主義の担い手として必要な資質・能力の素地を育みたいという思いで研究に取り組んだ。

2　研究主題との関連

資料１ 生徒への事前アンケート（一部）

あなたは、天草のことが好きですか。　17/17人

好き	どちらかというと好き	あまり好きではない	好きではない
9人	6人	2人	0人

中学校卒業後、あなたはどこで生活をしていると思いますか。

A:進学や就職，その後も，ずっと天草に住み続ける。	1人
B:進学や就職で１度天草を離れるが，いつか天草に戻ってきたい。(Uターン)	5人
C:進学や就職で天草を離れ，そのまま天草に戻ってこない。	１１人

まず，本校生徒には右の資料１の通り，「天草のことは好きだが，将来も天草に住み続けようとは考えていない」という実態がある。天草を離れたい主な理由は，「不便」，「娯楽がない」，「進学先や就職先が少ない」といったものであり，天草に対してネガティブなイメージを持っている生徒が多いと感じたため，天草を少しでもポジティブに捉えてほしいという願いがあった。

そこで，研究主題の「民主主義の担い手に必要な資質能力を育む社会科の探求」に基づき，地理的分野において，地域的特色を捉え，過疎化や高齢化など地域的課題に向き合う学習を通して，今できること，そして将来できるであろうことを提案することで，地域の一員として積極的に社会参画する意欲や態度が育つような授業を構想した。

そして，研究主題の掲げる新しい視点に照らし，目標は単元終了時に生徒に期待する姿を目指し，内容は実生活に関連した資料を関連付けながら，方法は自分の将来に応じた天草（郷土）との関わり方を提案することと捉え，授業づくりを始めた。

また，副題に関して，特に身近な地域（天草）と他の地域（中国・四国地方）を関連付ける単元構成や，実生活に関連した資料の活用，天草の課題の調査・プレゼンテーション作成などの手立てを行えば，生徒の学習意欲（主体性）が高まり，「問い」を引き出すことができると考えた。

３　研究の仮説

中国・四国地方での学びを基に，郷土である天草の地域的特色や課題を捉え，今の自分と将来の自分にできる「地域おこし」を提案することができれば，地域住民の一員として主体的に社会参画しようとする意欲が高まり，民主主義の担い手に必要な資質・能力を育むことができるであろう。

（１）「民主主義の担い手に必要な資質・能力」の捉え方について

熊本県中学校教育研究会社会科部会では，「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を次のように捉えている。

よりよい社会と幸福な人生をつくり出すために，社会の問題に気付き，多様な他者と共に社会の問題の解決に向かう態度および公正に判断する力。

上記の内容を踏まえ，本実践では，生徒の「よりよい郷土にしたい」，「自分の夢も大事にしたい」という思いを基に，郷土の課題に気付き，自分にもできる「地域おこし」をクラスメイトやゲストティーチャーらと共に考える活動を通すことにより，社会の諸問題と主体的に向き合う態度や公正に判断する力の育成につながるであろうと考えた。

４　研究の視点

研究の視点にそったイメージ図は，図２の通りである。

（１）目標：何ができるようになるか

本単元の学習が終了した際に期待する生徒の姿は，次の通りである。

「交通・通信網」の整備が地域の産業や人口などと深い関係をもっていることを理解し，過疎化や高齢化など地域の課題に向き合う学習を通して，地域住民の一員として主体的に社会参画しようとする生徒。

上記のような生徒に近づくためには，単元を通して主体的に学ぼうとする意欲が必要である。そのため，天草の現状や課題と共通点が多い中国・四国地方を関連付けた単元構成にすることで，自分事として課題を捉えさせることに重点を置いた。

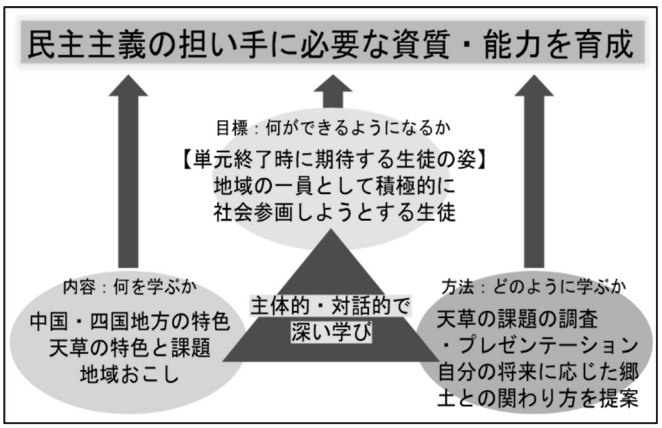
（２）内容：何を学ぶか

内容に関しては，「教科書を学ぶ」ではなく「教科書で学ぶ」ということを念頭に，実生活（郷土）に関連した資料の活用や調べ学習を通して，新たな知識・技能を主体的に獲得させることに重点を置いた。

（３）方法：どのように学ぶか

方法に関して，天草の課題を調査する活動では，複数の資料を基に地理的な見方・考え方を働かせて得た「問い」についてプレゼンテーションを行ったり，自分の将来像に応じた多様な視点から考察させたりすることに重点を置いた。

図２ 研究の視点イメージ図



５　研究の実際

（１）目標：何ができるようになるのか

①単元を貫く課題の設定（第１次）

中国・四国地方の人口増加率や龍ヶ岳町の高齢化率（資料３），事前アンケート（資料１）の結果を比較することで，次のような気づきが生まれた。

資料３ 龍ヶ岳町等の高齢化率

龍ヶ岳	４７．１％	全　国	２６．６％
高　戸	４２．８％	熊本県	３１．１％
大　道	４６．５％	天草市	３７．２％
樋　島	５２．０％	上天草	４２％

限界集落＝高齢化率５０％以上

生徒Ａ：「中国・四国地方と龍ヶ岳町には同じ課題がある。」
生徒Ｂ：「自分の進路選択が，高齢化や過疎化と関係があるけど，自分の将来も大事。」
生徒Ｃ：「もし天草を離れても，郷土は１つしかないし，大切に思う気持ちは変わらない。」
生徒Ｄ：「郷土が衰えるのは悲しいという感情は，私たちも中国・四国地方の人たちも同じ。」

このような生徒の気づきを集約する形で，単元を貫く課題は次のように設定された。

『それぞれの郷土と「ずっと関わり合っていく」ためには，どんな「もの・こと・ひと」が必要なのだろう』

②単元構成の工夫

先述した「単元を貫く課題」を解決する中で，「単元終了時に期待する生徒の姿」に近づくために，中国・四国地方の学習を生かして天草の課題解決に迫る単元構成（資料４）を行った。

中国・四国地方は，天草と同じ過疎化や高齢化という共通の課題を抱えている。この２つの地域を，交通や通信網を中核として産業や人口，地域間の結びつき等の視点で関連付けて学習することで，生徒の学びが深まると考えた。

資料４ 本単元の流れ

時間	過程	主な学習内容
１次	課題把握	単元を貫く課題の設定
２～５次	課題追究①（中国・四国地方）	交通・通信網を中核に、中国・四国地方の地域的特色と課題を考察
６～７次	課題追究②（天草）	天草の課題を交通・通信網、人口ピラミッド、高齢化率に着目し調査
８次（本時）	課題解決	自分の将来像に応じた「地域おこし」を提案

（２）内容：何を学ぶのか

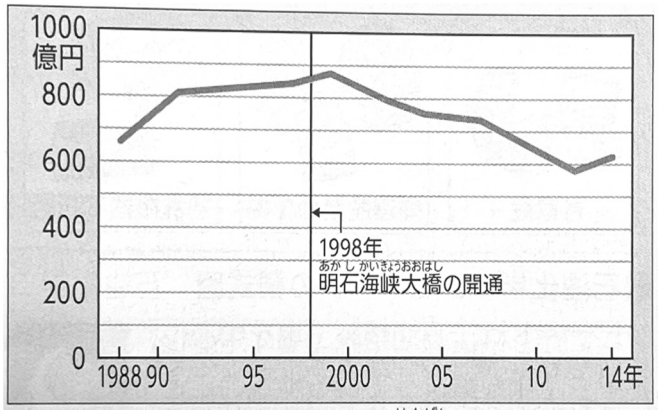
①実生活と関連した資料の活用（第３次）

第３次の学習では，ストロー現象を学ぶ過程において，八代・天草シーラインの実現を目指すポスター（資料５）と徳島市の小売業の年間商品販売額の変化（資料６）を関連付けることで，「交通網の発達にはデメリットもあるのではないか」「八代・天草シーラインが実現したら，自分たちの生活にどんな影響があるのだろう」といった「問い」を持たせることができた。

資料５ 八代・天草シーラインのポスター

現　在：龍ヶ岳町～八代市
所要時間約９０分
↓
実現後：龍ヶ岳町～八代市
所要時間約３０分
約３分の１に短縮

資料６ 徳島市の小売業の年間商品販売額



②実生活と関連付けた調べ学習（第５次）

第５次では，中国・四国地方における地域おこしの例やそれを支える交通・通信網の重要性を学んだ後，「天草ではどんな地域おこしができそうか，また，交通・通信網の発達にはどんな課題があるか」をテーマに調べ学習を行った。その結果，龍ヶ岳町を舞台にした映画があることや龍ヶ岳町内には交通網の発達を願った看板が多数設置してあることなど（資料７），生徒にとって新たな学びがあった。

資料 7 龍ヶ岳町内の交通網関連の看板

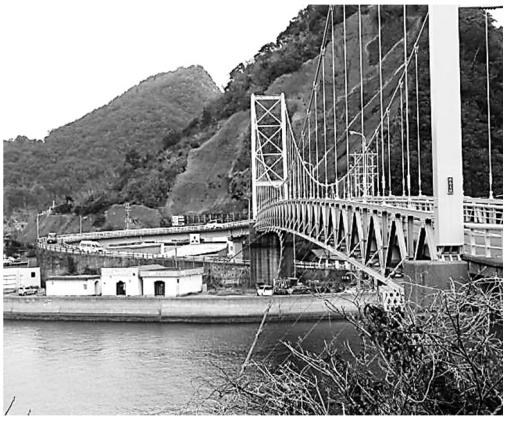
（３）方法：どのように学ぶか

①天草の課題に関する調査・プレゼンテーション（第６次～第７次）

ア　高齢化率と交通・通信網

「なぜ，樋島だけ高齢化率が５０％を超えているのだろう。」龍ヶ岳町の高齢化率（資料３）を基に，生徒が感じた「問い」である。実際に樋島に住む生徒がこの課題を調査し，「スマホ等の電波が入らない地域が，他の地区より多い。」，「樋島大橋が唯一の交通網で，道幅が狭く不便。」という現状を捉えることができた。これは龍ヶ岳町内に限らず，天草全体に生じている交通・通信網の未発達による格差という課題を考えることにつながった。（資料 8）

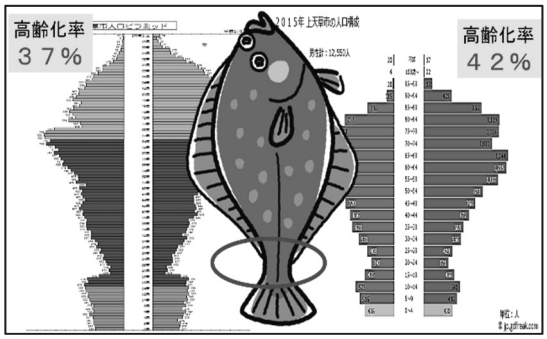
資料 8 樋島大橋



イ　人口ピラミッド（過疎化）と進路選択

天草の人口ピラミッド（資料９）を目にするなり，「これは何型ですか。」という「問い」が生まれた。既存の知識である富士山型やつりがね型，つぼ型とは異なるため，生徒たちにより「ヒラメ型」と名付けられた。そして，「なぜ，１５歳から急に人口が減っているのだろう。」という，天草の人口ピラミッドの特徴に迫る「問い」をもつことができた。この現象の理由が，本校生徒と同様に高校進学を機に天草を離れる若者が多いためであることに気がつき，改めて天草の課題を自分事として捉えることにつながった。

資料 9 天草の人口ピラミッド



ウ　地域おこしと交通網の整備

天草の観光客数と観光消費額の推移をまとめたもの（資料 10）から，年々増加傾向にあることに気がつくと共に，「なぜ，H30 年の方がＲ1 年よりも増加幅が大きいのだろう。」という「問い」が生まれた。増加した理由は，新天草一号橋の開通と崎津集落の世界遺産登録による影響が大きいという結論に至り，

資料 10 天草の観光客数，消費額の推移

	Ｈ29年	Ｈ30年	Ｒ1年
観光客数	163万人	187万人 ＋24万人	190万人 ＋３万人
観光消費額	114億円	133億円 ＋19億円	146億円 ＋13億円

地域おこしと交通網の整備の関連性を実感できた。

②多様な視点からの考察（第８次（本時））

ア　生徒自身の将来像に応じた課題追究

第８次（本時）では，学習課題を『天草とずっと関わり合っていくためには，どんな「天草おこし」が必要なのだろう』と設定した。生徒たちが主体的に課題を追究できるように，自分の将来像に応じて「天草おこし」（天草のための地域おこし）を考えさせた。Ａの立場を選択する生徒がいなかったため，２つの視点からの追究となったが，追究する立場を自己決定させたことで活発な意見交換や議論につながったと感じられた。生徒が選択した将来像の内訳（資料 11）と「天草おこし」の主な方法（資料 12）は次の通りである。

資料 11 生徒が選択した将来像

	単元の学習前	**本時の導入時**
Ａ：進学や就職，その後も，ずっと天草に住み続ける。	１人	**０人**
Ｂ：進学や就職で１度天草を離れるが，天草にＵターンしたい。	５人	**１０人**
Ｃ：進学や就職で天草を離れ，そのまま天草に戻ってこない。	１１人	**７人**

資料 12 生徒が考えた主な「天草おこし」

Ｂ：Ｕターンしてできる「天草おこし」	Ｃ：天草を離れてもできる「天草おこし」
・習得した知識や技能，資格を生かす。 （建設業，通信業，看護師，教員） ・自分の経験や考えを生かす。 （伝統文化の継承，市議会議員に立候補）	・天草産の商品を買う。（消費者） ・天草の商品を売る（広める）。（経営者） ・天草でイベントや旅行を企画する。 ・有名人になって天草をＰＲする。

イ　ＧＴの活用

第８次（本時）では，生徒に異なる視点を与えるために，ＧＴへのインタビュー動画（録画）を活用した。

ＧＴには，生徒と同じように都会の生活に憧れて天草を離れた体験や都会に住んだからこそ感じた天草のよさ，天草を活性化するために若い世代に求められる役割などについて具体的なエピソードを話していただいた。特に，「天草は子育てに向いていること」や「地域とのつながりが深いこと」など，郷土のよさについて新たな視点から考えることができた。

資料 13 ＧＴインタビュー動画

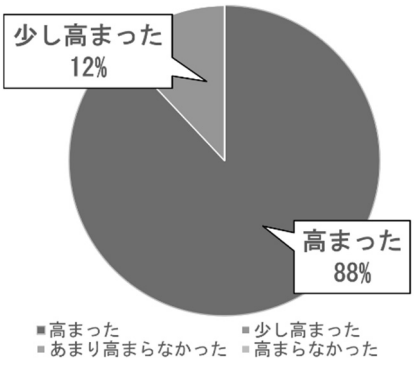
６　成果と課題

（１）目標：何ができるようになるか

本実践の終了後に，「郷土（自分が住む地域）への関心は，どの程度高まったか」をアンケート調査すると，生徒全員の関心が高まったという結果（資料 14）から，先述した単元の学習終了時に期待する生徒の姿に近づけたと考えられる。

課題としては，生徒が考えた「天草おこし」を単元を貫く課題に即して「必要なもの・こと・ひと」に分類する活動を

資料 14 事後アンケートの結果



行えば，より深い学びへとつながったのではないかと感じた。

（２）内容：何を学ぶか

単元全体を通して身近な地域（郷土）と関連付けながら学んだことにより，どの程度学習内容が定着したのかを検証するために，単元テスト（学習の達成（新学社））の結果を本実践の前後で比較した。その結果は，次の通りである。

	本実践以前の平均点	**本実践後の平均点**
知識・技能	約１３０/１７０点	**約１３８/１７０点（＋８点）**
思考・判断・表現	約１８/３０点	**約２０/３０点（＋２点）**
合計	約１４８/２００点	**約１５８/２００点（＋10 点）**

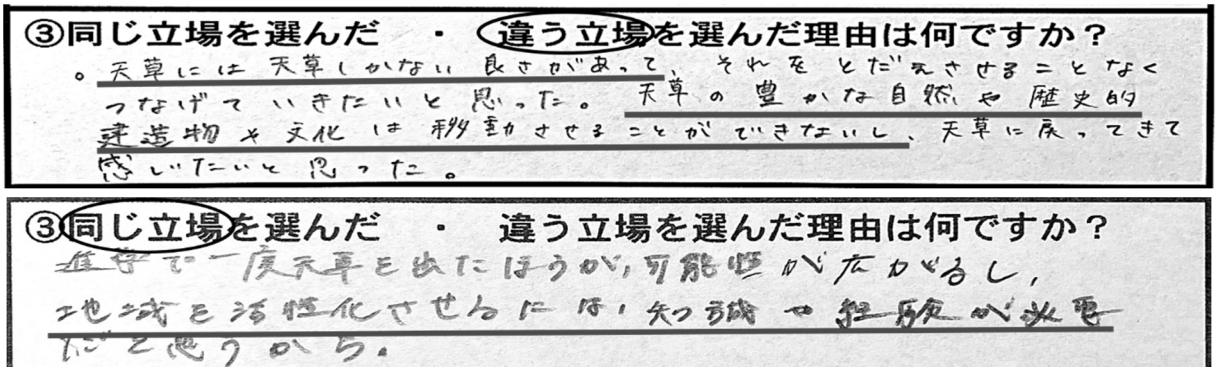
上記の結果から，身近な地域（郷土）と関連付けた実践は効果的と判断できる。しかし，他の単元でも同様の実践が可能なのかという課題がある。また，身近な地域（郷土）と関連付けることを優先して，本来学ぶべき内容が疎かにならないよう留意する必要がある。

（３）方法：どのように学ぶか

先述した通り，事前アンケートでは郷土に対してネガティブな考えが強かったが，本時の終末時における記述（資料 15）から，郷土のよさについて地域の環境条件や地域間の結びつき，人間の営みと関連付けていると捉えることができる。これは，地理的な見方・考え方を働かせることで生まれた「問い」について，多様な視点から追究する活動を積み重ねたことにより生徒の考えが変容したと考えられる。

ＧＴの活用方法については，より多くの視点を生徒に与えるという点で課題が残った。本実践では，ご自身が天草にＵターンされた野村さんにのみ御協力いただいたが，天草に住み続けられている方や天草を離れられたままの方，天草に移住された方など多様な立場の方々にご協力いただくことで，より深い学びへとつながったのではないかと感じた。

資料 15 本時のワークシート（一部）



7　おわりに

本実践を終えて，研究主題である「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を育むことができたかという点で振り返ると，概ね達成できたと考えられる。それは，「それぞれの郷土が大事という気持ちは今も未来も，どの地域でも同じ」，「将来どの地域に住んでも，自分が住む場所だからいい町にしたい」といった生徒の発言や記述から，主権者としての一歩を踏み出せたと感じたからである。

また，本実践で活用した「住民が願い続けてきた道路」が，本年６月４日に開通した。自分たちが学んだ内容が住民の声で実現したという経験は，社会参画への意欲の向上につながると思われる。

最後に，本実践に関わってくださった全ての方々に感謝を申し上げ，結びの言葉としたい。

ーメ　モー

〈歴史的分野〉

分野の研究提案　熊本県中学校教育研究会社会科部会歴史的分野部長
熊本市立京陵中学校　教諭　龍野　成敏

学習構想案　熊本市立桜木中学校　教諭　本田　悠介

研究発表

福岡県	みやま市立瀬高中学校	主幹教諭	溝上　恵
大分県	大分市立南大分中学校	教諭	大野　亜希子
熊本県	嘉島町立嘉島中学校	教諭	中村　俊介

歴史的分野の研究提案

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む歴史学習の探求
～歴史的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

熊本県中学校教育研究会社会科部会歴史的分野部長
熊本市立京陵中学校　龍野　成敏

公開授業の見どころ

本授業では，熊本ゆかりの人物である横井小楠を扱い，坂本龍馬を中心とした幕末・明治の偉人との関係や，他の思想家へ与えた影響について触れる。その上で，倒幕後の国づくりに必要な政策について，単元での学びを根拠に考える学習を行う。江戸時代末期，欧米諸国の接近や幕府に対する不満の高まりの中で，変化する社会の様子に着目させるために，単元を貫く課題を「明治維新を進めた人々は，なぜ倒幕して新しい国の仕組みを作ろうとしたのだろうか」に設定した。

幕末の偉人が目指した国づくりとその背景を考える学習活動において，「人と人とのつながり」という視点からの多面的・多角的なアプローチに特に注目し，授業を参観していただきたい。

1　研究主題について

基調提案を踏まえて，歴史的分野では「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む歴史学習」を以下のように探求していこうと考えた。

まず，歴史的分野で扱う内容は歴史的事象であるため，生徒が学習する時代には，どのような社会の問題があり，当時の人々は，よりよい社会をつくり出すためにどのような努力をしていたのかに気付かせる必要がある。この際，学習する時代に生きた特定の人物に焦点をあて，その生き様に着目することで，生徒はその人物に親近感を抱き，自分事として「問い」が生じやすくなると考える。

次に，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力を育むために，歴史的な見方・考え方を働かせながら，他者と協働して学ぶ機会を設ける。具体的には，既習事項をもとに「学習した時代の社会問題を解決するためには，次の時代ではどのような社会にしていくべきか」などの課題について協働で学習する活動などが考えられる。この際，現代に生きる自分たちだけの視点で考えるのではなく，学習する時代の背景や，その時代に生きる他者の立場を考慮し，多面的・多角的に考察することが，「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む歴史学習」として重要であると考える。

最後に，単元の終盤などで，生徒が自分の学習を振り返り，授業前に抱いていた社会的事象へのイメージがどのように変容したのかを確認する。これにより，生徒は多様な他者の思いに触れたことによる自分の成長を実感し，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度を養うことにつながると考える。

2　研究の視点について

熊本県中社研が示す研究の視点（目標・内容・方法）を，歴史的分野の授業にあてはめると次のようになる。

（1）目標

単元の目標：①近代社会を成立させた欧米諸国のアジア進出が，日本の開国へ影響を与えたこと，開国の影響で人々の生活が大きく変化したことを，江戸幕府の滅亡までの流れと関連付けて理解することがで

きる。②江戸幕府の滅亡と明治新政府の政策の背景に，欧米諸国の接近という外的要因だけでなく，日本国内で幕府への批判や新しい国づくりの思想の広がりなどの内的要因があったことを捉え，江戸幕府の倒幕が進められた理由を多面的・多角的に考察し，表現することができる。③開国から倒幕，そして明治時代を迎えるまでの過程を，当時の国際情勢，開国による政治的・経済的影響，新しい思想の広まりなどを関連付けて考察し，主体的に追究している。

本時の目標：横井小楠と坂本龍馬の思想の比較を通して，幕末の情勢や課題に気づき，新時代の日本が目指すべき方向について多面的・多角的に表現することができる。

（２）内容

学習指導要領の歴史的分野の内容「Ｃ　近現代の日本と世界」の「⑴近代の日本と世界」の単元を取り扱う。「明治維新を進めた人々は，なぜ倒幕して新しい国の仕組みを作ろうとしたのだろうか」という単元を貫く課題を設定し，毎時間の学びを重ねる中で，単元を通して生徒に問い続ける。本授業においては，熊本県ゆかりの人物である「横井小楠」を扱う。

（３）方法

歴史的な見方・考え方を働かせる発問を中心にした学習活動を行う。生徒に，歴史的な見方・考え方を働かせる「問い」を持たせるため，各時間の発問でどのような見方（時期，推移や変化など）に着目させ，どのような考え方（比較して類似や差異などを明確にしたり，事象同士を因果関係などで関連付けたりするなど）を働かせる学習活動を行うか，単元をデザインする際に明確にした。

本授業では，江戸時代末期に欧米諸国の接近という外的圧力と，日本国内で江戸幕府への不満や批判という内的圧力が高まっていく**推移**と，それに伴う社会の**変化**に着目させるために，「明治維新を進めた人々は，なぜ倒幕して新しい国の仕組みを作ろうとしたのだろうか」という単元を貫く課題を設定した。また，江戸時代末期の社会的事象や活躍した人物の思想を，**因果関係**などで関連付けて考えさせるために，横井小楠や坂本龍馬という幕末の偉人に焦点をあて，彼らが目指した国づくりとその背景を考えさせる学習活動の展開を構想している。

３　歴史的分野における研究の重点事項について

（１）「人と人とのつながり」の視点からの多面的・多角的なアプローチ

通史学習においては，通常，歴史を動かした中心人物のみを教材として扱うことが多い。しかし，実際に歴史が作られていく過程では，歴史の表舞台に立った中心人物に影響を与えた，数多くの未知の人物がいたはずである。これら「中心人物に影響を与えた人物」に焦点をあて，相関関係や影響などを知ることで，歴史は多くの人々が互いに影響しあって作られてきたのだということを，生徒は学ぶことができる。また，歴史の中心人物以外に目を向けさせることは，生徒の歴史学習への関心を高め，歴史を多面的・多角的に考えさせることにつながる。

熊本県中社研のこれまでの実践では，単元中のどの時間に，地域の人物をどのように扱ったかがわかるよう学習指導案に明記し，通史と地域の人物との関連がわかるようにすることが多かった。今回，横井小楠を登場させる頻度やタイミングについて検討を重ねた結果，横井小楠の思想の影響が見られる政策は，明治時代に入ってからが多いため，幕末を扱う本単元では，本時と次時のみに登場させることとした。ただし，本時に至るまでの授業の中で，坂本龍馬や吉田松陰をはじめとする新しい国づくり思想の高まりがあった

ことを単元の計画に加えることで,生徒が歴史の変遷と人のつながりとの関係に「問い」が生じ，本時の横井小楠とのつながりにつなげやすくなるよう工夫した。また本時は，江戸時代の単元の最後,次の明治の単元へのつなぎという位置づけであるため，横井小楠と通史との関連は次の単元で扱っていく予定である。

（２）歴史への関心を高める地域の人物の教材化

歴史学習では，学習する時代に生きた特定の人物に焦点をあて，その生き様に着目することで，生徒はその人物に親近感を抱き，自分事として「問い」が生じやすくなると考える。その際，焦点をあてる人物が生徒に身近な郷土の偉人であれば，より効果的である。

本授業の生徒が在籍する熊本市立桜木中学校の校区内には,横井小楠記念館（横井小楠の旧居「四時軒」）があるため,生徒たちは自分たちの郷土に横井小楠という人物がいたということを,小学校で学んでいる。そこで本授業では，歴史を動かした中心人物として坂本龍馬を，龍馬に影響を与えた人物として横井小楠を扱うこととした。

（３）自己の変容を実感できる振り返り

これまでは，授業の効果ともいえる生徒の変容を見取るのは，教師側だけであることが多かった。しかし，生徒の主体的に学習に取り組む態度を育成するためには，生徒自身が自分の変容を実感することも重要であると考える。生徒の変容を見取るためには，生徒の社会的事象に対する授業前と後のイメージを比較する必要がある。今回の授業者は，夏休みの宿題として，江戸幕府が滅亡した背景を自分なりにまとめてスライドをつくるという課題を生徒に出した。また，９月には江戸時代末期に関する事前アンケートを実施し，生徒の江戸時代末期に対するイメージを分析した。生徒のスライドや事前アンケートの結果は，授業者が生徒の社会的事象に対する授業前のイメージを把握するために有効であろう。

本研究では，単元（授業）の初めに，単元（授業）の終わりで出す課題と同じものを生徒に示すように単元構成を工夫した。単元の初めと終わりで出された同じ課題に対する答えを比較するということは，授業者が変容を見取りやすいだけでなく，生徒も授業前後の変容を実感することができると考える。また，同じ課題を繰り返すことで，生徒の「問い」が深まることも期待している。この方法は，他の単元や歴史以外の分野でも転用が可能なため，その有効性を検証していきたい。

４　公開授業までの取り組み

（１）熊本市中学校社会科研究会　学習会（R4.7.22）

この時に検討された主発問は,「九州や山口などの各地で,新しい国づくりに向けた動きが高まったのは,なぜだろうか。」というものであった。倒幕勢力の中心が九州・山口の藩だったのはなぜか，ということを考えさせる展開は，九州各県から参観者が来る場での発表にふさわしいのではないかという考えから出されたものであった。しかし学習会の中では，倒幕の勢力は全国にあったはずなのに九州・山口に絞るのはいかがなものか，根拠となる資料が見つからないのではないかといった懸念の声が聞かれた。

また,「横井小楠はまだ封建制度が強固な時代に新しい発想を生み出したところが偉大であるが，子どもたちにとっては坂本龍馬のイメージの方が強い。その坂本龍馬に影響を与えた人物というアプローチをしたら通史とのつながりを持たせることができるのではないか。人と人との繋がりを追って横井小楠について考えさせると，小楠の思想が新政府に反映されているということがわかりやすいのではないか」という意見が出された。

（２）熊本県中学校教育研究会社会科部会　夏季研修会（R4.8.1）

横井小楠は，明治政府の参与に任ぜられるものの，間もなく暗殺されているため，直接国政に関与したわけではない。そのため，通史で学習する内容から掘り下げていかないと，横井小楠の思想までたどりつけない。かといって，特設授業をするには時数的にも難しいという課題があった。しかし授業者には，「郷土の偉人である横井小楠の思想が，日本を変えることに影響を与えていたという歴史的意義を生徒に感じてほしい」という強い思いがあったため，この会では「横井小楠を如何に教材化するか」を中心に議論が進められた。

7月22日の学習会と同様，ここでも通史の中で坂本龍馬を扱いながら，影響を与えた人物として小楠を扱う方が良いのではないかという意見が多く出された。また，横井小楠が残した「国是三論」や「国是七条」の現代語訳は，五箇条の御誓文や明治政府の富国強兵策などに影響を与えたものとして，授業で扱えるのではないかという意見も出された。

授業者には，「江戸幕府の滅亡に至る過程だけでなく，新しい国づくりの動きがあったことも単元を通して学習させたい」というもう一つの願いがあった。そこで，単元を貫く課題と単元の展開案についても議論された。単元を貫く課題の案としては，「欧米とアジアとの関係が変化する中で，なぜ日本では幕府を滅亡させてまで明治政府に変わったのだろうか」や「幕末期の江戸幕府が抱えていた課題にはどのようなものがあったのだろうか」というものがあった。単元の展開案としては，単元の初めに江戸幕府滅亡の原因を予想させ，単元の各時で大きな原因と考える内容と理由をカードにまとめ，単元の終わりにはそれまで作ったカードを，シンキングツールを使ってまとめるという案などが出された。また，江戸幕府滅亡の原因を考えさせることで，当時の幕府のスタンスでは解決に結びつかないことが多いということに気付かせ，新しい考えの必要性（坂本龍馬・横井小楠の思想・議会政治など）につなげるという案も出された。

（３）熊本市授業研究会（R4.10.4）

九州大会の事前授業として位置づけられ，九州大会と同じ内容の授業を公開した。当日は熊本市内から40名以上の社会科の教員が授業を参観し，授業研究会では熱心に協議がなされた。

事前授業の段階では，本時の前半で「明治維新を進めた人々は，なぜ倒幕して新しい国の仕組みを作ろうとしたのだろうか」を考えさせたうえで，後半に「横井小楠や坂本龍馬は，新しい時代の日本をどのような国にしたかったのだろうか」を考えさせる構成になっていた。しかし当日の授業では，前時までに倒幕の理由を考えさせる活動を終えて，授業の前半から小楠の国是七条と龍馬の船中八策を比較し，二人が目指した国づくりについて考える展開に変更した。

授業研究会では，生徒自身に倒幕後の国づくりの在り方について考えさせてはどうかという意見や，これまでの単元の学びが生徒の考えの根拠となるような資料提示や発問の工夫が必要であるという意見が出された。また，資料提示の方法として，「場に残る資料」を用意すれば，画面を変えれば消えてしまうデジタル資料よりも，生徒が思考する際の根拠として活用しやすくなることも再確認できた。

５　授業研究会における協議について

授業研究会では，公開授業で得られた多くの気づきを基に，「歴史への関心を高める地域の人物の教材化」を中心に協議していきたい。本授業における郷土の偉人の教材化が効果的であったかについて，特に注目していただき，ご意見をいただきたい。

社会科(歴史的分野)学習構想案

期　日　令和４年１１月１８日(金)第３校時
場　所　熊本大学教育学部付属中学校　視聴覚教室
学　級　熊本市立桜木中学校２年３組　３３名
指導者　熊本市立桜木中学校　教諭　本田　悠介

１　単元構想

単元名	第５章　２節「欧米の進出と日本の開国」（東京書籍「新しい社会　歴史」P.160～167）
単元の目標	(1)近代社会を成立させた欧米諸国のアジア進出が，日本の開国へ影響を与えたこと，開国の影響で人々の生活が大きく変化したことを，江戸幕府の滅亡までの流れと関連付けて理解することができる。 (2)江戸幕府の滅亡と明治新政府の政策の背景に，欧米諸国の接近という外的要因だけでなく，日本国内で幕府への批判や新しい国づくりの思想の広がりなどの内的要因があったことを捉え，江戸幕府の倒幕が進められた理由を多面的・多角的に考察し，表現することができる。 (3)開国から倒幕，そして明治時代を迎えるまでの過程を，当時の国際情勢，開国による政治的・経済的影響，新しい思想の広まりなどを関連付けて考察し，主体的に追究している。

単元終了時に期待する生徒の姿

江戸幕府が倒幕された背景に，欧米の情勢や国内の動き，新しい日本の国づくりを目指した思想の広がりがあったことを理解し，新時代の日本が目指すべき方向を多面的・多角的に考察して表現できる生徒。

指導計画と評価計画（10 時間取扱い　本時９／10）

過程	時間	主に働かせたい見方・考え方と発問	横井小楠，坂本龍馬，吉田松陰との関連	身につけさせたい力（知・技 ／ 思・判・表 ／ 態）
課題把握	1	【背景・原因・結果】 ・西郷隆盛や大久保利通，木戸孝允などが，江戸幕府を倒して新しい国づくりをめざした理由を，これまでの学びをもとに予想しよう。	坂本龍馬 (倒幕に向けて動いた人物として)	・明治維新を進めた西郷隆盛や大久保利通，木戸孝允らが，倒幕して国の仕組みを変えようとした理由を，主体的に追究しようとしている。(態)
	単元を貫く課題：明治維新を進めた人々は，なぜ倒幕して新しい国の仕組みを作ろうとしたのだろうか。			
課題追究	1	【背景・原因・結果】 ・欧米諸国が，中国やインドなどのアジア各地へ侵略を進めたのは，なぜだろうか。		・イギリスなどの欧米諸国が，工業製品の市場や原料の供給地を求めてアジアへ進出した背景や過程を理解することができる。(知・技)
	1	【背景・原因・結果】 ・江戸幕府は，なぜアメリカと２つの条約を結び，開国したのだろうか。	吉田松陰，坂本龍馬 (黒船の来航への対応，考え)	・江戸幕府が開国に踏み切った理由を，政治や国際情勢を踏まえて，多面的・多角的に表現することができる。(思・判・表)
	2	【影響・変化・相関関係】 ・開国と貿易の開始によって，日本の政治と経済はどのような影響を受けたのだろうか。	吉田松陰 (尊王攘夷運動への影響，安政の大獄)	・開国による物価の上昇や国内の産業などへの影響を，グラフなどの資料を読み取って，表現することができる。(思・判・表) ・開国後の政治の動きについて，幕府や朝廷などの関係を図や表で整理して，理解することができる。(知・技)
	2	【背景・原因・結果】 ・江戸幕府は，どのような流れで滅亡したのだろうか。	坂本龍馬 (薩長同盟，徳川慶喜への大政奉還の進言)	・幕府側の大政奉還のねらいと新政府側の動きを踏まえ，徳川氏の政権の返上から戊辰戦争までの過程を理解することができる。(知・技)
課題解決	1	【背景・原因・結果】 ・明治維新を進めた人々は，なぜ倒幕して新しい国の仕組みを作ろうとしたのだろうか。	吉田松陰，坂本龍馬 (課題解決のための資料として)	・明治維新を進めた人々が倒幕して新しい国づくりを目指した理由を，欧米の情勢や国内の動き，新思想の広がりを踏まえて考察し，多面的・多角的に表現することができる。(思・判・表)
	1	【比較】 **・横井小楠と坂本龍馬は，日本をどのような国にしたかったのだろうか。(本時)**	横井小楠，坂本龍馬，吉田松陰 (国是七条と船中八策，三人の思想の違い)	・新時代の日本が目指すべき方向とその理由を，幕末の情勢や課題，横井小楠と坂本龍馬の思想などの複数の視点を踏まえ，多面的・多角的に表現することができる。(思・判・表)
	1	【推移】 ・横井小楠らの考えは，明治新政府の国づくりに反映されているのだろうか。	横井小楠 (明治時代の国の仕組みとの関連)	・明治新政府の立憲制国家が作られるまでの大きな流れを，政治の仕組みの変化に着目して捉え，次単元への見通しを持つことができる。(知・技)

2　本実践のねらいと生徒の実態

本実践（単元）のねらい

本単元は，学習指導要領の歴史的分野の内容「C　近現代の日本と世界」の「(1)近代の日本と世界」にあたる。欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したこと，それに伴って幕府が対外政策を転換し開国に踏み切ったこと，開国が政治的・経済的に大きな影響を与えたこと，そして混乱の中で新しい国づくりに向けてさまざまな思想が広がり，各藩の人々に影響を与えたことにより，江戸幕府が倒されて滅亡し，日本が新しい時代に向かい始めたという背景と過程を理解させることをねらいとしている。

本実践では，このねらいに迫るために，倒幕への動きと新しい国づくりに向けた思想の広がりに着目させる。西郷隆盛や大久保利通，木戸孝允などが倒幕と明治維新を進めた背景に，幕末思想家の動きが大きく関わっていることを捉えさせたい。そのための教材として，横井小楠と坂本龍馬を取り上げる。横井小楠は，時代の先を読む改革的で開明的な思想で「国是七条」を幕府に進言するとともに，坂本龍馬や吉田松陰などに大きな思想的影響を与えた。また横井小楠に思想的影響を受けた坂本龍馬は，「船中八策」や「新政府綱領八策」に新政府が目指すべき体制を記すなど，新しい時代のビジョンを明確に示していた。新時代を見据えた国づくりの思想の広がりと，倒幕に向けた動きを関連付けて考えさせることで，幕末という時代の動きを総合的に考えさせる。そして，単元を通した学習活動によって，歴史的事象を多面的・多角的に捉えて考察する力を身に付けさせたいと考える。

本単元における系統

小６「明治の国づくりを進めた人々」
外国船の来航から幕末の流れ，明治維新後の日本の仕組みを理解する。

中２「欧米における近代化の進展」
欧米諸国における市民革命や産業革命，アジア諸国の動きなどをもとに，欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを理解する。

中２「欧米の進出と日本の開国」
日本の開国から江戸幕府の滅亡までの流れを，欧米・アジア諸国の動き，国内の動きなどを踏まえて理解する。

中２「明治維新」
明治維新と近代国家の形成，議会政治の始まりと国際社会との関わりについて，その因果関係と流れを理解する。

生徒の実態（単元の目標につながる学びの実態）

■本単元を学習する以前の内容理解　（単位：人）

①幕末に活躍した薩摩藩，長州藩の人物と，その人物が行ったこと
・西郷隆盛，大久保利通などの薩摩藩と，木戸孝允などの長州藩が，薩長同盟を結んで幕府と戦った。
・薩摩藩と長州藩が尊王攘夷運動を進め，倒幕した。　・西郷隆盛によって，江戸城が無血開城された。

②坂本龍馬は，どのような人物だと思うか
薩摩藩と長州藩の仲介役となった，薩長同盟を結ばせた，剣術がすごく上手で戦いで活躍した，暗殺された，土佐藩を動かして大政奉還を提示した，土佐藩を脱藩したのちに勝海舟とともに海援隊を結成した，など

③横井小楠は，どのような人物だと思うか
熊本で有名な人物，私塾を開いていた，四時軒を建てた，幕末の思想家，武士でありながら儒学者でもあった，最後に暗殺された，熊本に小楠堂を開いた，坂本龍馬と政治について話した，政治顧問となった，幕政改革を行おうとしたが失敗した，明治政府の基礎となる仕組みを考えた，など

④江戸時代から明治時代に，どのような流れで変わったと思うか
・幕府を倒し，王政復古の大号令により，徳川氏の影響を完全に無くした。
・幕府が行き詰まり，不満がたまり，新政府軍と旧幕府軍の代表同士で話し合いをした。
・物価の上昇，外国船の受け入れなどにより人々の不満が高まり，尊王攘夷運動がおこり，薩長同盟の勢力によって幕府が大政奉還をした。

■本単元の学習に関する意識の状況　（単位：人）

調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない
歴史の学習に，意欲的に取り組んでいますか。	10人	15人	1人	1人
これまでの学習内容(江戸時代の日本,欧米における近代化の動き)を，理解することができましたか。	4人	11人	11人	1人

■考察

本学級は，歴史学習に対する意欲は概ね高いが，学習内容の理解には課題を感じている生徒が半数近くいる。幕末の歴史について，「外国船の来航」「開国の影響」「薩長同盟と倒幕の動き」「大政奉還と王政復古の大号令」などは触れていたが，人物や立場ごとの相関関係，歴史的事象の流れを明確に説明できる生徒はいなかった。坂本龍馬，横井小楠については，幕末の偉人という抽象的なイメージを抱く生徒が多く，幕末の歴史に与えた影響を具体的に触れられた生徒は少なかった。

3　指導に当たっての留意点

○単元の学習の中で読み取ったり活用したりしたグラフや資料を，グループ分けしながら蓄積し，単元のまとめにあたる課題解決の活動で活用する。そうすることで，単元の課題を解決するために資料読解等の活動を改めて確保することなく，資料を適切に用いて説明ができるようにする。

○幕末における人物の関連や動きを分かりやすく捉えられるよう，タブレットを適切に活用する。図でまとめる活動を取り入れることで，学習内容を視覚的に理解しやすいようにする。

4　本時の学習

（1）目標　横井小楠と坂本龍馬の思想の比較を通して，幕末の情勢や課題に気づき，新時代の日本が目指すべき方向について多面的・多角的に表現することができる。

（2）展開

過程	時間	学習活動 （◇予想される生徒の発言）	指導上の留意事項
導入	7分	1　横井小楠と国是七条について知る。 (1)　倒幕までの流れを振り返る。 (2)　２つの資料から，どちらが坂本龍馬の「船中八策」なのかを考える。 (3)　船中八策ではない資料は，誰が考えたものかを予想する。 (4)　横井小楠と国是七条について知る。	○倒幕までの流れを振り返ることで，坂本龍馬が果たした役割，薩長同盟の歴史的意義を再認識できるようにさせる。 ○肖像画を用いて横井小楠に気づかせることで，生徒の関心を高められるようにする。
		【学習課題】　横井小楠と坂本龍馬は，日本をどのような国にしたかったのだろうか。	
展開	35分	2　横井小楠の「国是七条」と坂本龍馬の「船中八策」を比較し，共通点を考える。 (1)　ロイロノートの資料から共通点を見出し，ラインを引く（個人思考）。 ◇議論　◇優れた人材　◇貿易　◇海軍　◇軍隊 (2)　共通点が多い理由を，班で考える。 (3)　全体で意見を出し合う。 ◇欧米諸国が強くなっていたから。日本に接近していたから。 ◇日本が不平等条約を結ばされていたから。 ◇幕藩体制が行き詰まっていたから。 ◇幕府には，議論をして物事を決める仕組みがなかったから。	○例示をすることで，全員が一斉に取り組みやすいようにさせる。 ○全体で意見を出し合う際に，黒板にまとめた共通点の左右に書き分けることで，「外圧」「内圧」の要因があったことに気づかせる。
		【追究課題】　二人の考えの中で，新しい国の仕組みとして，どれが優先されていくのだろうか。	
		3　幕末の課題をもとに，倒幕後，二人の考えのうちのどれが優先されていくのかを考える。 (1)　個人で考える。 (2)　全体で意見を出し合う。 ◇海軍を作り，軍隊の力をつける。欧米諸国が日本に接近しており，日本が戦争で負けたり植民地になったりしないようにしなければならないから。 ◇不平等条約を改正する。欧米諸国に一方的に結ばされているうえに，開国した影響で国内の経済が混乱し，人々が苦しい思いをしているから。 ◇議会を取り入れた政治の仕組みを作る。さまざまな課題に対応するために，何事もしっかりと話し合って解決させていく必要があると考えたから。	○考える根拠として，これまでの単元の学びで触れた内容や資料などを活用できるように，助言する。
終末	8分	4　この単元を振り返り，次の単元への見通しを持つ。 5　本時の学習内容を振り返り，感想を書く。	○学びの足跡(掲示物)と本時の板書を見て，単元を大きく捉えさせることで，単元と単元とのつながりに気づかせる。

（3）**本時の評価**

評価の観点	評価基準
思考・判断・表現	A：新時代の日本が優先した政策を予想し，その根拠を，幕末の情勢や課題，横井小楠と坂本龍馬の思想などの複数の視点を踏まえ，多面的・多角的に表現している。
	B：新時代の日本が優先した政策を予想し，その根拠を，幕末の情勢や課題，横井小楠と坂本龍馬の思想などのいずれかの視点を踏まえ，表現している。

歴史的分野研究発表

多面的・多角的に考察する力を育む学習指導法の研究
～思考ツールを活用した交流活動を通して～

福岡県みやま市立瀬高中学校　主幹教諭　溝上　恵

1　はじめに

子どもたちが，学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し，これからの時代に求められる資質・能力を身に付け，生涯にわたって主体的に学び続けることができるようにするには，学習の質を高める授業の改善が必要である。今回の学習指導要領では，単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める必要があると述べられている。

また，育成すべき資質・能力を学力の三要素「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」と照らし合わせ，次の三つの柱で整理している。

① 何を知っているか，何ができるか」（知識・技能）

②「知っていること，できることをどう使うか」（思考力・判断力・表現力等）

③「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」（学びに向かう力・人間性等）

さらに，学びの量とともに，「どのように学ぶか」という，学びの質や深まりを重視することが必要であるとし，「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の 3 つの視点で生徒の学びを改善すべきであると示されている。各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたりすることに向かう「深い学び」は，中心的な視点であると考える。そして，そこに強く関わるのが「思考力，判断力，表現力」であり，中でも「多面的・多角的に考察する力」は社会科を学習するうえで求められる資質・能力に深く関係するものである。

2　主題設定の理由

⑴社会的背景から

地球上には，様々な問題がある。例えば気候変動・地球温暖化，マイクロプラスチック，自然破壊・環境汚染といった自然科学の問題や，少子高齢社会，介護問題，雇用問題，人権問題といった社会科学の問題などである。

それらの様々な問題を解決していくには，問題から課題を見いだし，その解決に向けて構想し，社会的な見方・考え方を働かせて，社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，社会に見られる課題や問題について公正に判断したりする力が必要である。つまり，当事者意識を持つとともに，様々な立場から課題を捉え，その解決を目指すために多面的・多角的に考察する力を育むことは，国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育む上で大切であると考える。

⑵生徒の実態

本校の生徒たちは，昨年度の諸調査の結果から，学習に対する関心・意欲は高く，学ぶ態度も向上しているが，自分の考えを的確に伝えたり，他者の考え方を手がかりに自らの考えを深めたりすることに課題があることが分かった。しかしながら，昨年度実施した 7 月と 11 月のアンケートによると，「あなたは，友達の発言や行動，作品を見て「すごいなあ」「なるほどなあ」「見習いたい

なあ」と思うことはありますか?」という問いに対して，約８割の生徒が「よくあてはまる」という高い割合の回答を示した。これは，本校の生徒が，互いのよさを認め合いながら授業に取り組むことができているという強みを示している。

以上のことから，この強みを生かし，授業における課題に対して，様々な視点や立場から社会的事象を調べ，事象を関連付けながら考察し，他者と精査・吟味する交流活動を仕組めば，自らの考えを練り上げたり，よりよい考えを再考したりすることができると考え，本主題を設定した。

３　主題・副主題の意味

(1)主題について

歴史的分野における「多面的・多角的に考察する力」とは，歴史的事象を一面的に見ず，様々な面や立場から歴史的事象を捉え，広く深く追究することである。

歴史的分野における多面的に考察するとは，歴史的事象の仕組みを明らかにするために社会的側面，経済的・文化的側面，外交的側面の点から，歴史的事象の意味や特色を捉えることである。

歴史的分野における多角的に考察するとは，歴史的事象を異なる階級層や人種，性別などの立場から捉えることである。

(2)副主題について

歴史的事象を多面的・多角的に考察するために，「思考ツール」を活用する。歴史的事象の意味や特色を捉えることができるように，ウェビングマップとＹチャートを学習過程の各段階で活用する。思考ツールを活用することで，知識を広げ，歴史的事象の背景，原因，結果，影響などに着目して，事象間の関連付けや整理を行う。さらに，思考ツールを使って書き出したものを使って交流活動を仕組むことで，事象間の因果関係を明らかにしながら説明したり，変化をもたらした構造について説明したりする。

４　研究の仮説

社会科の学習過程において，単元を貫く課題をつくり，「つかむ」，「つくる・広げる」，「まとめる・振り返る」の各段階で思考ツールを活用して事象を整理し，思考ツールを使った説明し合う交流活動を設定すれば，生徒は歴史的事象のつながりに気づき，多面的・多角的に考察する力が育つであろう。

５　研究の内容

(1)単元の学習過程（単元計画６時間）

段階	配時	ねらい	学習活動	思考ツール
つかむ	1	○単元を貫く学習課題を設定することができる。	・明治時代と大正時代の家族の食事場面の写真を比較し，食事場面の違いの要因は何なのか考え，単元の学習課題を設定する。	Ｙチャート
		【単元の学習課題】 大正時代とは，どんな時代だったのだろうか？		

つくる・広げる	4	○大正時代について，多面的視点から調べることができる。 ○調べた事象どうしを関連付けて捉えることができる。 ○大正時代について，多角的視点から考え，捉えなおすことができる。	・教科書や資料から，政治，経済，国民の生活・文化の点から調べ，事象どうしのつながりや関連について考える。 ・調べた事象について，政治家，国民，女性の立場から捉えなおす。	Y チャート＋ウェビングマップ
まとめる・振り返る	1	○大正時代がどんな時代であったかをまとめることができる。	・Y チャートに，社会的側面，経済・文化的側面，外交的側面の３点から整理する。 ・整理したことをもとに，大正時代はどんな時代であったかをまとめる。	Y チャート＋ウェビングマップ

【単元のまとめ】
大正時代とは，第一次世界大戦を背景に，民族の独立意識が日本に伝わり，政治を変えようとする国民の意識が高まり，大正デモクラシーになった時代である。また，その民主主義的風潮が社会運動，米騒動，政党内閣へとつながっていく時代である。

(2)各過程の工夫

①「つかむ」段階(思考ツール：Y チャート)

単元を貫く課題を設定するために,明治時代と大正時代の食事場面を比較させ,相違点をあげる。そして,「なぜこのように変化したのか」を問い,「その要因がどこにあるのか」という疑問を持たせ,『大正時代とは，どんな時代だったのだろうか？』という学習課題を設定する。

さらに，予習で読ませておいた教科書から，大正時代に起こった歴史的事象についてＹチャートに書き出させる。書き出した事柄が，大正時代の変化に影響しているであろうという予想のもと，これらの事柄を調べ，関係性を明らかにしていくことで，課題の解決になるという見通しを持たせる。また，次時からＹチャート上に歴史的事象や人物等を書き足していき，その関係性を線で結んでいくことで，大正時代の特色を明らかにしていくことができそうだという意欲を持たせる。

②「つくる・ひろげる」段階（思考ツール：Y チャート＋ウェビングマップ）

大正時代の特色を調べるために，「政治」「経済」「国民の生活・文化」の多面的視点から，教科書や資料集,必要に応じてタブレット内のフォルダの資料を使って,個人で調べる時間を確保する。そして，調べた事柄をＹチャートに書き出し，関係性のあるものを線で結ぶ活動を設定する。その後，グループで交流し，歴史的事象について確認するとともに，他者が作成したＹチャートとの共通点や相違点を明らかにし，特に相違点について検討するよう指示をする。

さらに，多角的視点から考えを深めることができるように，歴史的事象をいくつか取り上げ，政治家，国民，女性の立場から再考する時間を設定する。そして，立場を変えて考えたことをグループで出し合い，Ｙチャート上に書き出した歴史的事象の関係性や背景，影響等について検討させた後，班で１つのＹチャート＋ウェビングマップを作成する。

③「まとめる・振り返る」段階（思考ツール：Y チャート＋ウェビングマップ）

Ｙチャート上で広げた歴史的事象を，政治的側面，経済的側面，国民の生活・文化的側面の３点で整理する。その際，歴史的事象どうしの関連付けや時代の変化に大きく影響した事柄を選択・判

断しながら整理するよう指示をする。大正時代がどんな時代であったと言えるのかをまとめることができるように，単元の導入で設定した学習課題に立ち返って考えさせる。

さらに振り返りとして，大正デモクラシーの時代から今を生きる私たちが学んだことを振り返りシートに記入させ，発表させる。

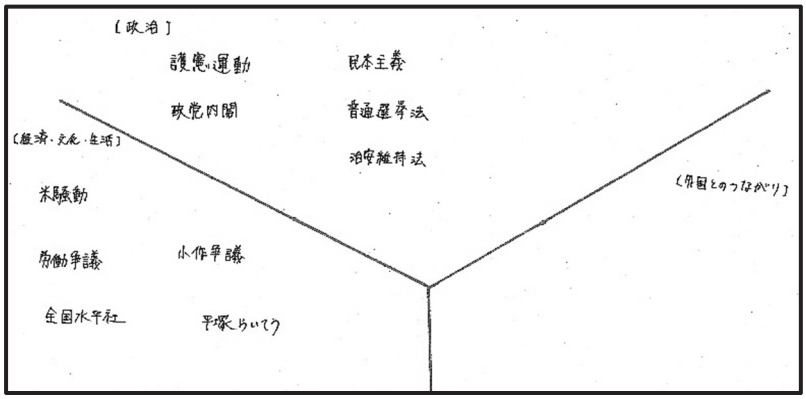
6　研究の目標

大正時代の世界の動きと我が国の動きとの関連などに着目して，歴史的事象を多面的・多角的視点を基に調べ，相互に関連付け，大正時代とはどのような時代だったのだろうかという課題を解決し，自分の考えを表現する生徒。

7　研究の実際

(1)つかむ段階（課題の設定）

明治時代と大正時代の違いに気づき，大正時代に起こった歴史的事象について考察する必要性を感じることができるように，明治時代と大正時代の家族の食事場面の様子を提示した。その変化から「たった 15 年でこれだけ進化したのはどうしてだろうか」「大正時代に何が起こったのだろうか」という疑問を持つことができた。また，「明治時代は，父親が一番上にいるが，大正時代は平等だ」という意見も出た。それらの意見と教科書内の歴史的事象（重要語句）を照らし合わせ，いったい何がこの時代に起こったのかを考えさせた。その際，「護憲運動」や「社会運動」といった言葉も登場したが，大正時代を象徴している言葉「大正デモクラシー」について調べていくと大正時代のことがわかるのではないかという意見が出された。そこで，単元を貫く課題を「大正時代とは，どのような時代だったのだろうか」と設定し，大正時代の政治や経済，諸外国との関係等について調べていく必要を確認することができた。そして，現時点で出てきた歴史的事象（重要語句）を，Y チャートに書き出し，歴史的事象について調べ，その関係性を追究していくことで課題を解決していくことができるだろうという解決の方向性を確認した。【資料①】

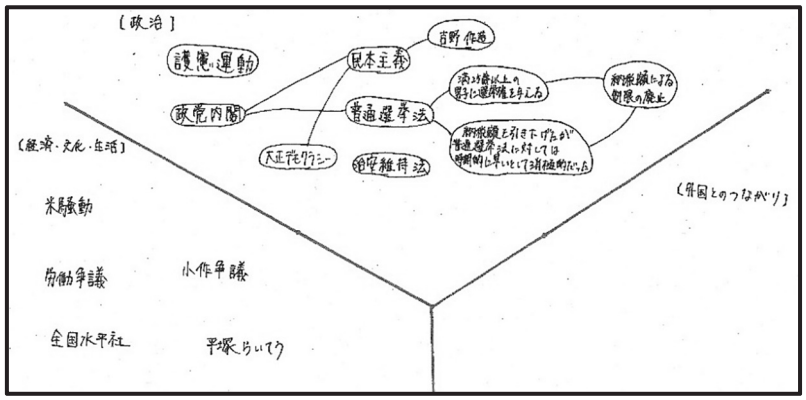


【資料①　つかむ段階のＹチャート】

(2)つくる・広げる段階（課題の追究）

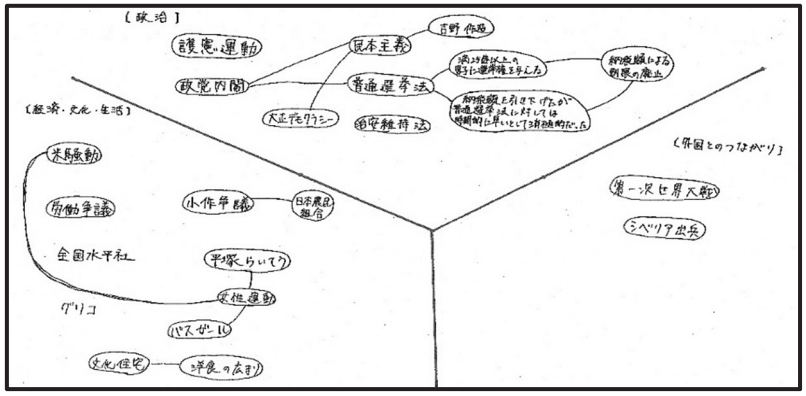
大正時代の世界の動きと我が国の動きとの関連などに着目して，多面的視点を基に調べることができるように，大正時代の「政治」「経済」「国民の生活・文化」の視点で調べていくよう指示をした。生徒は，教科書や資料集，タブレット内に準備していた資料フォルダから，必要な情報を取り出し，Y チャートに書き出していった。さらに，事象間を相互に関連付けることができるように，線で結んでいった。【資料②】Ｙチャートに書き出していくことで，調べたことや相互の関連を可視化することができた。そのため，第一次世界大戦の影響や諸外国の影響について気づくことができた生徒がいた。しかし，個人ではなかなか関連付けることができない生徒も数名いた。そこで，グループにおいて，個人で作成したＹチャート＋ウェビングマップを互いに照らし合わせ，事象の結

びつきについて確認する時間を設け，共通点や相違点を見出させた。特に相違点について検討し，より深く事象について考えるとともに事象間の関連性についても考えることができた。



【資料② 多面的視点で考察したＹチャート】

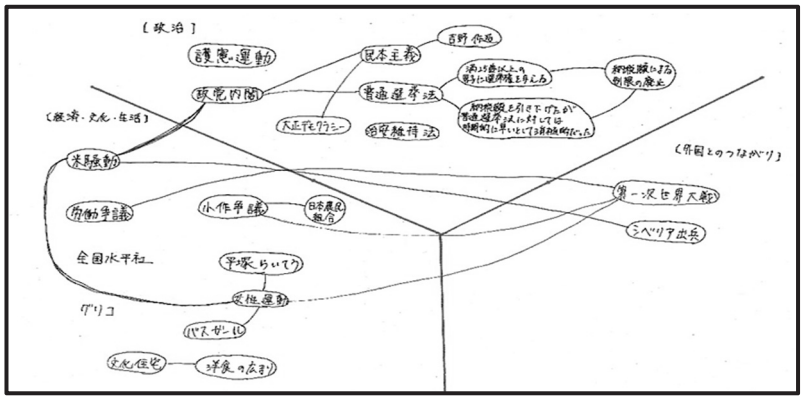
さらに，多角的視点で考察することができるように，「政党内閣」と「米騒動」について，政治家，国民，女性の立場からどう捉えるかを発問した。政治家の立場からは，選挙法は改正したが，普通選挙に消極的だったのはなぜかを調べ，国民の立場との考えの違いを捉えさせることができた。また，「米騒動」が起きた背景に，第一次世界大戦やロシア革命，シベリア出兵，女性の立ち上がりや民衆の運動の高まりがあったことを調べ，政治家，国民，女性の立場から行動や思いを捉えることができた。【資料③】



【資料③ 多角的視点で考察したＹチャート】

(3)まとめる・振り返る段階（課題の解決）【本時】

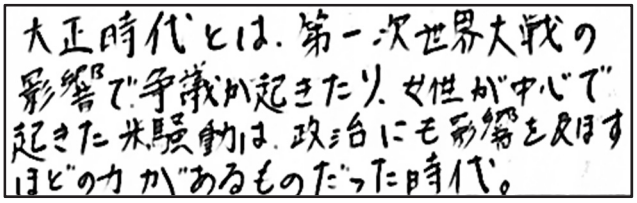
まず，Ｙチャート＋ウェビングマップをもとに，大正時代の全体像をクラス全員で確認した。そして，調べた歴史的事象の関連性に気づくことができるように，政治的側面，経済的側面，国民の生活・文化的側面，外交的側面でＹチャートに整理し直した。【資料④】その際，歴史的事象どうしの関連付けや時代の変化に大きく影響した事柄を選択・判断しながら整理するよう指示をした。



【資料④ まとめる段階のＹチャート】

次に，大正時代がどんな時代であったかをまとめることができるように，単元を貫く学習課題に立ち返って考えさせ，グループでまとめたことを交流させた。交流活動の中で，「私は，大正時代とは，政党政治が実現された時代だと思う。なぜなら，民主主義的な考えを大切にし，今までとちがう政治をつくったから」と主張した生徒や「第一次世界大戦の影響で民族運動が起き，それが大正デモクラシーにつながり，民衆の立ち上がりにつながっていったのではないか」と述べた生徒も

いた。【資料⑤】しかし，世界との関連に気づく生徒は少なく，「第一次世界大戦」や「アジアの民族運動」が大正時代の日本に与えた影響についてまとめることができなかった。


大正時代とは，第一次世界大戦の影響で，争議が起きたり，女性が中心で起きた米騒動は，政治にも影響を及ぼすほどの力があるものだった時代。

【資料⑤　まとめの記述】

最後に，「今を生きる私たちは，この大正の時代からどんなことを学べたか」という振り返りを行った。ある生徒は，視点を通して調べたことにより，社会や時代が変わっていったことに着目し，「日本の歴史は，世界の出来事と密接にかかわっている。一般民衆が運動を起こすと社会が変わっていくことを学んだ」と記述していた。

８　成果と課題

○多面的に調べる視点を与え，課題を追究させ，他者との交流活動を仕組んだことで，政治，経済，文化などの面から考察することができた。また，多角的な視点を与え，政治家，国民，女性の立場から歴史的事象を捉え直すことで，事象間のつながりや影響等について深く考察することにつながった。

○Y チャートに歴史的事象を書き出し，他の事象と関連付けたり，世界の出来事と比較したりすることで，大正時代の構造を捉えることができた。さらに，Y チャートの中のウェビングマップの歴史的事象の関連性について，交流活動で説明し合う姿が見られ，線で結んだ理由について調べたことを根拠にしながら，協議することができた。また，学力低位層の生徒も交流活動を仕組むことで，他者の意見を参考にまとめることができた。

●交流活動の際，共通点については事象間のつながりや影響について考えを深めることができたが，相違点について検討させることが不十分であった。少数意見にも着目させるよう，発問を投げかけることによって，時代に与えた影響の大小や与えた対象等について，さらに追究する意欲へとつなげる必要があった。

９　おわりに

今回，15 年で大きな変化を遂げた大正時代にスポットを当て，「大正時代とは，どのような時代だったのだろうか」という問いを解決していく授業を展開していった。時代を語ることができる生徒の育成を目指して，単元を構成し，そのための手立てを打っていった。明治時代との比較，調べる視点の設定，Y チャート，ウェビングマップによる関連付けなどの手立てを行ったことで，生徒達が真剣に単元の課題と向き合うことができたと考える。

将来の日本の主権者となる生徒達が，社会の事象に対して「問い」を持ち，様々な視点から調べ，他者と協働して課題解決していくことで，歴史から学ぶことの有用性に気づくことができたことは，大変価値があったと判断できる。

※参考文献

・中学校学習指導要領解説　社会編　　・日本文化の歴史 12 大正・昭和　小学館
・時代別日本の歴史 11　大正・昭和時代　学研　・写真でみる２０世紀の日本３PHP 研究所
・歴史アルバム　時代を決めた 114 のできごと　PHP 研究所

歴史的分野研究発表

「社会について問い続ける力を育成する社会科学習のあり方」

大分県大分市立南大分中学校　教諭　大野　亜希子

１　主題設定の理由

大分県中社研では，生徒が複雑な社会の中で変化に対応していくために，知識を活用し，社会的事象の因果関係，問題の所在，解決策などを考えるような，自らが「問い続ける」ことに重要性を見出した。研究主題の「社会について問い続ける力を育成する社会科学習のあり方」は，生徒自身が問題点を正しく把握し，その解決方法や手段を見つけるための必要な資質能力の育成を目指している。「社会について問い続ける力」とは，社会的事象に対して，積極的に向き合い，疑問を持ち，獲得した知識や技能を生かして，他者と協働して問題解決を図り，思考を活性化させることで再構成を行い，さらに，その学習過程を振り返ることで社会や人生をよりよいものにしようとする力だと考える。そこで「対話を重視した問題解決的な学習を取り入れ，思考を活性化させれば，自ら主体的に考える姿勢や深く学ぼうとする意欲が高まり，社会について問い続ける力が育つであろう」と研究仮説を設定した。学習指導要領の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を意識し，一度出した課題に対する答えを批判的に見直し，再構成を行うことで，問い続けるための視点や方法が身につく。加えて，生徒が引き受けたくなる学習課題を設定し，その課題を一人ではなくグループ内で追究する関係性を作り，考えを深め合うことで，生徒の「問い続ける力」の育成につながるのではと考えた。学習活動を振り返り，新たな視点に気づいたり，現在とのつながりに気づいたりすることも，「問い続ける力」の育成に必要な要素である。

そこで，知識の再構成に重きを置いた学習過程の工夫と対話を重視した問題解決的な学習による思考の活性化を通して，問い続ける力を育成することに重点を置いた研究を行っていくことを目指す。

２　研究内容

（１）学習過程の工夫

他者と協働して課題について調べ，追究していくなかで根拠を明確にして総合的に判断して個人で導き出した解（一次の納得解）を，視点や立場をかえて問い直してみたり，批判的な意見を受けたりして，考えに揺さぶりをかけて，再構成した解（二次の納得解）に深めることを目指す。また，そのために１人１台端末や思考ツールを効果的に位置づける。

（２）単元構造図

「問い続ける力」は，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して，思考を活性化させる場面の設定などを組み立てることで，必要な視点や方法が身につき，育成されると考える。大分県中社研では，単元構造図を作成することで，単元の目標や１時間ごとの授業の学習内容・活動が明確になり，生徒の「問い続ける力」につながると考えている。６つの項目を用いて作成することにした。

○単元を通して身に付ける力（単元の目標）	○目標達成のための課題（単元を貫く学習課題）
○１時間の学習課題・まとめ	○１時間のねらい・手立て
○１時間で習得させる知識や技能	○評価の重点化

3　研究の実態

（1）　単元名　　幕府の改革と社会の変化

（2）　目標

・幕府の政治が次第に行き詰まっていく様子について，幕府の政治改革の政策を諸資料などで調べることを通して，社会と経済の変化と関連させて理解できるようにする。

・幕府の政治の立て直しに効果的な政策について，社会と経済の変化と関連付けて，多面的・多角的に考察し根拠に基づいて自分の考えを表現できるようにする。

・幕府の政治が行き詰まりを見せたことについて，社会と経済の変化を踏まえながら，他者と協働して主体的に追究するようにする。

（3）　評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革，新しい学問・思想の動きなどを基に，諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめ，幕府の政治が次第に行き詰まりを見せたことを理解している。	交易の広がりとその影響，産業の発達と文化の担い手の変化，社会の変化と幕府の政策の変化などに着目して，事象を相互に関連付けるなどして，近世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し，表現している。	近世の日本について，よりよい社会の実現を視野に，幕府の行き詰まりを主体的に追究しようとしている。学習過程では他者との協働のなかで，視点を明確にし，振り返るとともに，次の学習へのつながりを見出そうとしている。

（4）　単元指導計画

単元名　幕府の改革と社会の変化

単元を貫く課題　どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だったのだろうか。

○…評定に用いる評価　　●…学習改善に関する評価

時	学習活動	指導上の留意点	評価の方法
1	貨幣経済が農村に浸透し，どのような影響があったのか，一揆や打ちこわしのグラフから読み取る。徳川吉宗が，改革をどのように取り組んだか内容について理解する。	・一揆や打ちこわしのグラフから，社会の変化を読み取らせる。 ・享保の改革について，諸資料から理解させる。	○享保の改革の効果を分析して，記述している。 〈知・技〉
2	田沼意次の政治と寛政の改革の内容について，メリット・デメリットに分類して比較することを通して，それぞれの改革の重点を理解する。	・二人の政治のメリット・デメリットについて考察することを通して，それぞれがどこに重点を置いたのか理解させる。 ・狂歌から，二人の政治を比較させる。	○それぞれの改革の重点を，記述している。〈知・技〉 ●既習事項を振り返り，社会的事象のつながりを見出そうとしている。〈主〉
	単元を貫く課題：どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だったのだろうか。		
3	社会が変化するなかで発展した学問や文化の特色を，諸資料から読み取る。	・諸資料から，学問や文化の特色を理解させる。	○化政文化の特色について，背景に基づいてまとめている。〈知・技〉
4	日本の社会の変化と世界の変化と関連付けながら，天保の改革の特色と幕府の行き詰まりを理解する。	・天保の改革と享保・寛政の改革の背景の違いを考えさせる。 ・天保の改革の内容を理解させる。	○天保の改革について，内容をまとめている。（知・技）
5	どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だったのだろうか考える。	・田沼の政治と寛政の改革の内容で，社会の変化を考えながら，どの政策が効果的だったか理由と根拠について考えさせる。	○ペアでピラミッドチャートを用いて，理由と根拠を分けて表現する。〈思・判・表〉 ●既習事項を振り返ったり，仲間と協働したりして考察している。〈主〉
6 本 時	どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だったのだろうか考える。	・仲間の意見を聞いて，新たな視点に気づき，自分の考えを批判的に見直しさせる。 ・単元を振り返らせ，次の単元に繋げさせる。	○効果的と思われる政策について，新たな視点や根拠に基づいて，説明している。〈思・判・表〉 ●学習を振り返り，次の単元や現在の生活と関連付けようとしている。〈主〉

（5） 単元構造図

単元の目標：幕府の諸改革について，事象同士の因果関係に着目して，それらを関連付けて多面的・多角的に考察し，改革における諸政策の効果を根拠に基づいて表現することができる。

単元を貫く課題：どのような政策が幕府の立て直しに効果的だったのだろうか。

時	学習課題	ねらい・手立て	まとめ	習得させる知識・技能
1	社会の変化に対して，どのような改革を行ったのだろうか。	打ちこわしや百姓一揆の発生数を分析することを通して，江戸時代の社会が変化したことを理解する。	享保の改革は，一揆や打ちこわしが増加した社会の変化に対して，幕府の財政の立て直しを年貢の強化と社会を安定させる改革を行った。	徳川吉宗，享保の改革，公事方御定書，目安箱 問屋制家内工業，工場製手工業，小作人，地主，百姓一揆，打ちこわし
2	田沼の政治と寛政の改革はどのような考えをもって改革を行ったのだろうか。	田沼の政治と寛政の改革について，メリット，デメリットを考えることを通して，社会の変化に対応できているかどうか理解する。	幕府の財政難の立て直しと一揆や打ちこわしが増加，外国の接近が見られる社会の変化に対して，田沼の政治は貨幣中心，寛政の改革は農業中心という考えを持って改革に取り組んだ。	田沼意次，株仲間の奨励，長崎貿易，俵物，蝦夷地の調査，印旛沼の干拓 松平定信，寛政の改革，米の備蓄，昌平坂学問所，間宮林蔵 天明のききん，浅間山の大噴火，ロシアの接近
	単元を貫く課題：どのような政策が幕府の立て直しに効果的だったのだろうか。			
3	新しい学問と化政文化の特色はなんだろうか。	社会の変化の中で発展した学問や文化の特色について理解する。	経済が発展し，庶民が担い手となり，栄えた。また，社会の変化に対応するような人材育成が庶民，藩の間で盛んになった。	国学，本居宣長，蘭学，杉田玄白，解体新書，伊能忠敬，化政文化，喜多川歌麿，葛飾北斎，歌川広重，藩校，寺子屋
4	天保の改革は，どのような社会背景に対応した内容だったか。	それまでの社会の変化と異なる点が出てきたので，以前の改革を参考にした天保の改革では行き詰まりを見せたことを理解する。	以前よりも貨幣経済が浸透し，外国船の接近が増え，幕府の内部からも批判が見られるようになった社会を背景に，享保・寛政の改革を模倣した改革を行ったが幕府の権威の失墜と行き詰まりが明らかになっていった。	異国船打払令，大塩平八郎，大塩の乱，天保の改革，水野忠邦，異国船打払令の緩和，上知令，株仲間の解散 外国船の接近，天保のききん，幕府関係者の反乱，大名や旗本の反対，雄藩，藩の改革
5	どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だったのだろうか。	田沼の政治と寛政の改革について，既習事項を振り返りながら，根拠に基づいて，理由を表現することができる。	幕府の財政基盤は米中心だったが，都市部や農村部に貨幣経済が浸透している点に着目した政策が，立て直しに効果的である。	・ランキング ・ピラミッドチャート ・ロイロノート ・教科書や資料集から根拠を見つける。
6（本時）	どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だったのだろうか。	幕府の立て直しにふさわしい政策について，仲間の選んだ理由を聞いて自分の考えをさらに深めて，表現できるようになる。	幕府を立て直すために，貨幣経済が都市部だけでなく農村部にも浸透していることに着目して，年貢だけでない現金収入の政策や一揆や打ちこわしに対応している政策がふさわしい。	・ピラミッドチャート ・聞き取り用のメモ・振り返り

単元のまとめ

幕府の立て直しに有効な政策は，幕府の財政基盤と社会の変化を踏まえながら根拠をもとに理由を述べる。

幕府を立て直すためにふさわしい政策は，貨幣経済が都市部だけではなく農村にも浸透していることに着目し，年貢だけではない現金収入の策や，一揆や打ちこわしが増加しているので社会の安定策などである。

単元の振り返り：根拠に基づいて自分の考えを表現し，他者の意見を取り入れて新たな意見を再構成した。次の単元へと結び付けた。

（6） 本時案

①本時の目標

・田沼と定信の政策について，仲間の意見を聞いて新たな視点に気づくことを通して，自分の考えを深め，根拠にもとづいて表現することができる。

②展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価・留意事項
5	○当時の社会情勢の確認を行う	○農村の変化や商業の発達などの社会情勢に対応した取り組みだったこと確認させる。	
5	○前回作成したピラミッドチャートを確認する	○ペアで発表する内容を確認させる。	
	めあて　幕府の立て直しにふさわしい政策について，仲間の選んだ理由を聞いて自分の考えをさらに深めて，表現できるようになる。		
	課題　どのような政策が，幕府の立て直しに効果的だろうか。		
15	○班で発表を行う (思考の活性化)	○ペアで作成したピラミッドチャートを班で発表させる。 ○発表の内容をお互いにメモをさせる。 ○クラスで抽出し，何人か発表させる。	
15	○個人でピラミッドチャートを作成する	○3つのピラミッドチャートをもとに,個人でピラミッドチャートを作成させる。教科書や資料集から根拠を探して，文章として表現させる。	思考・判断・表現
5	まとめ	○幕府の立て直しにふさわしい政策を選び根拠を明確にして，理由を記述させる。	
	予想される生徒のまとめ 株仲間の奨励・・・都市部だけではなく，農村にも貨幣経済が浸透してきているので，幕府の財政基盤である年貢米の収入に頼らず，商業を奨励して商人から税金を集めることは幕府の財政立て直しに効果的であると考える。 囲い米・・・・一揆と打ちこわしのグラフから，天明の飢きんの時期に打ちこわしと一揆が増加していることがわかり，幕府の財政基盤を支える農民の生活を支援することにつながるので，この政策は効果的であると考える。		
	まとめ　幕府を立て直すために，貨幣経済が都市部だけでなく農村部にも浸透していることに着目して年貢だけでない現金収入の政策や一揆や打ちこわしに対応している政策がふさわしい。		
5	○振り返り	○本時の活動を通して，自分の活動を振り返らせる。ルーブリックをもとに評価を行い，自分の学びについて振り返らせる。 ○「～わかった」だけでなく，学習過程でできるようになったことやこれからの時代や現在の社会とつながりについて見出させる。	主体的に学習に取り組む態度
		予想される振り返り ・現代でも通用するような政策がある。・ほかの仲間の意見を聞いて，考えが深まった。 ・自分では気づかない視点に気づかされた。	

4　成果と課題

この単元は，社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革，新しい学問・思想の動きなどを基に，幕府の政治が次第に行き詰まりを見せるようになったことを理解させる内容である。そこで，社会や経済の変化に対応している諸改革のうち，田沼の政治と寛政の改革について単元を貫く課題を設定して，幕府が行き詰まっていく様子を考察させようと考えた。４つの政治改革の内容や社会，経済の変化についての多くの社会的事象同士を関連づけながら，生徒に「問い続ける力」を育成するための学習活動に取り組むために，単元指導計画と単元構想図の作成に取り組んだ。

最後に単元全体を通して振り返りを行うと，生徒から，「色々な人と意見を交換することで，同じ意見でも自分の考えがより深められ，違う意見だったら自分とは新しい視点でみることができるので交流することは大切だと思いました。」，「これからこういう経験を積み重ねていきたいです。」という記述が見られた。これらの記述から，生徒がこの単元で身についた能力を自覚し，次の単元に繋げていこうとする姿勢が見られた。単元全体を通して，知識の再構成に重きを置いた学習過程の工夫と対話を重視した問題解決的な学習による思考の活性化により，問い続ける力を育成することに繋がったのではないかと考える。

（1）学習過程の工夫

ア　思考の活性化

○一次の納得解と二次の納得解を比較すると，新しい視点に気づく様子が見られた。

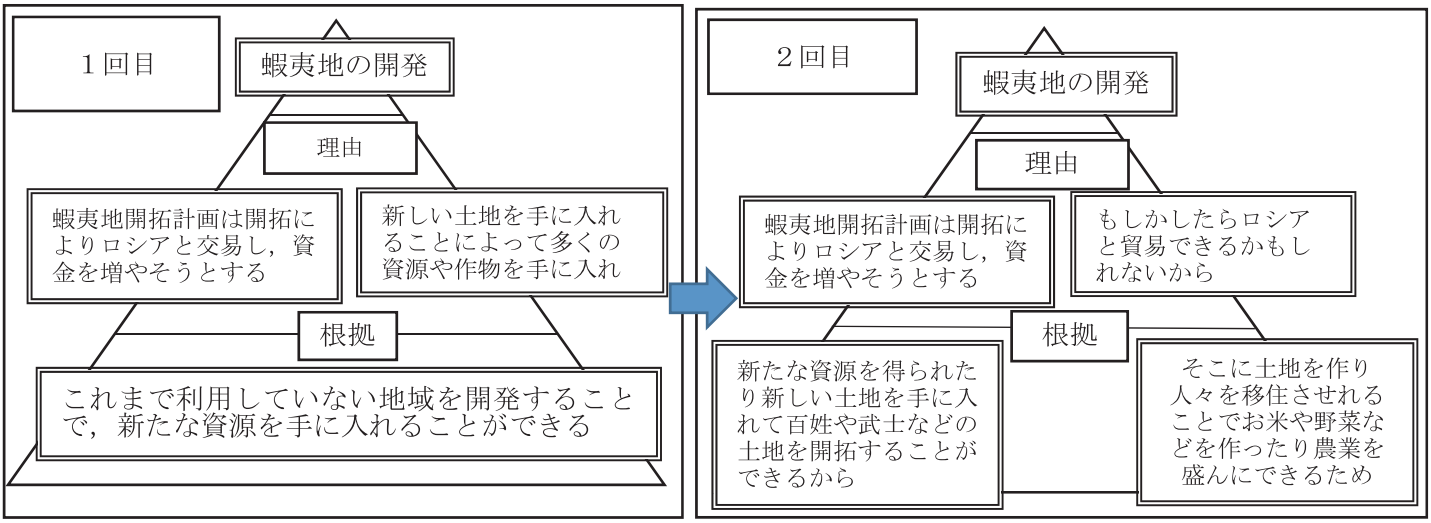
○ピラミッドチャートを活用することで，理由と根拠を区別して考えるようになった。

○生徒の思考の揺さぶりとしての思考ツールの活用と仲間の意見が参考になり，思考が活性化としたといえる。

▲根拠と理由の区別がついておらず，根拠にあたる内容が薄くなっている。

▲幕府の立て直しの定義があいまいだったので，検証するのが難しい。

〈生徒のピラミッドチャートより〉※二重線の枠は，生徒の記入



イ　ICT の活用

○ロイロノートでは授業で利用した生徒の「カード」はデータとしてクラウド上に蓄積されるので，単元で積み上げた学習の内容の過程を振り返りやすい。

▲ICT 機器の操作が難しく，機器やアプリの使い方を一人ひとり対応するので時間がかかる。

（2）単元構造図

○単元のなかで，生徒が考える場面と授業者が教える場面の組み立てができ，指導者が見通しをもって取り組む事ができた。

▲単元構想が，目標を達成するためにふさわしい内容だったか。

歴史的分野研究発表

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求
～主権者の一人として，明治期の国づくりを追求する学習活動を通して～

熊本県嘉島町立嘉島中学校　教諭　中村　俊介

１　はじめに

「投票率の低下」という国民の政治参加への課題を，社会科の教師になってから何度も目にしてきた。選挙権のような政治参加の権利は，国民に初めから保障されていたわけでは無く，これまでの歴史の中で，私たちの祖先が獲得してきたものである。投票率の低下という課題はこういった権利について現代社会を生きる多くの人々が行使していないことを意味している。私には以前から，将来主権者となる生徒に，世の中に関心をもち，政治参加に対する意識を高めるような授業をしていきたいという思いがあった。

令和２年度に，熊本県中学校社会科教育研究大会で歴史的分野の公開授業を行う機会をいただいた。今回の授業では，欧米諸国の近代革命から大日本帝国憲法の制定までを一つの単元として構想した。この時代は，欧米諸国を中心に，革命による主権者や議会の変化，国民の権利の獲得が各国で起こり，政治・産業の変化が著しく見られる時代である。日本における明治時代は，日本が短期間で近代化を成し遂げた特徴的な時代である。本単元を，生徒が欧米諸国と日本の国づくりを比較したり，それらの類似や差異を明らかにしたりしながら，自分を当時の国づくりを行う立場に置き替え，新たな時代の国づくりについて考えることができる単元だと捉えた。生徒が当時の国づくりを行う一人という立場で明治期の国づくりについて考える学習活動を通して，生徒の政治参加への意識を高めるとともに，民主主義の担い手に必要な資質・能力の育成を図りたいと考えた。

２　研究主題との関連

熊本県中学校教育研究会社会科部会では，研究主題として「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求」を掲げて研究を進めている。本研究会では，「民主主義の担い手に必要な資質・能力」を「よりよい社会と幸福な人生をつくり出すために，社会の問題に気付き，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力」と捉えている。今回の単元では，近代革命によって起こった欧米諸国の国家の在り方について「主権」「議会」「人権」の３つの視点を設定し，近代国家を考える視点と位置づけた。また，生徒が当時の国づくりを行う一人という立場から，当時の日本の国づくりについて考えたり，当時の人々の思いや考えを多角的に考察したりしていく。生徒がこのような学習を経験することは，本研究会が目指す「民主主義の担い手に必要な資質・能力」の育成につながるものと考えた。

３　研究の仮説

明治期の日本の国づくりについて，生徒に当時の国づくりを行う一人として，国際関係等に着目し，自分の意見を持ちながら考えさせることができれば，現在の政治についても関心を高め，国際関係等に着目し，多面的・多角的に判断し，主体的に考えようとする生徒を育てることができるであろう。

生徒たちが，民主主義の担い手となるためには，日本の政治について自分の意見を持ち，主体的に考えようとする態度を育成する必要があると考える。本単元の学習を通して，生徒が「自分だっ

たらどのような国づくりをしていくだろうか。」という「問い」を持ち，歴史的事象の時期や推移，国際関係などに着目しながら，当時の国づくりについて考察する学習は，生徒の政治に主体的に考えようとする態度を育てることにつながると考えた。

4　研究の視点

（1）単元設計の工夫

これまでは通史的記述である教科書の内容にしたがって事実や因果関係を確認させる授業を行っていた。これに対して本単元では，生徒が「歴史的な見方・考え方」を働かせ，自分の意見を持ちながら明治期の日本の国づくりについて学習することができるよう，自分たちの「国づくり草案」を考える活動を設定した。

（2）視点や立場の明確化

単元を通して「主権」「議会」「人権」という国づくりの視点を設定することで，生徒が各国の在り方について類似や差異を比較することができるようにした。また，「政府」と「国民」の立場から，明治期の日本の国づくりに対する考えや思いを類推することで，生徒の視野を広げながら明治の国づくりを学習できるようにした。

（3）学びを生かす振り返り

毎時間の学びを，生徒が視点や立場を意識し，それぞれが明治の単元シート（**資料１**）に記録したり，学習で使った資料を「学習の足跡」として掲示したりしながら学習を積み重ねた。生徒が前の時間までに学習したことを振り返りながら次の学習に生かすことで，主体的に学習に取り組むことができるようにした。

資料１　明治維新の単元シート

「明治維新」 単元シート　　2年（　）組（　）番 氏名（　　）

単元を通して考える学習課題（毎時間の学習の終わりに、単元を通して考える学習課題につながる学びを記入しましょう。）

欧米の近代革命は、日本にどのような影響を与えたのか			
	学習活動		学習活動
1.	新政府の国づくりの方針から考える。	6.	「国民」と「政府」の国づくりに対する思いを考える。
2.	新政府の政策から、明治日本の国づくりを考える。	7.	明治日本の憲法について考える。
3.		右には、「政府」、「国民」の立場に立ち、それぞれの思いや考えについて記録していきましょう。	
4.			
5.			

「政府」と「国民」の立場に立ち、明治政府の国づくりについての思いや願いを記録しよう。

政府	国民

「単元を通して考える学習課題」について本単元で学んだことを振り返り、書きましょう。

5　研究の実際

（1）単元設計の工夫

単元終了時に期待する生徒の姿（ゴール）

近代革命によって起こった欧米諸国の変化について「主権」「議会」「人権」の視点で考察し，欧米諸国がアジアに迫ってきていたという当時の歴史的背景を根拠としながら，当時の日本が江戸末期から明治期の国づくりで，欧米諸国から受けた影響について自らの考えを表現している生徒

本単元の計画を行うにあたって，上に示したような単元終了時に期待する生徒の姿を考えた。このような生徒の姿を達成するために本単元で生徒に働かせたい「歴史的な見方・考え方」は次の３点である。

①　当時の欧米諸国と日本の国づくりについて，時期や推移に着目しながら，考察すること。

②　江戸の封建制度を振り返り，新しい日本が目指す国づくりについて，欧米諸国との類似や差異に着目しながら「２年３組国づくり草案」としてまとめ，自分の意見をもつこと。

③　大日本帝国憲法と「２年３組国づくり草案」を比較することで生まれる「問い」をもとに，明治期の日本が目指した国づくりと欧米諸国との因果関係について考察すること。

今回，「市民革命や産業革命を成し遂げた欧米諸国がアジアに迫ってきていたということは，江戸時代以降の日本の国づくりについては無関係ではないだろう。」という生徒の声から，「欧米の近代革命は日本にどのような影響を与えたのか」という単元を貫く課題を設定した。このような課題を設定したことで，生徒が当時の国内の状況だけで無く，国際関係の視点から考えることができ，より多角的に日本の国づくりについて考えていくことができる単元構成となった（**資料２**）。

また，「２年３組国づくり草案」を作成する学習活動を行ったことで，本時では，自分たちが考えた国づくり草案と大日本帝国憲法との差異に気づき，明治の国づくりに対して「問い」を共有しながら学ぶことつながった。

資料２　本単元の単元計画（一部抜粋）

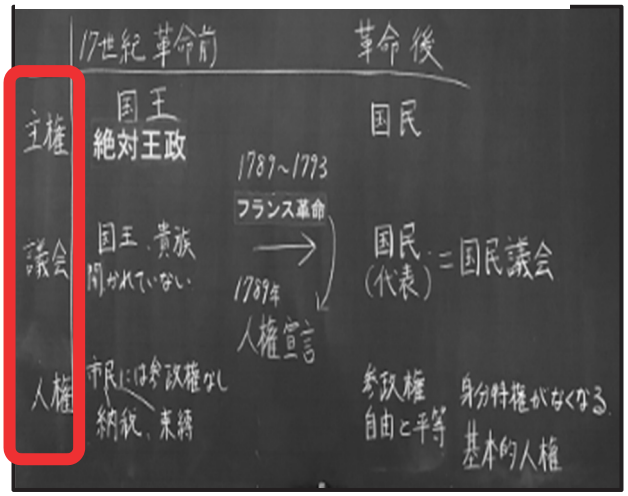
6	1	「江戸幕府の滅亡」 p158～p159 ○江戸幕府の滅亡までの過程を理解する。 ○江戸幕府の政治の課題はどのような点だったのかを振り返る。	○江戸幕府の滅亡までの過程について，理解している。 【知識・理解】 （見方・考え方） 「時系列」
7	1	「新時代の日本の国づくりを考えよう」 ○今後の日本が近代化を図るために，どのような国づくりを進めるか，「主権」「議会」「人権」の点から考える。	○開国後の日本が近代化を果たすために必要な国づくりの方向性に関心をもち，意欲的に追究している。 【関心・意欲・態度】 （見方・考え方） 「歴史的背景」
8	1	「新政府の成立」 p160～p161 ○五箇条の御誓文，版籍奉還や 容と目的について理解する。 ○これからの日本を変える具体 える。	○五箇条の御誓文の内容を実現してい

単元前半を振り返るとともに，後半の明治期の日本の国づくりについて「問い」をもつために設定した活動。

（２）視点や立場の明確化

本単元では，欧米と日本それぞれの近代化を比較し，日本の国づくりを考える活動につなげるために，欧米の近代革命について「主権」「議会」「人権」という３つの視点でまとめながら学習を行った（**資料３**）。このことにより，「２年３組国づくり草案」の作成では，欧米諸国と江戸末期の日本の政治で学習したことを生かしながら国づくり草案の話し合いを進め，内容を決定することができた。

資料３　視点を明確にしたフランス革命



また，大日本帝国憲法との比較に生かすことができた。また，様々な国の「人権」という視点については，「国や時期が違っても権利というのは，歴史の中で人々が革命や運動によって獲得してきたもの。」ということに気づく生徒も見られた。

単元後半からは，「政府」と「国民」という大きく２つの立場を設定しながら，明治維新の様々な政策や国の変化についてそれぞれの思いや考えを類推する活動も行った。このことにより，明治の国づくりについて多角的に考察しながら学習することにつながった。

本時の学習では，欧米の近代革命と江戸時代の日本を比較しながら生徒が考えた国づくり草案と大日本帝国憲法を比較した（**資料４**）。大日本帝国憲法で示された「主権」と「議会」について，自分たちが考えたものと明らかに違う点があったため，生徒に「なぜ，大日本帝国憲法のような内容にされたのか」，「当時の日本にとってこの内容で良かったのか」という「問い」が生まれた。そういった生徒の「問い」が，本時の学習課題「大日本帝国憲法は，はたして当時の日本に適した憲法だったのか」につながった。

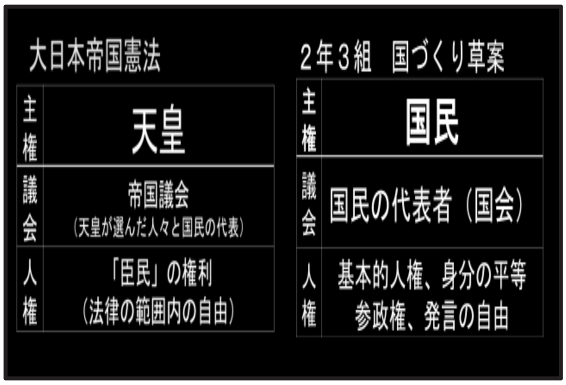
視点や立場を明確にしながら学習を進めたことにより，本時では，「適していた」「適していなかった」どちらの主張もこれまでの学習を根拠としたものが出されていた（**資料５**）。「主権」については，「日本はドイツと状況が似ていたからドイツと似た政策を行った。」「当時のように国の政策に対して国民の不満が多いままではフランスのように国内が混乱してしまう。」など欧米諸国での学びを当時の日本と比較し，その類似や差異に着目しながら，根拠を明らかにして主張していた。

また，「議会」については，「選挙権が 1.1％では自由民権運動を起こした人たちは納得しない。」という主張に対して，「江戸時代は，０だったものが 1.1％に増えているため，当時ならば，国民の意見を尊重しようとしたと言えるのではないか。」というような，江戸時代と明治時代の日本を比較しながら，時期や推移による変化に着目した意見を出す生徒も見られた。

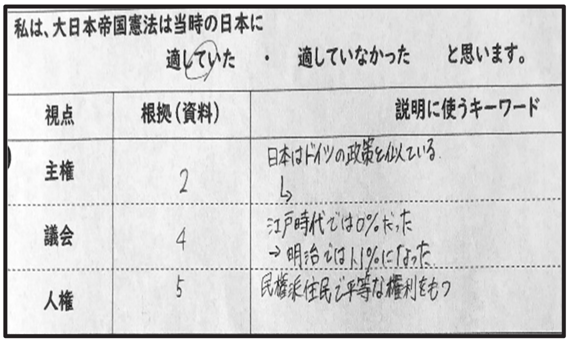
（３）学びを生かす振り返り

生徒が様々な資料をいつでも見直し，単元の流れを常に振り返ることができるよう，授業で使った資料の関連などが見える「学習の足跡」（**資料６**）

資料４　大日本帝国憲法と「２年３組国づくり草案」の比較

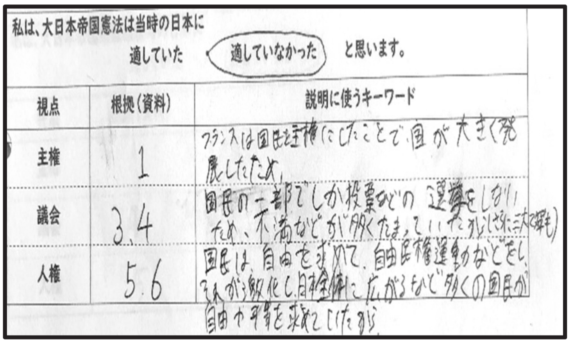


資料５　本時での生徒のワークシート



私は、大日本帝国憲法は当時の日本に
適していた　・　適していなかった　と思います。

視点	根拠（資料）	説明に使うキーワード
主権	2	日本はドイツの政策を似ている ↳
議会	4	江戸時代では0%だった →明治では1.1%になった
人権	5	民権派住民で平等な権利をもつ



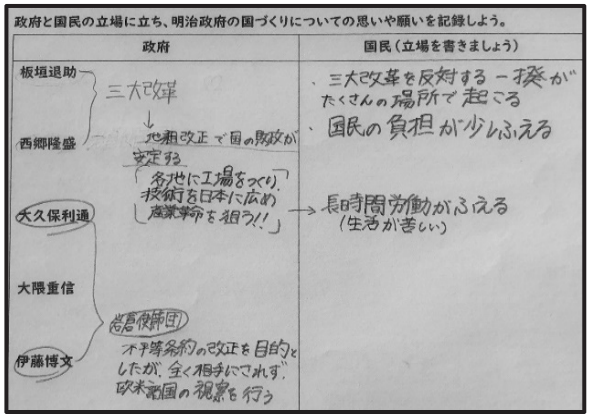
私は、大日本帝国憲法は当時の日本に
適していた　適していなかった　と思います。

視点	根拠（資料）	説明に使うキーワード
主権	1	フランスは国民を主権にしたことで国が大きく発展したため、
議会	3,4	国民の一部でしか投票などの選挙をしないため、不満などが多くたまっていた
人権	5.6	国民は自由をもとめて、自由民権運動などをし、それが激化し日本全体に広がるなど多くの国民が自由や平等を求めていたから

資料６　「学習の足跡」の掲示

を掲示し続けた。これらの掲示は，前時の復習を行うといった活用だけではなく，生徒が学習を進める上で，以前の資料から根拠となるものを見つけたり，歴史的事象の因果関係に気づいたりすることに生かすことができた。また，継続的に資料を増やしていくことで，毎時間の歴史学習の連続性を実感することにつながった。また，「政府」や「国民」が当時の政策に対してどのような思いや願いを持っていたのかを単元シートに残していった（**資料７**）。明治維新を学ぶ中で，「政府の立場から政策や大日本帝国憲法で優先したかったことは何なのか」，「国民の立場からどのような課題が残っているのか」などを考えることに生かされており，当時の政策や世の中の動きについて多角的に捉えることができた。

資料７　立場別の記録シート



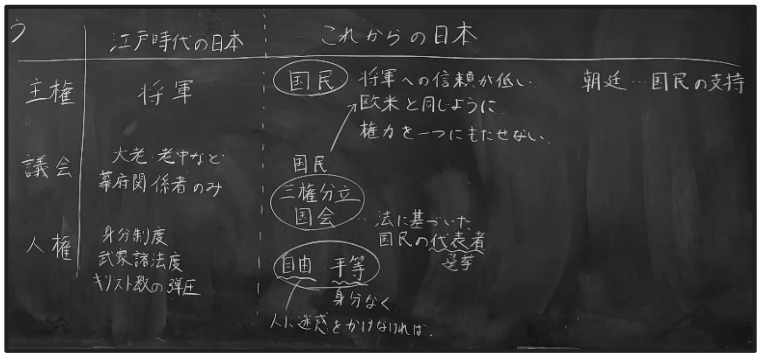
６　成果と課題

（１）単元設計の工夫

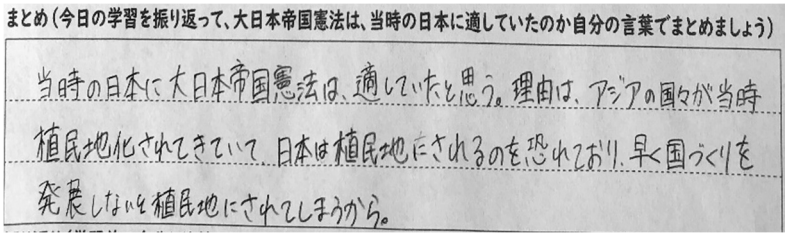
資料８は，生徒が２年３組国づくり草案について考えた時の板書である。この時，生徒は欧米諸国を参考に，国づくり草案を考えていた。しかし，本時の学習を終えて当時の日本が植民地化を避けるために日本が優先すべきだったことに気付き，根拠を持って考察することができた（**資料９**）。このことから，「歴史的な見方・考え方」を働かせることができた学習だったと言える。

課題として，現代から見る歴史と当時の正しい歴史認識を生徒に育てることができるよう資料の発掘と精選の必要性が挙げられる。また，今回のような主権者の一人として政治を見ていく視点を，後の歴史的分野の学習や地理的分野，公民的分野に生かすための系統化を図ることも必要である。

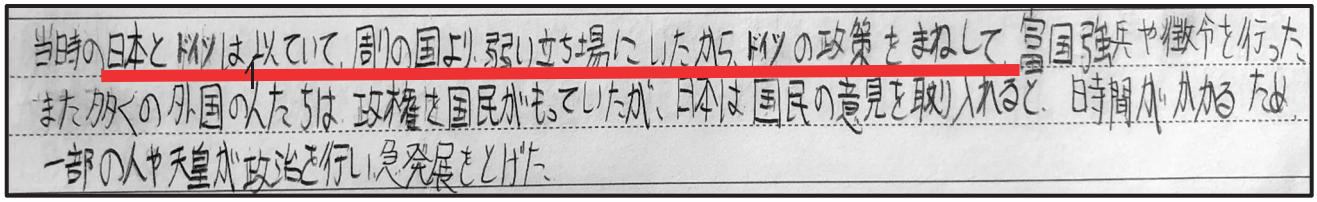
資料８　国づくり草案について考えた際の板書



資料９　生徒の振り返り



（２）視点や立場の明確化

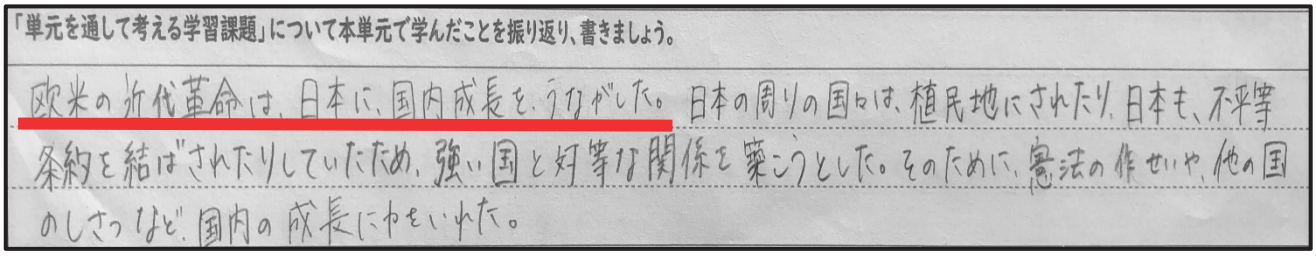


上は，本時終了後に生徒が記述した振り返りである。本単元では，単元を貫いて「主権」「議

会」「人権」の３つの視点について単元を貫いて設定してきた。この生徒は歴史的背景だけでなく，「主権」「議会」の視点から日本の明治維新とドイツの改革に共通点を見つけることで，大日本帝国憲法が制定された意図について理解を深めていることが分かる。視点や立場を明確にした授業を行うことで，歴史的な思考力・判断力・表現力を育成する授業づくりにつながると実感することができた。

課題として，単元後半では「国民」という立場を設定したが，その範囲や立場など定義づけが曖昧になってしまった。今後は「国民」など広義をもつ言葉での立場設定を避け，より明確な立場を設定することが，生徒の正しい歴史認識を育むことにつながると考える。

（３）学びを生かす振り返り


「単元を通して考える学習課題」について本単元で学んだことを振り返り、書きましょう。

欧米の近代革命は、日本に、国内成長をうながした。日本の周りの国々は、植民地にされたり、日本も、不平等条約を結ばされたりしていたため、強い国と対等な関係を築こうとした。そのために、憲法の作せいや、他の国のしさつなど、国内の成長にやをいれた。

上は，単元が終わった後の生徒の振り返りである。「欧米の近代革命は日本にどのような影響を与えたのか」という課題に対して，明治維新における日本の成長の背景には，欧米諸国の存在が大きかったことを実感している。学習後に，単元を貫いた学習課題を振り返ることによって，国際関係が国づくりに与える影響に気付くことができていた。

課題として，本時では，「学習の足跡」を掲示したことが意見をもつための参考になっていた反面，資料の多さや議論の焦点化の難しさにつながってしまった。振り返りに使う資料の精選と取り扱いについては，生徒がよりよい学びを実感するために今後も常に意識し，改善していく必要がある。

７　おわりに

今回，生徒が国づくりを行う一人という立場から明治期の国づくりについて考える授業を行った。単元終了後の生徒の振り返りの中に，「大日本帝国憲法の内容は当時の日本に適していたかもしれないけど，国民の意見や自由はどうなるのか疑問に思った。」と書いていた。この生徒にとって，明治時代の日本の国づくりを学習するだけでなく，次の歴史を学ぶ上での「問い」が生まれた授業になった。

今回の授業を通して，将来主権者となる生徒が，世の中に関心を持ち，「問い」を持ちながら様々な課題と向き合い，解決を図っていく経験を重ねる学習活動が「民主主義の担い手に必要な資質・能力」の育成につながっていくものだと考える。今後も社会問題に対して主体的かつ民主的な解決を図ろうとする生徒の資質・能力を育てるために，生徒が「問い」をもち，課題と向き合い，解決を図ることができるような授業を構想していきたい。

〈公民的分野〉

分野の研究提案　熊本県中学校教育研究会社会科部会
合志市立合志中学校　教諭　松岡　政晴

学習構想案　熊本市立清水中学校　教諭　山下　大輝

研究発表

鹿児島県	南大隅町立根占中学校	教諭	大隣　佳甫
沖縄県	東村立東中学校	教諭	比嘉　共樹
熊本県	西原村立西原中学校	教諭	伊藤　文徳

公民的分野の研究提案

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む公民学習の探求
～現代社会な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

熊本県中学校教育研究会社会科部会公民的分野部長
合志市立合志中学校　松岡　政晴

公開授業の見どころ

本授業では，消費者一人一人がエシカル消費を行うことで実現する「サーキュラーエコノミー（循環型経済または循環経済）型の社会」を取り扱う。資料提示や発問によって，生徒の中に生まれる「問い」を取り上げながら学習する様子に注目していただきたい。

家計（＝消費者）が，企業や政府を動かす原動力となることに気付かせたいというねらいから，単元を貫く学習課題を「私たちは，どのような消費社会をつくっていくべきなのか」と設定した。本授業は，政治分野で行う主権者教育を経済分野において行うという提案を含んでいる。このような観点から，授業を参観していただきたい。

1　研究主題について

公民部会では，研究主題の「民主主義の担い手に必要な資質・能力」について，現代社会に見られる課題を自分事として捉え，よりよい社会の構築に向けて，社会参画や主体的な行動目標等を創造し実践したりしていこうとする力，公正に判断する力，社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察する力，考察，構想したことについて説明したり，それらを基に議論したりする力等であると捉えている。

また，従来の社会科教育研究の中では，子どもたちが学習前に持っていた社会的事象に対するイメージに対し，「視点や方法」を与えることで，「子どもたちの社会的事象に対する見方や考え方が変化する」という文脈で説明されてきた。「視点や方法」として多く用いてきたものが，「資料の提示」である。生徒一人一人の見方・考え方を働かせるために，どのような資料を，どのタイミングで，どのように提示をするか，試行錯誤しながら授業づくりに取り組んできた。

見方・考え方を働かせるのは生徒であり，生徒自ら働かせようとするために必要なことの一つが「問い」である。生徒の分からないことやつまずきなどが「問い」となるなど，生徒自ら「問い」を生み出す授業づくりが求められる。

研究主題に迫るため，公民部会のこれまでの取組を踏まえつつ，「単元終了時に期待する生徒の姿」を設定し，単元デザインをどのように構想するか，社会的な見方・考え方をどのように働かせるか，生徒の「問い」につながる発問をどう生み出すか，研究を深化させていきたい。

2　研究の視点について

熊本県中社研が示す研究の視点（目標・内容・方法）を公民的分野の授業にあてはめると，次のようになる。

（1）目標

何ができるようになるかという視点については，消費によって起こる社会の問題を解決して，よりよい社会を形成しようとすることである。家計（消費者）が企業や政府を動かす原動力となることが大事であると考えるようにしていく。

市場の働きと経済について，現在の消費社会で起きている地域や人・社会，環境の問題を解決し，持続可能な社

会の形成に参画態度を育てたい。このようにし，社会形成を形成する当事者として，社会問題の解決に向かう態度及び公正に判断する力を身に付けさせたい。

単元の目標：①身近な消費生活を中心に，経済活動の意義について把握するとともに，現在の消費社会で起きている問題やその解決策について理解している。②対立と合意，効率と公正，分業と交換，希少性などに着目して，個人や企業の経済活動における役割と責任や，現在の消費社会で起きている地域や人・社会，環境における問題の解決策について，多面的・多角的に考察し，表現している。③市場の働きと経済について，現在の消費社会で起きている地域や人・社会，環境の問題を解決するためのエシカル消費を通して持続可能な社会の形成に，主体的に参画しようとしている。

本時の目標：日本におけるサーキュラーエコノミー型の社会の実現のためには，一人一人がエシカル消費を通して様々な消費をめぐる問題の解決に関わり，政府や企業を動かしていく必要性について説明することができる。

（２）方法

単元を貫く課題を「私たちは，どのような消費社会をつくっていくべきなのか」と設定した。一人の主権者として自分の消費を見直して社会と関わることを把握し，消費による社会問題を自分の問題として捉えることができるように単元の計画を行った。

（３）内容

サーキュラーエコノミー型の社会を実現していくためには，政府や企業が努力を続けなければならないという見方・考え方を，単元計画，資料と発問，そして生徒からの「問い」を通して変容するような学習活動の展開を構想している。政治家を選んでいるのは誰であるのか，企業の商品を買っているのは誰であるのか，といった生徒の思考を揺さぶる議論を仕組んでいく。

単元終了時に期待する生徒の姿は，「サーキュラーエコノミー型の社会を実現していくためには，私たち一人一人がエシカル消費を行っていくことで，様々な社会問題の解決に関わり，企業や政府を動かしていく原動力となることが大事であると考えられる生徒」である。

３　公民的分野における研究の重点事項について

（１）経済分野で「サーキュラーエコノミーの実現」を扱う意義

単元を貫く課題を「私たちは，どのような消費社会をつくっていくべきなのか。」と設定した。多くの生徒がモノを購入しようとする場合，値段やデザイン，現在であればすでにモノを購入した人の評価などを選択基準にする場合が多い。これまでの自分の消費活動を振り返った上で，現代社会が抱える環境問題が密接に関係していることに生徒たちを出会わせる。これまでの大量生産・大量消費を前提としたリニア（直線）型の経済システムに代わる，サーキュラーエコノミーの実現に向けて，どのような消費社会をつくっていくべきかを考えていく。このようにして，国や社会の問題を自分の問題として捉え，自ら考え，自ら判断し，行動していく主権者を育成する主権者教育を，経済分野で行う授業を提案したい。

（２）ICT を活用した思考の揺さぶり

学習アプリ「ロイロノート」を活用して生徒の意見の集約や提示を行い，思考過程の可視化へとつなげていく。思考の可視化による生徒同士の協働，また，自己の考えを広げ深める「対話的な学び」を行う。つまり，生徒同士の多様な考えを知ることで，社会的事象は様々な視点・考え方で捉えられることに気付かせたい。さらに，ICT を活用した「見方・考え方」を働かせる授業についても議論を深めていきたい。

（３）発問の工夫と「問い」を生む授業デザイン

主体的・対話的で深い学びを生み出すためには，「どうして？」「どのように？」「何を？」といった「問い」が生徒から生み出されることが重要である。その「問い」が，単元の学習で完結するのではなく，生涯にわたって問い続けていくようになることを期待したい。ダイヤモンドランキングを用いることで，「私たちが消費を行う際，なるべく安いものを求めるのはなぜか」という「問い」を引き出していきたい。また，「自分たちの消費によって，どのような問題が起きているのか」と生徒に投げかけ，「なぜ欧州では，サーキュラーエコノミー型の社会に向けた取組が進んでいるのか」について考えさせたい。次時の発問を導くような「問い」が生まれることで，生徒が見通しをもって主体的に単元の学習に取り組めるよう，授業デザインを構想する。生徒の「問い」が，主権者の育成に結びつくことが重要であると考える。

４　公開授業までの取り組み

（１）授業検討会（R4.6.6）

最初の構想案検討会において，単元を貫く課題は，「私たちは，どのような消費社会をつくっていくべきなのか。」としていた。授業者の綿密な教材研究もあり，この段階で単元計画は完成された状態であった。消費者それぞれが各自にとっての社会的課題の解決を考慮したり，そうした課題に取り組む事業者を応援したりしながら消費活動を行うことを生徒に考えさせることが，本単元を扱う意義だという授業者の思いがあった。

授業者は教科書を慎重に分析した結果，「エシカル消費」を通して消費生活について考えていく学習内容を構想していた。私たちが行う消費が，環境や人，社会に多くの問題を生んでいることを理解し，それらに配慮したエシカル消費を行って，持続可能な社会の形成を目ざす生徒の育成を目ざすというものであった。

議論は，単元全体ではなく，本時の学習課題と学習活動を中心に進められた。単元のまとめとなる授業であるため，単元を貫く課題のまとめにつながる本時の学習課題，学習活動をどう設定するか意見が出された。また，授業者が用意した資料について，生徒に提示するものはどれがよいかについても議論された。

（２）熊本県中学校教育研究会社会科部会　夏季研修会（R4.8.1）

学習課題を「私たちは，エシカル消費を実践していく社会をどのようにつくっていけばよいか。」，追究課題を「エシカル消費が普及しない中で，私たちは消費を通して社会とどのように関わればよいか。」と設定し，熊本県内から参加した社会科教員で議論を重ねた。

「日本ではエシカル消費は普及していない，また政治の争点にもなっていない。そのような中で，なぜエシカル消費を扱うのか」といった意見が出された。これに対し，エシカル消費の教材化によって生徒の消費生活の意識を喚起していきたい。やらないよりもやるべきだという，持続可能な社会の実現に向けた行動ができる，民主主義の担い手を育成したいという授業者の思いを確認することができた。

議論が進む中で，「エシカル消費を題材にするだけでは，社会科というよりも家庭科の授業になってしまうのではないか」という意見も出された。「どんな社会をつくっていくのか」という視点で考えていくのが社会科で扱う意義であり，エシカル消費は，「サーキュラーエコノミー」形成の手段であるということから，「サーキュラーエコノミー」に向けた消費社会について考えを深めていくように展開していくという案にまとまっていった。

（３）熊本市授業研究会（R4.10.4）

九州大会の事前授業と位置づけて，熊本市の社会科教員が参集して授業を参観し，その後，授業研究会で協議を行った。

授業では，生徒がタブレットを活用して送られる資料をしっかりと読み取ることができていた。その資料から読み取ったことを基に，自分の考えを練り上げていき，自分の言葉で発表をすることができていた。生徒から多くの意見が出される中，授業者から「なぜ（企業は）本気でサーキュラーエコノミーの形成に取り組もうとしていないのか。」という発問が出された。生徒同士，または生徒と授業者との議論の中で，消費者が企業を動かしていくという授業者のねらいに迫る考えに生徒は向かっていった。

授業研究会では，「経済の三主体である『家計，企業，政府』のうち，『家計』と『消費者』が生徒の中で一致して捉えられているのか」といった意見が出された。これに対して，経済分野の授業である以上，「家計」という言葉は使う必要性があることを確認した。ただ，生徒に自分事として捉えさせるには「消費者」という視点で考えていく必要もあるという考えにまとまっていった。

本時の学習課題について，このときは「日本でサーキュラーエコノミー型の社会を実現させるために，家計・企業・政府のどこが最も努力すべきか」であったが，「どこが最初に取り組んでいくべきか」と変更してもよいのではないかという意見も出された。発問に対しても，「なぜ本気で取り組もうとしていないのか」と，消費者の立場で考えさせるのもよいのではという意見も出された。本時の学習課題と発問のありかたについて議論が進んでいった。

５　授業研究会における協議

消費者主権という考え方をより深めるためには，どのような資料を提示し，発問や議論を展開していくか。「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む公民学習」の実現に向けて，参会者のご意見を募りたい。

公開授業で提案した「経済分野における主権者教育」について，授業研究会の中で協議していきたい。

社会科(公民的分野)学習構想案

期　日　令和４年１１月１８日（金）第２校時
場　所　熊本大学教育学部附属中学校　実践センター
学　級　熊本市立清水中学校３年１組　３９名
指導者　熊本市立清水中学校　教諭　山下　大輝

１　単元構想

単元名	第４章　１節「消費生活と市場経済」（東京書籍 P.127～139）
単元の目標	(1) 身近な消費生活を中心に，経済活動の意義について把握するとともに，現在の消費社会で起きている問題やその解決策について理解している。 (2) 対立と合意，効率と公正，分業と交換，希少性などに着目して，個人や企業の経済活動における役割と責任や，現在の消費社会で起きている地域や人・社会，環境における問題の解決策について，多面的・多角的に考察し，表現している。 (3) 市場の働きと経済について，現在の消費社会で起きている地域や人・社会，環境の問題を解決するためのエシカル消費を通して持続可能な社会の形成に，主体的に参画しようとしている。

単元終了時に期待する生徒の姿

サーキュラーエコノミー型の社会を実現していくためには，私たち一人一人がエシカル消費を行っていくことで，様々な社会問題の解決に関わり，企業や政府を動かしていく原動力となることが大事であると考えられる生徒。

指導計画と評価計画（８時間取扱い　本時８／８）

過程	時間	主に働かせたい見方・考え方と発問	身につけさせたい力 （知・技 ／ 思・判・表 ／ 態）
課題把握	1	【効率と公正】【希少性】 ・私たちは消費を行う際，なるべく安いものを求めるのはなぜか。	・消費を行うときには，収入と支出のバランスを考えて必要な財やサービスを購入する結果，なるべく安いものを買っていることについて理解している。（知技）
	2	【効率と公正】【分業と交換】 ・安さを求める消費者のニーズに応えるために，企業側はどのような工夫をしているのか。	・流通の合理化を行うことで，より安く効率よく消費者のもとに財やサービスを届けられることについて，流通の仕組みをもとに理解している。（知技）
	単元を貫く課題：	**私たちは，どのような消費社会をつくっていくべきなのか。**	
課題追究	3	【対立と合意】 ・消費者をめぐってこれまでにどのような問題が起きてきたのか。	・消費者が不利益を受けた消費者問題が起きてきたことで，消費者主権の考えが広まってきたことを理解している。（知技）
	4 5	【対立と合意】【希少性】 ・私たちの消費のやり方によって，どのような問題が起きているのか。	・現在の消費社会で起きている問題を，地域や人・社会，環境などの視点から多面的・多角的に考察し，表現している。（思判表）
課題解決	6 7	【対立と合意】【効率と公正】 ・私たちの消費をめぐる地域や人・社会，環境の問題を解決するために，どのような消費を行っていくべきか。	・地域や人・社会，環境に配慮した消費により，社会の形成に主体的に参画しようとしている。（態） ・欧州ではサーキュラーエコノミー型の社会に向けた取り組みで消費をめぐる問題を解決しようとしていることについて理解している。（知技）
	8 **本時**	【対立と合意】【効率と公正】 **・日本でサーキュラーエコノミー型の社会を実現させるために，家計・企業・政府のどこが最も努力すべきか。**	・日本におけるサーキュラーエコノミー型の社会の実現のためには，一人一人がエシカル消費を通して様々な消費をめぐる問題の解決に関わり，企業や政府を動かしていく必要性について多面的・多角的に考察している。（思判表）

2　本実践のねらいと生徒の実態

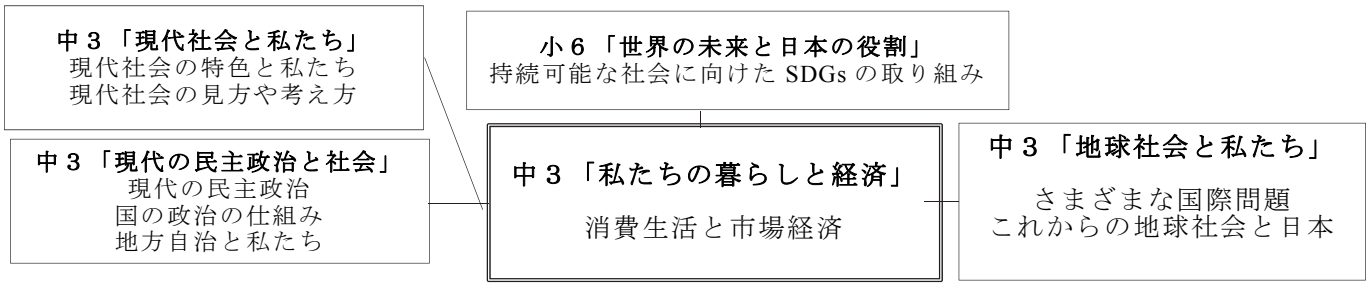
本実践（単元）のねらい

本単元は，学習指導要領の公民的分野における「B　私たちと経済」の「(1)市場の働きと経済」と「(2)国民の生活と政府の役割」にあたる。(1)では，人々が求める財やサービスを消費することで生活を成り立たせることが経済活動であり，人間の生活の維持・向上に意義があることを理解させることを主なねらいとしている。また，(2)では，「消費者の保護」が身に付けるべき知識として挙げられている。つまり，自立した消費者になるとともに，消費生活に関する行動が現在及び将来の世代にわたって内外の社会情勢及び地球環境に及ぼすことを自覚して，公正かつ持続可能な社会の形成に積極的に参画することを主なねらいとしている。

一方で，生徒の多くが消費についても値段や価格を基準にしており，自らの消費が様々な社会問題と関わっていることを認識している生徒は少ない。よって，大量生産・大量消費型の社会によって地域，人や社会，環境に様々な問題が起きており，その解決の在り方を多面的・多角的に検討させる必要がある。

ゆえに，本単元では，公正で持続可能な社会の形成のためにも，消費をめぐる様々な社会問題を解決し，地域，人や社会，環境などにも配慮したエシカル消費を行っていく必要があることを理解させたい。そのため，本実践では欧州におけるサーキュラーエコノミー型の社会の実現に向けた取り組みと日本の状況の比較を通して，一人一人がエシカル消費を通して様々な消費をめぐる問題の解決に関わり，企業や政府を動かしていく必要性について理解させたい。そのことによって，身近な社会問題の解決策や将来の社会の在り方を多面的・多角的に考察させるとともに，よりよい社会の形成に参画する資質や能力を育成するという教科のねらいを達成したい。

本単元における系統



生徒の実態（単元の目標につながる学びの実態）

■本単元を学習する以前の内容理解　（単位：３５人）

調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない
「消費」について説明できる。	３	１８	９	５
「公正」について説明できる。	２０	６	６	３
「持続可能な社会」について説明できる。	１２	８	３	１５

■本単元の学習に関する意識の状況　（単位：３５人）

調査内容		聞いたことがある	聞いたことがない
エシカル消費という言葉を聞いたことがありますか。		１	３４
消費をする際に意識していることは何ですか。	○値段・価格・安さ（２３）　○その商品の品質（４） ○原産国・どの国がつくったものかを見る（４）　○無駄なものを買わない（２）		
私たちの消費によってどのような問題が起きていると思いますか。	○フードロス（６）　○税金が高くなる（４）　○ごみ問題（４） ○円安の進行（２）　○使いきれない（２）　○分からない（１７）		

■考察

○持続可能な社会を環境の面で説明する生徒が多く，地域や人・社会に関する視点に乏しい。
○エシカル消費を知らない生徒がほとんどで，値段や価格を基準に消費をする生徒が半数以上いた。
○消費による問題では食品ロスやごみ問題など環境に関連付けた生徒が多いが，地域や人・社会に関する問題と関連付けた生徒はいなかった。

3　指導に当たっての留意点

○生徒が普段から食べる機会の多い卵や牛肉,穀物などの食材や身近にある店の工夫などを扱うことで，生徒が身近な消費生活と結び付きやすいようにする。
○消費による社会問題を考えていく際には，SDGｓの 17 の目標と結びつけていくことによって，それらの問題が日本だけでなく全世界共通の問題であることを認識できるようにする。
○ワークシートを図化したり表を使用したりすることで，私たちの消費が地域，人や社会，環境に影響を及ぼし，それらの解決が求められていることを，生徒が関連付けさせやすいように工夫する。

4　本時の学習

(1) 目標　日本におけるサーキュラーエコノミー型の社会の実現のためには一人一人がエシカル消費を通して様々な消費をめぐる問題の解決に関わり，企業や政府を動かしていく必要性について説明することができる。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 (◇予想される生徒の発言)	指導上の留意事項
導入	5分	1　前時の最後に選んだ努力すべき３つの経済主体の投票結果を把握し，その理由をそれぞれの立場で発表する。	○色分けしたロイロノートカードで提出させることで，それぞれの立場の数の違いを明確にできるようにする。
		【学習課題】日本でサーキュラーエコノミー型の社会を実現させるために，家計・企業・政府のどこが最も努力すべきか。	
展開	38分	2　それぞれの立場の意見に対して，質問をし合って議論を深める。 ①　自分とは異なる立場に対してグループごとに質問を考え，専用の用紙に記入する。 ②　質問を書いた用紙を前に貼り，質問の内容によって分類する。 ③　質問の答えをグループごとに考える。 ④　質問の答えを立場ごとに発表する。 ⑤　追加の質問をしたり反対意見を述べたりする。	○立場ごとにグループをつくり，家計・企業・政府それぞれの立場で，他の立場の意見に対して質問を考える。 ○質問を考える際に，具体的な内容や方法，実現可能性などの視点を示して質問を考えやすくする。 ○出された質問は内容ごとに分類させ，答えるべき質問を焦点化していく。 ○企業が環境に配慮した商品を販売したり，政府が新たに法律を制定したりするには，家計（消費者）の求めがないことには動かないことに自分たちで気づかせる。生徒自身で気づかない場合は，教師側で支援する。
		【追究課題】サーキュラーエコノミーに向けた取り組みについて，日本と欧州では何が違うのか。	
		3　グローバル気候マーチの事例から，日本と欧州の消費者が既存の経済に在り方に対する考え方の違いを理解する。	○フランスの消費者による黄色いベスト運動が，気候市民会議の設置，気候変動対策法の制定につながっていったことを理解させる。 ○ヨーロッパの消費者が積極的な動きを見せるのは，既存の経済の在り方を変えるべきと思っていることに気づかせる。
終末	7分	4　ダイヤモンドランキング（２回目）を行い，１回目と比較して，ランキングが変化した理由を個人でまとめる。	○単元の最初に行った消費の基準に関するダイヤモンドランキング再度行い，単元の学習を踏まえて自分の消費の基準を考え直させる。

(３) 評価

評価の観点	評価基準
思考・判断・表現	A：私たち一人一人がエシカル消費を行ったり環境などに配慮した商品や政策を求めたりしていくことで，企業や政府を動かして社会を変えていく必要があることを考え，表現している。
	B：私たち一人一人がエシカル消費を行ったり環境などに配慮した商品や政策を求めたりしていく必要があることに気付き，表現している。

公民的分野研究発表

より良い地域社会を築くために考え・行動できる生徒の育成
～「くらしを支える地方自治」を題材に～

鹿児島県南大隅町立根占中学校　教諭　　大隣　佳甫

1　研究主題設定の理由

本研究は，令和元（2019）年11月に行われた鹿児島県中学校社会科教育研究大会での公開授業の一環として取り組んだものである。筆者は，令和元（2019）年４月に南大隅町立根占中学校に赴任した。南大隅町は，「雄川の滝」，本土最南端の「佐多岬」に代表される美しい自然や，温暖な気候を生かして栽培されるパッションフルーツ，ブランド認定されている「黄金カンパチ」などの豊かな食に恵まれた地域であり，近年は観光開発も進んでいる。一方，町の過疎化がすすみ，少子高齢化の急速な進展やそれに伴う産業衰退などの課題にも直面している。年度当初に行った生徒へのアンケート調査からは，自らが暮らす地域への愛着がやや希薄であり，身近な社会的事象への理解が十分ではないことが分かった。

鹿児島県中学校社会科教育研究会（以下，「県中社研」）は，『地域と世界をつなぐ授業の創造～「深い学び」となる「主体的・対話的学び」の可能性を探りながら～』という研究主題のもと，地域素材を教材として深め，主体的学び・対話的学びの場を工夫することで，将来の主権者としての生徒を育成することを目指している。さらに，学習指導要領では，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や，深い学びを実現するために，実社会との関わりをより一層意識した「社会に開かれた教育課程」という考えが打ち出されている。

県中社研が，こだわりをもって研究・実践してきた「地域に学ぶ」という理念や公教育として社会から求められる役割，そして何より，目の前の生徒たちの実態を踏まえると，「生徒にとって身近な地域を教材として最大限生かしつつ，ただ地域を理解する学習には終わらせたくない。変化の激しい時代において，生徒が将来どのような場所でどのように暮らすとしても，より良く社会参画して欲しい」という願いを強く抱き，「より良い地域社会を築くために考え，行動できる生徒の育成」を研究主題として設定した。そして，このテーマを最も直接的に追究できると考えられる「くらしを支える地方自治」を題材に選定した。なお，対象は本校３年生41人であり，公開授業は３年２組（20人）で行った。本稿は，３年２組の生徒の学習の様子について述べている。

2　研究の実際

(1)　単元の概要

本単元は主として学習指導要領公民的分野における内容Ｃ「私たちと政治」の(2)「民主政治と政治参加」のうち，アの（エ）および（イ）について取り扱う。「解説」では，本単元において，「生徒が地方公共団体の政治の仕組みや住民の権利や義務について理解できるようにすること」「身近な地方公共団体の政治について取り上げるとともに，住民の権利や義務に関連付けて扱うことにより，地域社会への関心を高め，地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育成することが大切である」とされている。また，主権者であるという自覚を深め，主体的に政治に参画することについて多面的・多角的に考察，構想し，表現できるようにする学習が求められている。先に述べた研究主題に沿って，生徒の暮らす南大隅町の実情を踏まえ，地域社会の社会的事象を教材として深める工夫を重ねながら，主体的・対話的で深い学びを積み重ねていけるような単元構成を意識した。

(2) 単元開発の重点

先行実践等を踏まえて，単元開発の重点として，以下の５点を設定した。

① 学習課題と学習成果を発揮する場面の工夫
② 南大隅町の事例や身近な事例の積極的な活用
③ 外部人材の活用
④ 学び合い・練り上げの場の工夫
⑤ 学習の見通しと振り返りの充実

(3) 単元開発の実際

① 単元の指導目標

ア より良い地域社会を築くために，様々な視点を踏まえ，積極的に社会参画する態度を養う。
イ パフォーマンス課題へ取り組む過程で，多面的・多角的に考察を深めさせる。
ウ 地方自治の基本的な考え方や地方公共団体の政治の仕組み，住民の権利と義務について，南大隅町を主な題材として理解させる。

② 単元の全体計画（①～⑤の番号は「単元開発の重点」の番号とリンクしている）

次	時	主な学習活動等 ［具体的事例や内容］ **【①～⑤】は単元開発の重点**	評価規準 知識・技能	思考力・表現力・判断力等	主体的に学習に取り組む態度
1次	1時	○ 地方自治の理念や，地方分権について概要を理解する。 ○ 地域おこしや中高生の社会参画の具体的事例についてまとめる。**【単元開発の重点②】** ［ゆるキャラ，JK課，やねだん，地産地消商品開発コンテスト］ ○ 単元の学習課題を設定する。 **より良い地域社会を築くためにはどのようなことが必要なのだろうか。** ○ 自分がイメージする「よりよい南大隅町」について考える。 ○ 単元全体の見通しを持つ。**【単元開発の重点⑤】** ○ 単元のパフォーマンス課題を設定する。 **【単元開発の重点①】** **「食」を通して，様々な視点から南大隅町をより良い町にする方策を考えよう。**	・ 地方自治や地方分権の基本的な考え方を理解している。		・ 地域おこしや社会参画の事例について意欲的に調べている。 ・ 単元の学習課題について自分なりに考え，学習の見通しを持っている。
	2時	○ ゲストティーチャー（南大隅町役場企画課職員）の講話と質疑応答から，南大隅町の良さ・強みや，課題・弱み，地方創生の方針などについて概要をつかみ，単元への関心と課題意識を高める。**【単元開発の重点②・③】**	・ 南大隅町の良さ・強みや課題・弱みを理解している。		・ 地方自治への関心を高め単元を通じて学習課題を追究しようとしている。
2次【単元開発の重点②】	3時	○ 地方公共団体の組織や役割，南大隅町に関する地方分権の事例や町独自の政策について調べる。 （南端まちづくり，給食費，医療費制度など） ○ 首長と地方議会の関係について，南大隅町を例に理解する。	・ 地方自治や地方分権の基本的な考え方や首長と地方議会それぞれの役割を理解している。		・ 町の施策を意欲的に調べている。
	4時	○ 地方公共団体の財政とその課題について，旧根占町と旧佐多町の市町村合併や南大隅町の財政支出資料をもとに理解する。 ○ ふるさと納税について，全国の市町村の代表例や南大隅町の例をもとに理解する。	・ 町の財政状況や課題について，資料を適切に読み取っている。	・ 町の財政上の課題について資料から考察し自分の言葉で表現している。	
	5時	○ 住民の直接請求権，住民投票など住民の権利がみとめられている一方で義務や責任を負っていることを理解する。 ○ ＮＰＯやボランティアの役割や重要性について南大隅町の事例をもとに理解する。 ［地域協力隊，コミュニティハウス］	・ 住民の権利と義務について理解している。	・ 自分がどのように地域社会と関わっていけばよいか考え，表現している。	・ 住民自治の意義を理解し，社会参画への意識を高めている
3次	個人課題＋6時	○ 個人・４人の班で，南大隅町の魅力を表したグルメ商品を構想し，発表する。 **【単元開発の重点①・④】**		・ 様々な視点から，南大隅町の良さ・強みを考察し，商品に表現している。	・ 南大隅町の良さ・強みを再認識し，社会参画への意欲を高めている。

3 次	個人課題＋7時・8時（本時）	○　パフォーマンス課題を確認する。 **「食」を通して，さまざな視点から南大隅町をより良い町にする方策を考えよう。** ○　個人・４人の班で，前時に考えたグルメ商品を切り口に，「環境保全」「住民向けイベント」「ふるさと納税返礼品」「観光ＰＲ」「福祉政策」の５つの別々の視点からパフォーマンス課題に取り組み，発表する。 ○　地方創生で必要な視点や構想の組み立て方について，ゲストティーチャー（おおすみ観光未来会議※1C00玉置哲弥氏）の話を聞く。 **【単元開発の重点①・③・④】**	・　地域の現状を相対的に分析し，様々な視点から自分にできることを考え，社会参画していくことが大切であると理解している。 ・　インターネットや広報誌などを適切に活用している。	・　南大隅町のよさ・強さや課題・弱みを踏まえて，既習内容を生かしながら企画を考えている。	・　パフォーマンス課題への取組を通じて，社会参画への意欲を高めている。
	9時	○　前時をもとに，他班の企画について意見交換を行う。 ○　各班の方策を必要に応じて修正し，役場企画課への提案としてまとめる。 **【単元開発の重点④】**		・　他班の企画について，建設的に意見交換している。	・　他班との交流をもとに，企画をより良いものにしようとしている。
4 次	10時	○　再度，自分がイメージする「より良い南大隅町」について考え，共有する。 ○　今後，どのように地域社会に関わっていけば良いかを考える。 **【単元開発の重点⑤】**	・　地方自治や地方分権の理念と地域の良さ・強みや課題・弱みを分析した上で，様々な視点から社会参画していくことが必要だということを理解している。	・　自分がどのように地域社会と関わっていけばよいか，多面的・多角的に考察し，表現している。	・　よりよい地域社会を築くため，積極的に社会参加する態度を身に付けている。

※1　「観光地経営の視点に立った観光地域作りの舵取り役として多様な関係者と協力しながら明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに，戦略を着実に実行するための調整機能を備えた「ＤＭＯ」（Destination Management Organization）を呼ばれる法人形態の大隅半島版。

(4)　単元開発の重点の具体化

①　学習課題と学習成果を発揮する場面の工夫

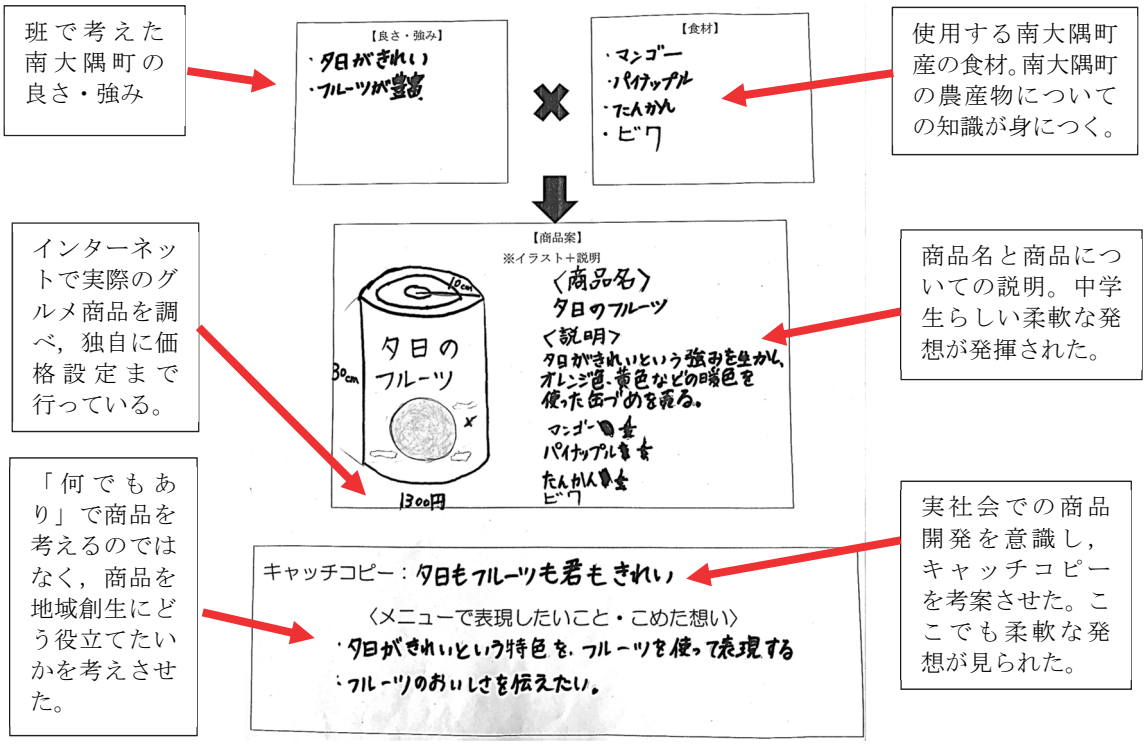
単元の学習に一貫性を持たせつつ，実社会との関りを意識させながら，資質・能力を「発揮」させることで，形成的評価とともに資質・能力の育成も促進されるとの考えから，以下のような単元を貫く学習課題とパフォーマンス課題を設定し，単元の第１時で提示した。第２次までの学習を踏まえ，第３次でパフォーマンス課題に取り組ませた。

【単元を貫く学習課題】
より良い地域社会を築くためにはどのようなことが必要なのだろうか。

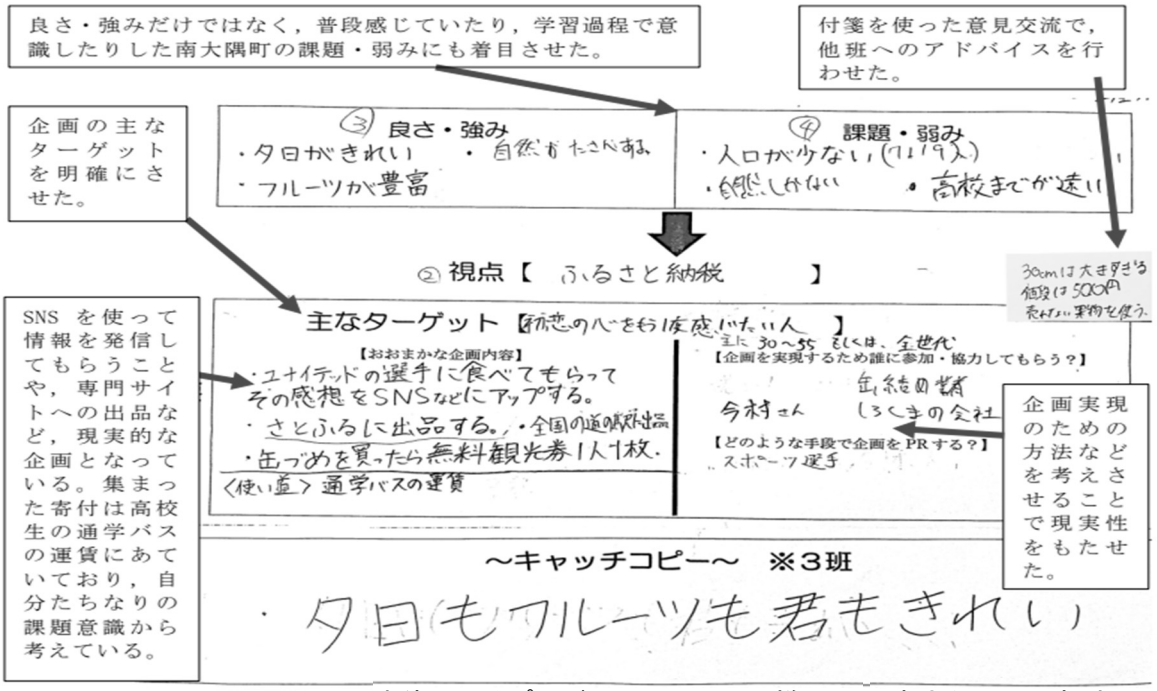
【単元のパフォーマンス課題】
「食」を通して，様々な視点から南大隅町をより良い町にする方策を考えよう。

「食」に着目したのは，生徒の関心が高いことに加え，生徒同士，班同士のアイディアを比較・統合させやすく，中学生の柔軟な発想も生かされ，産業や環境保全など多種多様なテーマとの親和性が高いからである。第３次では，まず，南大隅町の魅力を表現したグルメ商品を考案させることで，「食（グルメ商品）」をテーマに全生徒の足並みを揃えた。次に，グルメ商品を生かして南大隅町をより良い町にするための具体的な方策（企画）を個人および各班で考案させ，単元の本質を深める学習を行った。自由に企画を考えるだけでは学びが深まらないため，教師が「環境保全」，「住民向けイベント」，「ふるさと納税」，「観光ＰＲ」，「福祉政策」の５つ視点から各班１つを指定した。例えば，「ふるさと納税」という視点の班は，自班のグルメ商品を「ふるさと納税」の返礼品として販売できるレベルにまでどのようにブラッシュアップし，どのようにＰＲし，得た財源を使ってどのように南大隅町をより良くするのかを総合的に企画させた。視点の割り当ての際には，各班のグルメ商品と５つの視点の相性を考慮した。以下は，「ふるさと納税」の班のグルメ商品と企画書である。

【グルメ商品：「夕日のフルーツ」】



【企画書】



各班の企画書は，公開授業の中で，プレゼンテーション形式で発表させた。また，単元終了後にクラスの代表生徒が南大隅町役場を訪問し，グルメ商品と企画を町行政に提案した。まさに地域社会に対して学習の成果を「発揮」する大変貴重な機会となった。

生徒によるプレゼンテーションの様子

南大隅町への提案

② 南大隅町の事例や身近な事例の積極的な活用

グルメ商品や町の情報の展示

第１時では,鹿児島県地産地消商品開発コンテストや，鹿児島県鹿屋市の「やねだん」などを紹介した。南大隅町の事例では，「給食費1000円」や各家庭の子どもの出生数に応じて給付金が支給される「子育て支援条例」，住民による「南端まちづくり運動」，町内の NPO 法人などを取り上げた。パンフレット,町報,県内各地のグルメ商品なども教室横のオープンスペースを活用して常時展示した。

③ 外部人材の活用

外部人材の活用

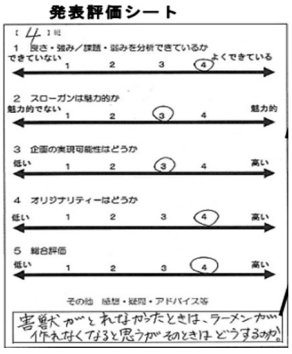
第２時に，南大隅町役場企画課から講師を招き特別授業をしていただいた。町の現状について深く知った生徒たちは，少子高齢化対策や観光振興を「自分ごと」として捉えたようだった。また，大隅地域の持続可能な観光地域づくりを推進している「株式会社おおすみ観光未来会議」にも協力を仰ぎ，地域創生のプロとしてのアドバイスをいただいた。特に，第８時では教師とともに机間指導をしていただき，「ＳＷＯＴ分析」や「３Ｃ」「４Ｐ」といった切り口から講話をしていただいた。生徒を尊重しつつ，教室と実社会をつないでいただいた。

④ 学び合い・練り上げの場の工夫

モニターに提示した練り上げのポイント

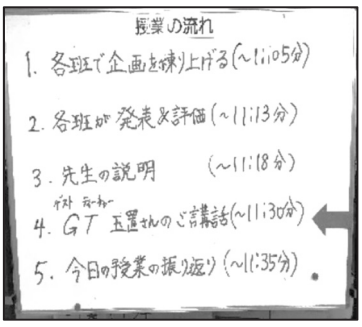
【練り上げのポイント】
・ターゲットと協力者は適切か？
・PR の手段は適切か？
・スローガン／キャッチコピーは魅力的か？

発表評価シート



次の３点を工夫した。１つめは練り上げの視点の提示である。学習活動中に「練り上げのポイント」を常時モニターで提示した。２つめは，「材料」の確保である。町報やパンフレット等の資料に加え，第３次では常にタブレットＰＣを活用し，生徒がインターネットから情報を得られる環境を確保した。３つめは，評価基準の共有である。「発表評価シート」を活用して，分析の度合い，スローガン（キャッチコピー）の魅力度，実現可能性，オリジナリティ，総合評価の５観点４段階評価を行わせ，学び合い・練り上げや教師の形成的評価につなげた。

⑤ 学習の見通しと振り返りの充実

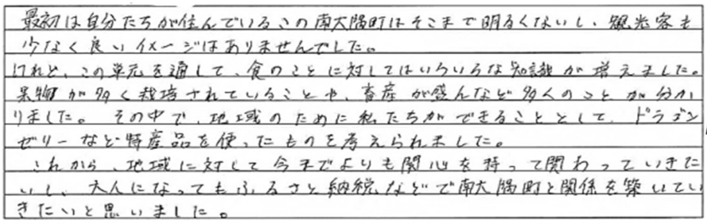


本実践では単元全体の見通しを持たせ，学びの深まりを意識させることを目的とした「振り返りシート」を活用した。また，１時間の授業中でも，ホワイトボードやモニター上で右のような「授業の流れ」を提示することで，生徒が見通しを持って授業に臨めるようにした。

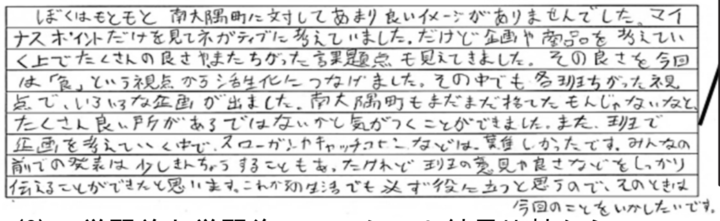
３ 実践の検証

(1) 生徒の感想やグルメ商品・方策から

生徒の振り返りシートを分析すると，全ての生徒が南大隅町をより良くするために自分にできることを考えていた。また，学習活動そのものにも充実感を感じていた。以下に示すのは，単元のまとめで実施した，単元全体の振り返りの記述である。


最初は自分たちが住んでいるこの南大隅町はそこまで明るくないし、観光客も少なく良いイメージはありませんでした。
けれど、この単元を通して、食のことに対してはいろいろな知識が増えました。果物が多く栽培されていることや、畜産が盛んなど多くのことが分かりました。その中で、地域のために私たちができることとして、ドラゴンゼリーなど特産品を使ったものを考えられました。
これから、地域に対して今までよりも関心を持って関わっていきたいし、大人になってもふるさと納税などで南大隅町と関係を築いていきたいと思いました。

- 最初は南大隅町に対して良いイメージはなかった。
- 単元の学習を通して今後は地域に対して関心を持ちたいと思っている
- 大人になってもふるさと納税などで南大隅町と関係を持ちたいと考えるようになった。

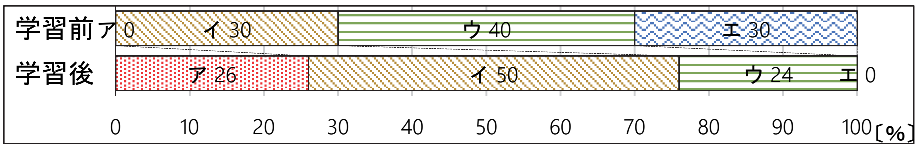

ぼくはもともと南大隅町に対してあまり良いイメージがありませんでした。マイナスポイントだけを見てネガティブに考えていました。だけど企画や商品を考えていく上でたくさんの良さやまたちがった課題点も見えてきました。その良さを今回は「食」という視点から活性化につなげました。その中でも各班ちがった視点で、いろいろな企画が出ました。南大隅町もまだまだ捨てたもんじゃないなと、たくさん良い所があるではないかと気がつくことができました。また、班で企画を考えていく中で、スローガンやキャッチコピーなどは難しかったです。みんなの前での発表は少しきんちょうすることもあったけれど班の意見や良さなどをしっかり伝えることができたと思います。これから先の生活でも必ず役に立つと思うので、そのときは今回のことをいかしたいです。

- 最初はマイナス面ばかり見ていた。
- 南大隅町もまだまだ捨てたもんじゃない。
- 今後は地域に対して関心を持ちたい。
- 難しいテーマだったが，しっかり考え，クラスに伝えることができた。

(2)　学習前と学習後のアンケート結果比較から

学習後は南大隅町の政治や歴史，伝統，産業などについて知っていることを自由記述で述べる質問に対し，全員が事実に基づく記述を行っており，生徒の社会参画意欲も高まっていた。

質問：「南大隅町のために何か行動したいですか？」



（質問の選択）
ア　とてもそう思う
イ　そう思う
ウ　あまりそう思わない
エ　全くそう思わない

(3)　基礎的・基本的な知識・技能の定着度評価から

本単元で身に付けるべき知識・技能の定着度は教科書の評価問題等を活用して評価した。全体としては概ね定着していたが，細かな部分で誤答が目立ち，補充指導を行った。

出題内容や用語	通過率と主な誤答例
選択：地方公共団体の仕事内容	85%　水道事業を認識していない
用語：住民自治	45%　「地方自治」との混同
用語：民主主義の学校	35%　「憲法の番人」との誤答
記述：国庫支出金と地方交付税の違い	50%　逆に理解している
用語：ＮＰＯ	75%　WHO　GDP
財政資料の読み取り	80%　自主財源と依存財源の混同
自由記述：南大隅町の条例の例	100%

4　今後の課題

公開授業後の授業研究会でも「コンテンツ」か「コンピテンシー」かが話題となった。本実践は,「コンテンツ」と「コンピテンシー」を相互に結び付けながら，両者を相乗的に身に付けることを意図した実践である。しかし,「福祉政策」の対象が高齢者や乳幼児だけであるかのような認識になっている生徒も見られた。両者のバランスを注意深く検討したい。また，パフォーマンス課題の評価基準の妥当性や形成的評価の在り方について研究を深めていきたい。

≪主要参考文献≫

・『中学校学習指導要領解説 社会編』文部科学省（2017）
・『見方・考え方 社会科編』 澤井陽介・加藤寿朗（2017）東洋館出版社
・『奇跡の集落やねだんを取材した日々』　山縣由美子（2019）羽島書店
・『地域をまわって考えたこと』　小熊英二（2019）東京書籍
・南大隅町観光協会 HP https://satamisaki.com/association/（最終閲覧2022年９月１日）
・南大隅町公式 HP https://www.town.minamiosumi.lg.jp/index.html（最終閲覧2022年９月１日）
・株式会社おおすみ観光未来会議 HP https://oosumi-kankou.com/about-2/（最終閲覧2022年９月１日）

公民的分野　研究発表

よりよい社会の形成に主体的に参画する態度を育む社会科学習
～地域を素材にしたチームでの授業づくりを通して version 2～

沖縄県東村立東中学校　教諭　比嘉　共樹

1　はじめに

国頭地区は沖縄県本島北部に位置し，通称「やんばる」と呼ばれ豊かな自然に囲まれた地域である。3つの離島村自治体を含んだ地域である。美ら海水族館等の観光地があり，２０２１年に北部３村が世界自然遺産に登録されるなど森の多様性や自然保護の取り組みに注目されている地域である。

県内では宅地化や再開発が進んだ自治体で人口が伸びた一方で，本島北部や小規模離島は過疎化に歯止めがかからない実態がある。国頭地区では名護，金武，宜野座を除く全ての自治体が人口減少となり，生徒一人一人が持続可能な社会の担い手として，社会貢献や社会の成長につながる人材育成が期待されている。　**図１　北部地区（※１）**

※1　沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合 Web サイトより引用。北部地区から恩納村を除いた地域が，教育行政では国頭地区となっている。

2　研究主題との関連

国頭地区中学校社会科研究会（以下国中社研）は，平成 15 年度に結成され国頭地区の社会科教育の発展に寄与してきた。国中社研では「個々の教師の優れた授業実践を，継続的に国頭地区内の社会科教師で共有していくことで，授業力の向上につながり，ひいては後輩教師の育成につながること」が望まれている。また，私たちが住んでいる地域を教材化し，授業実践を通して，生徒が社会的事象を多面的・多角的にとらえることができる授業のさらなる改善・充実も望まれている。

それらの実態をふまえ，まずは教師自らが主体的に地域と向き合い，その中にみられる地域のよさや課題を追求しつつ，それらを教材化し，生徒の社会参画への態度を育成する授業を行うという過程を大切にした。また，地区内の教員同士でチームを組み，共に教材研究を行い，お互いの授業力向上を図ることが，ひいては国頭地区の生徒の社会科学習の充実に資すると考え本研究を進めている。

3　研究仮説

住んでいる地域のよさや課題をとらえ，そこにみられる課題について多面的・多角的に考察・構想することで，よりよい社会の形成に主体的に参画する態度を育むことができるだろう。

4　研究の視点

（１）　地域教材の研究

「社会的な見方・考え方」を働かせて，地域のよさや課題を多面的・多角的に考察・構想し自分の考えを表現する授業の研究。

（２）　チームでの授業づくり

自治体や学校規模が異なる教師同士で教材研究を行い，授業を実践し，その結果を振り返る事を通して，互いの授業力の向上を図る研究。

（３）　生徒の社会参画の態度を育成する研究

地域における社会的事象を自分事として捉え，生徒の「社会参画の態度」を育成する研究。

５　研究の概要

（１）　地域教材の研究

本研究では，学習指導要領（公民的分野）Ｃの（２）「民主政治と政治参加」のイ「住民としての自治意識の基礎」と，Ｄの（２）「よりよい社会を目指して」のア「解決すべき課題を多面的・多角的に考察，構想」を組み合わせた。それらをふまえ，以下のように単元を構成し，授業を進めた。

①　単元の指導計画（全７時間）・・・宜野座村立宜野座中学校での実践例

単元のテーマ「宜野座村の持続可能な発展をめざして　～村づくりを考える～　」

時	ねらい　学習活動	評価規準と評価方法 ●記録に残す評価　○指導に生かす評価
1	〔私たちの生活と地方自治　地方自治のしくみ〕 ・地方公共団体の仕事を資料から読み取る。 ・地方議会と首長の役割について理解する。	○地方自治の基本的な考え方や仕組みを理解している。 【知識・技能】
2	〔地方自治の基本的な考え方について理解する〕 ・地方公共団体の財政状況について資料から読み取る。 ・宜野座村の予算について，資料から読み取る。 ・地域の一員として，どんな住民参加があるか考える。	●財政のグラフから宜野座村の財政状況を読み取ることができる。 【知識・技能】 ○地方公共団体の財政の課題を説明することができる。 【思考・判断・表現】
3	〔地域のよさ・課題をとらえる①〕 ・宜野座村に関する資料を活用する。 ・地方自治に住民が参加する際の権利や手段について資料から読み取る。 ・持続可能な開発目標（SDGｓ）の基本的な考え方を理解し，宜野座村との関連について考え話し合う。	○意欲的に宜野座村の課題を追求している。 【主体的に学習に取り組む態度】 ●資料に基づいて宜野座村の良さや課題をまとめることができる。 【思考・判断・表現】
4	〔地域のよさ・課題をとらえる②〕 ３学年合同授業（講師：宜野座村企画課　事業振興係長） ・宜野座村の産業の課題について，ゲストティーチャーから説明を受ける。 ・地域の現状と課題について理解し，村づくりを考え，中学生による地域課題解決や展望に向けて主体的に取り組む機会にする。	●興味を持ち，講話を聴くことができる 【主体的に学習に取り組む態度】
5	〔テーマを決める・調べる〕 ・宜野座村の現状と課題について実態を理解し関心を持つ。 ・班分け，および追求テーマ設定の理由を考える。 （次時につなげるワークシートの作成）	○意欲的に宜野座村の課題を追求している。【主体的に学習に取り組む態度】 ○持続可能な宜野座村の村づくりに向けたテーマを設定している。 【主体的に学習に取り組む態度】
6 本時	〔テーマを具現化する〕 ・「持続可能な宜野座村の村づくり」について考えよう。 ・いろいろな資料を活用する（タブレット活用も含める） ・「宜野座村がより良くなっていくのか」「実現の可能性はあるか」「持続可能か」	○課題解決に向けて積極的に話し合うことができる。 【主体的に学習に取り組む態度】 ○様々な資料に基づいて，根拠を持って持続可能な開発の視点から考察することができる【思考・判断・表現】

7	〔追求課題の発表・まとめ〕 ・視点をもとに考えたアイデアを発表する。 ・質疑応答を通して，課題や新たな視点から考える	●アイデアの共有を通して，新たな視点に気づくことができる。 【主体的に学習に取り組む態度】
事後	〔宜野座村長へ企画書を提出〕 ・企画書を提出する。・村長や関係各課に質問や提案をする。	

② 授業の様子

写真１　「持続可能な村づくり」説明

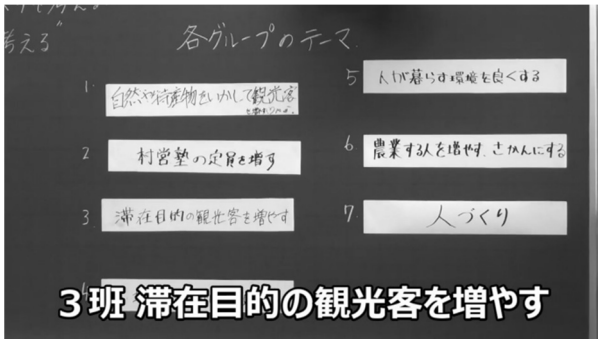


写真２　各班のテーマ

写真３　班での話合い

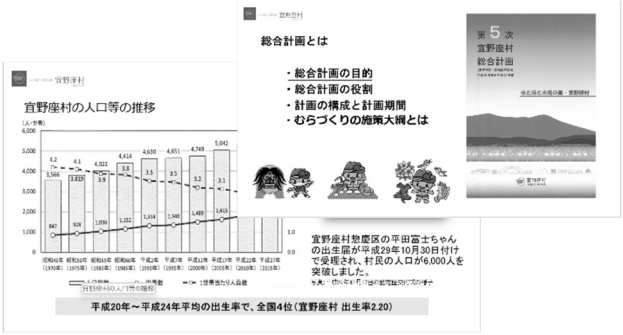


写真４　村からの提供資料

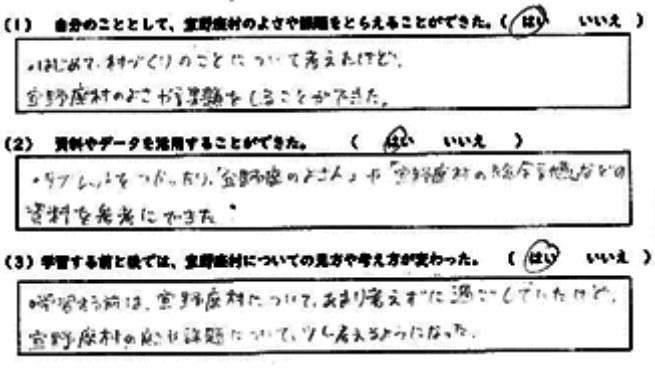


写真５　授業後の振り返り

写真６　宜野座村役場への企画書報告

③ 生徒の授業の振り返り

自己評価より，自分の事として宜野座村のよさや課題をとらえることができた＜はい（100%）＞，学習する前と後では宜野座村についての見方や考え方が変わった＜はい（96%）＞＜いいえ（4%）＞と，共に多くの生徒に肯定的な意見や効果がみられた。生徒の感想からは，「もっと住みやすい村に」「子どもの考えも取り入れる事でもっと村づくりの課題がみつかる」「宜野座について知っていないことに気づいた。探検したい」「村の取り組みを知り，課題への改善方法や案を出すことができた」「村が抱えている問題に想いをこめて真剣に話し合い発表することができた」等があった。

（２） チームでの授業づくり（国中社研での共同研究）

学校規模の異なる教師同士で，教材研究や資料の共有を行い，各学校での実践につなげた。研究部チームの SNS で，授業実践の紹介や振り返りの情報交換等を行った。上記５の（１）地域教材の研究の単元指導計画を基本として，それぞれの学校で授業を行った。

① 授業を実施した学校（令和３年度）

学校名	宜野座村立 宜野座中学校	名護市立 東江中学校	本部町立 伊豆味中学校	名護市立 屋我地ひるぎ学園	東村立 東中学校
生徒総数	２４３	２９４	２２	４４	４３
授業を実施した １学級生徒数	２９	２９	５	１７	２０
活用した資料	村勢要覧 村総合計画等	市広報誌 インターネット	町広報誌，新聞 インターネット	市役所支所資料 インターネット	村勢要覧 RESAS 等

② 授業づくりについて

授業を実施した学校の教諭は，令和４年度国中社研の事務局および研究部に所属しているメンバーである。平成３０年度より学期に数回程度集まり，本研究発表内容等も含め，授業づくりについて意見交換や議論を重ねてきた。

③ チームでの授業づくりの工夫

ア 学期に数回程度の集まりで確認できなかった事項や，授業実践後の振り返り，使用したワークシート等を SNS で互いに共有することにより，各学校の授業づくりに活かすことができた。

イ それぞれの学校が立地する地域の「よさ・課題」を互いに紹介し合うことで，生徒が他の地域についても知ることができた。また，お互いの学校の追求課題に対する取り組み方や考え方にふれることができ，それぞれの学校の生徒の考えを深めるきっかけになった。

④ 実践授業

昨年度，沖縄県中学校社会科教育研究大会が本地区で開催される事で，研究発表授業の検証授業の一環として東江中学校の比嘉教諭に協力していただき授業を行った。また，県大会終了後に屋我地ひるぎ学園（屋我地中学校）の島袋教諭が地方自治単元で授業を行った。

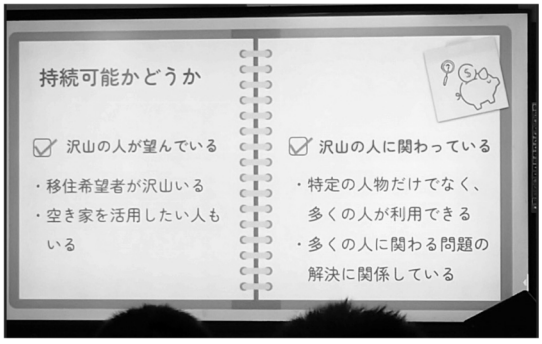


写真１・２ ↑ 国中社研の共通視点の実践「実現可能か，持続可能か」 ↑

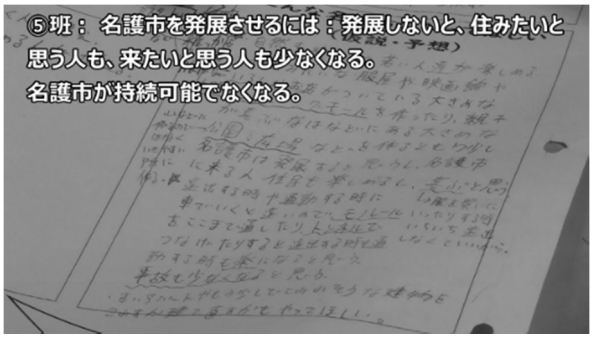


写真３「発展させるためには？」（東江中）

写真４ 検討結果プレゼン（屋我地ひるぎ学園）

ア　GT の活用について

生徒が課題を追求し，アイディアを具現化する中で，多面的・多角的な視点に気づいたり，自らの考えに対して迷いや不安が出る場面があった。そこで，生徒の思考を広げ深めるため，迷いや不安解消のために，ゲストティーチャー（GT）を積極的に招聘した。

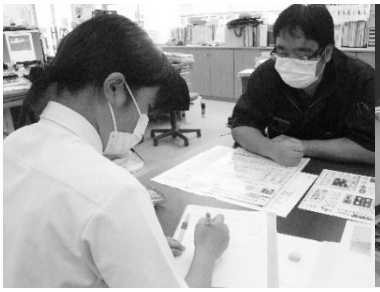


写真５　東村役場での取材　　**写真６　役場職員の授業支援**　**写真７　市役所職員の授業支援**

イ　屋我地ひるぎ学園生徒の授業後の感想

授業のアンケートから，地方自治のしくみや役割について＜理解できた（63.6%）＞＜よく理解できた（18.2%）＞と，身近な地域の地方自治への興味関心について＜関心が高まった（80.0%）＞ともに多くの生徒に高い効果がみられ成果があった。

（３）生徒の社会参画の態度を育成する研究

社会参画について「主体的に社会の形成に参画しようとする態度」であり，引き続き育成すべき力であることが示されている。国中社研では，社会参画の態度を育むために「対象となる社会的事象を自分ごととしてとらえること」が大切だと考え，授業を構想し実践してきた。これまでの実践から「自分ごと」として捉えること，一単元のみでなく，地理的分野，歴史的分野，公民的分野の単元学習に，社会参画の視点を意図的・計画的に組み込んで学習することが課題としてあがっていたので，発表者の勤務校でさらにその点を意識した授業を構想し実践した。

ア　地理的分野での取り組み

中２の身近な地域調査の単元で，「東村が未来に向けて活性化するためには」を単元を貫く課題とし，人口減少や村おこし，郷土のよさや誇りを再確認し，地域を見直す機会とした。RESAS（地域経済分析システム）の活用，GT や各機関への調査を夏休みの宿題ともリンクさせ授業した。身近な地域の調査を経て，中３の地方自治の単元において，地域の「よさ・課題」を主体的に捉えさせたいと考えている。

写真１　東村長からのメッセージ

イ　歴史的分野での取り組み

平和学習において，体験者から戦争について学ぶことは厳しい状況にあり，授業としても教師や指導者から受動的な学びになりがちである。そこで，対話型の平和学習に挑戦した。

「自分ごと」と捉えさせるために，若手の平和ガイドとコラボして，当時の沖縄戦を「どうしてそうなったのか」「どうすればよかったのか（ロールプレイで行動判断等）」をして，生き延びるための答えがない状況を追体験させた。

また，横浜市立中学校との交流を通して中学生同士が互いの歴史や平和について，オンラインで２回交流し，修学旅行で訪れた際に東中学校生徒が資料館をガイドして学習した成果を，中学生の視点で伝え意見交換ができた。真剣に互いの声に耳を傾け，やらされる学びではなく，自ら進んで学ぶ姿，平和について伝えようとする人を育んでいくことこそ，今，必要とされている平和学習だと確信している。

写真２　対話型平和学習の実践（NHK ニュースで放映）

沖縄戦の悲惨さ 同世代へ

横浜の修学旅行生案内

戦後77年

東中生が平和ガイド

写真３　本校の平和学習紹介

６　成果と課題

（１）地域教材の研究

○　成果

①自治体の取り組みについて，教師と行政の接点ができ，生徒が地域の実態を多面的・多角的に把握することができた。

②地域を学び直す取り組みで，地域の「良さ・課題」を主体的に捉えることができ，キャリア教育（職場体験学習等）や総合学習（地域探検等）等，行事や他教科への波及効果が得られた。

③４年間の実践の積み重ねは，その学校の伝統となり生徒が自身の取り組みと先輩の取り組みを比較したり，高校での授業（村づくり）にも活かすことができた。

●　課題

①地域の知っているようで知らない事などを，生徒が学習の中でいかに主体的に捉えることができるか。社会参画への関心の持たせ方（出会わせ方）・繋げ方と生徒の主体的な学習についての研究が必要である。

②どの教材をどのように活用して学ばせるかについて，地域の願いと授業者の意図の擦り合わせや，その工夫が必要である。

（２）チームでの授業づくり

○　成果

①研究部員の取り組んできた実践が，地区の社会科教師へシェアでき，それぞれの地域に合わせた実践につなげることができた。

②地域教育資源の共有や情報交換ができた。（GT，資料活用や部署への問い合わせ先等）

③他の市町村からの視点で，その地域の良さや課題に気づくことができた。

●　課題

①国中社研の Web サイトの活用（授業実践等の共有や WS の DL，アンケート等）が必要である。

②その他の単元や，「4･28」「5･15」「6･23」等を一体化した授業研究のさらなる充実が必要である。

（３）生徒の社会参画の態度を育成する研究

○　成果

①公民的分野に限らず，地理的分野・歴史的分野の他の単元の学習に社会参画の視点を意図的・計画的・系統的に組み込んで実践することができた。

②持続可能な開発目標（SDGｓ）の基本的な考え方を理解し，中学生の視点で地域課題解決や展望に向けて主体的に取り組むことができた。

●　課題

授業時数の確保やＧＴの活用など，学習をより深めるための綿密な指導計画が必要である。

【おもな参考・引用文献】

・『中学校学習指導要領解説社会編』（平成 29 年 6 月文部科学省）

研究発表

公民的分野研究発表

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求
～経済単元において「効率と公正」の視点で考える学習活動を通して～

熊本県西原村立西原中学校　教諭　伊藤　文徳

１　はじめに

2020 年１月，日本国内で初めて新型コロナウイルスの感染が報告されて以降，急速に感染が拡大していった。新型コロナウイルス感染拡大の影響で，それまで安価に購入できたマスクが高騰し，突然入手困難となった。コロナ禍にあって，価格が上がったもの，価格が下がったもの，価格が変化していないものなどがあり，価格の動きは生徒たちにとっても大きな関心事になった。時事性のある社会的事象として，価格の決まり方に着目した。

２　研究主題との関連

熊本県中学校教育研究会社会科部会では，研究主題に「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求」を掲げ，社会的な見方・考え方を働かせる「問い」に注目して研究を進めている。

研究主題に基づき，本研究では新型コロナウイルス感染拡大が経済にどのような影響を与えたのか，身近で具体的な事例を取り上げて学習を展開し，需要量と供給量，価格の変化について追究していく授業づくりを行うことにした。また，学習指導要領には，「…経済に関する様々な事象や課題を捉え，考察，構想する際の概念的な枠組みとして対立と合意，効率と公正，分業と交換，希少性などに着目したりして，経済に関する様々な事象などを理解できるようにしたり，…」と示されている。

そこで，まず，単元を貫く課題を設定し，現実の経済に対する関心を高め，社会的事象を捉えるための基礎となる知識を身につけることとした。そこで，価格の決まり方について，生産者や消費者などの様々な立場で，「効率と公正」の視点で考えさせることで，多面的・多角的に社会的事象を捉え，現代社会の見方・考え方を働かせる「問い」を引き出すことができると考えた。社会との関わりを意識した学習課題を追究したり解決したりする活動を通して，「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む」ことを目指した。

３　研究の仮説

コロナ禍における価格の決まり方を題材とし，「効率と公正」の視点で社会的事象を考えさせることで，生徒の「問い」を引き出し，それを追究していけば，経済活動に主体的に関わろうとする生徒を育てることができるであろう。

生徒たちが，民主主義の担い手となるためには，主権者として，よりよい社会の構築に向けて，同じ社会に生きる多様な立場の人々にも目を向け，主体的に関わろうとする姿勢や態度が必要である。社会との関わりを意識した課題を，生産者や消費者などの様々な立場で，「効率と公正」の視点から考え，課題を追究する学習活動は，生徒の経済活動に主体的に関わろうとする姿勢や態度を育てることにつながると考えた。

4　研究の視点

（1）「新型コロナウイルス感染拡大の影響」の教材化

本単元を通して，新型コロナウイルス感染拡大と深く関係のある社会的事象を取り上げ，身近な暮らしと結びついていることに関心をもたせることにした。本時の授業では，新型コロナウイルス感染拡大の状況下でも，価格が変化しなかった牛乳を取り上げ，価格の決まり方について生徒に「問い」をもたせ，市場メカニズムがはたらく場合とはたらかない場合があることを教材化することにした。

（2）経済単元における「効率と公正」

企業の経済活動は，効率的に利益を上げることと同時に社会的役割や責任を果たすことを目的としている。本研究では，それら企業の経済活動を「効率と公正」という視点で考察する学習活動を取り入れることにした。新型コロナウイルス感染拡大の影響下で，安定した生産量を確保したり，価格を一定に維持したりするなどの経済活動を行った企業も存在する。本単元では，具体的な事例をもとに，需要量と供給量，価格の変化についての追究活動を展開する。生産者や消費者などの様々な立場に加え，「効率と公正」という現代社会の見方・考え方を働かせて価格の決まり方を考察させることで，生徒の中に新たな「問い」が生まれると考えた。

（3）「ＧＴ（ゲストティーチャー)」の活用

本単元の授業を計画する上で，ＧＴを活用することにした。学校給食の牛乳を提供している企業“らくのうマザーズ”と阿蘇の酪農家“高尾牧場”を訪ねて，牛乳の価格の決まり方について取材を行った。本時の授業では，高尾牧場の高尾氏が，牛乳の価格が一定の理由を説明するインタビュー動画を，複数のチャプターに区切って編集し，意図的に生徒に視聴させることにした。

5　研究の実際

（1）「新型コロナウイルス感染拡大の影響」の教材化

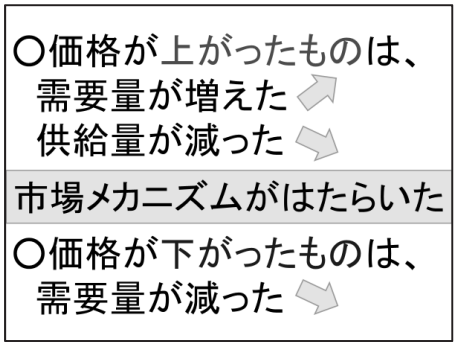
単元の導入（第１時）では，経済を動かす３つの主体（家計・企業・政府）をとらえながら，自分たちの暮らしと経済活動とのつながりに関心を持たせた。単元を貫く課題を「自分たちの暮らしと経済活動のつながりに，新型コロナウイルス感染拡大はどのような影響を与えたか。」と設定し，毎時の授業において，新型コロナウイルス感染拡大と関係のある社会的事象を取り上げた。第２時「家計の果たす役割」では，クレジットカードや電子マネーなどのキャッシュレス決済の普及，第３時「消費者の権利と責任」では，特別給付金を装った詐欺や悪質商法，第４時「流通のはたらき」では，オンライン・ショッピングの増加，第５時「市場のはたらき」では，マスクやアルコール消毒液の価格高騰などを取り上げた。また，毎時の授業で学習した知識が有機的関連を持ち，生徒の疑問や予想，納得が生まれるように配慮して，第７時（本時）に向けて単元の学習を進めた。

本時の目標を「価格の決まり方について，市場メカニズムがはたらく場合とはたらかない場合があることを理解し，表現している。」として授業を行った。

本時の導入では，写真資料から，2020 年４月頃にマスクが品不足になり価格が上がったことを想起させ，新型コロナウイルス感染拡大の影響について振り返った。本時のめあてを「新型

コロナウイルス感染拡大は，価格の変化にどのような影響を与えたのか考えよう。」と設定し，価格の変化に着目させた。クイズ形式の発問によって，価格が上がった商品は需要量が伸びたり供給量が減ったりしたこと，価格が下がった商品は需要量が下がったことを整理し，市場メカニズムがはたらいたことを確認した（**図１**）。本時の導入部は，習得した知識を様々な事例に適用し，その有効性を実感させる場面とした。

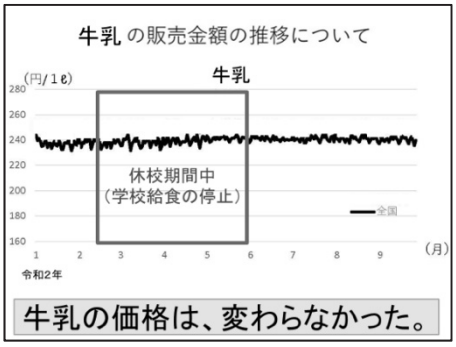
図１



（２）経済単元における「効率と公正」

本時の授業に向けて，第３時「消費者の権利と責任」では，契約を結ぶ意味を「契約は，売り手と買い手の考えや利害が一致し，売り手と買い手が交わす約束」と理解させた。第５時「市場のはたらき」では，需要量と供給量の関係によって市場メカニズムがはたらくことを理解させた。第６時「市場の長所と短所」では，市場メカニズムが効率的にはたらくためには健全な競争を保障すること，公平な供給が求められるものは公共料金として定められていることを理解させた。

図２「牛乳の販売金額の推移」



本時の展開前半では，学校給食停止の写真から，新型コロナウイルス感染拡大の影響で学校が臨時休校になり，学校給食が停止したため牛乳の需要が低下し，価格は下がったのではないかと生徒が予想したところで，**図２**「牛乳の販売金額の推移」の資料を提示した。牛乳の需要量が低下しているのに牛乳の価格が変化なし（価格が一定）という事実や，導入で確認した“市場メカニズムがはたらいた”にあてはまらない価格の決まり方があることに生徒は疑問をもった。そこで本時の中心発問を「なぜ，牛乳の価格は，変わらなかったのだろうか。」とし，牛乳の価格が一定の理由を考えさせた（**図３**）。

図３　生徒が予想した牛乳の価格が一定の理由

①　需要量と供給量の面
- **自粛期間中に，お菓子作りなどをする人が増えたため，価格が変わらなかったから。**
- **好きだから。一般用の牛乳を買う人が増えたから。**

②　生産者（酪農家）の立場で
- **乳をしぼる量を減らしたから。つまり，供給量を調整した。**
- **牛乳の量を調整することができなかったから。牛は生き物だから調整ができない。**

③　販売者（メーカー）の立場で
- **コロナウイルスの感染拡大をみこして，メーカー側がつくる量を減らしたから。**
- **他の乳製品（バターなど）に加工する量を増やしたから。**
- **価格を下げると販売側が儲からないから。**

④　国（政府）の立場で
- **国の牛乳をつくる人に対して補助金が出たから。**

⑤　その他
- **ネットで買ったから。つまり，オンライン・ショッピングの利用。**
- **テレビやＳＮＳなどで，学校給食の停止で牛乳が余っているから，みんな買ってくださいと宣伝していたから。・無料で配ったから。**

ここでは，多面的・多角的に考え，班やクラス全体で意見を交流させる中で自分の考えを自分の言葉で表現する授業を展開した。短冊の工夫を用いて生徒の多様な意見をすべて拾い上げ視覚化し，教師が生徒と対話する中で，生徒の既有知識や経験を引き出し，教師がきちんと事実を紹介しながら補足することで,生徒が予想した理由を全体で共有した。本時の展開前半は，習得した知識では説明できない事例を示し，その限界を実感させる場面とした。

（3）「ＧＴ（ゲストティーチャー)」の活用

本時の展開後半では，自分たちが予想した理由が事実かどうか，分からないことや疑問に思ったことを知りたいという追究意欲が高まったところで，ＧＴへのインタビュー動画を視聴した（**図４**）。

図４　動画視聴の様子

ＧＴ（高尾牧場の高尾氏）へのインタビュー動画は，生徒の反応や「問い」を事前に予想し，４つのチャプターで構成した。チャプター１は,「生徒の予想に対する回答」となっており，事前授業（11 月 12 日西原中学校３年２組にて実施）を行ったクラスの生徒たちが予想した理由を事前にＧＴに質問し，答えて頂いたものである。動画の中で，自分たちが予想した理由が正しかったことを知ると，生徒たちからは歓声があがった。チャプター２では，「牛乳の価格が変わらなかった理由の説明」があり，酪農家と企業との『契約』の存在を生徒たちは初めて知った。チャプター３では,「契約をする理由」の説明があり，消費者のために安定して生産する必要があること，チャプター４では,「もし契約がなかったら」の説明があり，競争に負けて廃業することがないように，契約によって酪農家が保護されていることを学んだ。ＧＴへのインタビュー動画を通して，企業（酪農家・指定団体・乳業メーカー）の社会的役割と責任について気づかせることができた（**図５・図６**）。また,『契約』という難しい用語が出てきたが，生徒たちは集中して視聴し，説明を理解しようと努めている姿が見られた。

図５「契約のしくみ」

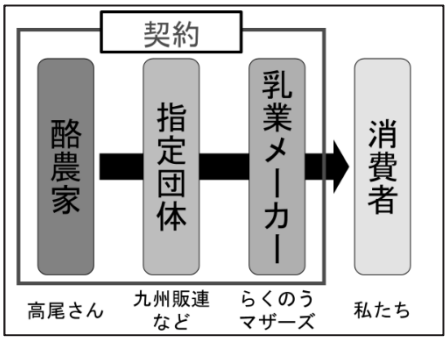


図６　チャプターと生徒の「問い」の流れ

ＧＴ（阿蘇の酪農家）へのインタビュー動画	予想される生徒の「問い」
・チャプター１ 「生徒の予想に対する回答」 →乳製品に加工した，家庭での需要が伸びた，破棄はしていない ・チャプター２ 「牛乳の価格が変わらなかった理由の説明」 →酪農家と企業との『契約』 ・チャプター３ 「契約をする理由」 →安定して生産をするため ・チャプター４ 「もし契約がなかったら」 →競争に負けて廃業する →『契約』によって酪農家が保護されている	Ｑ.なぜ，牛乳の価格は一定なのか。 ↓ Ｑ.牛乳の契約とは何か。 ↓ Ｑ.なぜ，契約をするのか。 ↓ Ｑ.なぜ，牛乳だけ価格が一定なのか。

本時の終末部では，ＧＴの説明や黒板の板書から，牛乳の価格が一定の理由を整理させ，「酪農家を保護するために，牛乳には市場メカニズムがはたらいていない」と整理した。最後に，価格の決まり方について，本時の学習内容をもとに振り返りを書きまとめさせた。

６　成果と課題

（１）「新型コロナウイルス感染拡大の影響」の教材化について

コロナ禍において，身近な飲み物である牛乳の価格の決まり方を追究していく活動を通して，消費生活に関心をもち，自分の暮らしと結びつけて考えようとする振り返りが見られた。また，生徒の既有知識（市場メカニズム）に矛盾する事実（牛乳の価格が契約によって一定であったこと）を提示し，意欲的な追究活動を促進する「なぜ発問」を用い，これに対する自分の考えをまとめさせることで，生徒の思考力を育成することにつながった。

（２）経済単元における「効率と公正」について

生徒は，社会との関わりを意識した学習課題について，生産者（酪農家），販売者（らくのうマザーズ），国（政府）の立場で，「効率と公正」の視点から考えることができた。多面的・多角的に考察し，現代社会の見方・考え方を働かせながら，学習することができたと捉えられる。また，市場メカニズムがはたらかない場合の事例があることを生徒が知り，牛乳に市場メカニズムがはたらかないことが，是か非かという意思決定を迫る展開もあった。

本時の授業後の生徒の振り返り（**図７**）を，次の三つの観点から整理した。

①　生産者や消費者の立場で考えているもの

生産者側の苦労や酪農家の方への感謝など，生産者や消費者の立場から考え，記述しているものがあった。

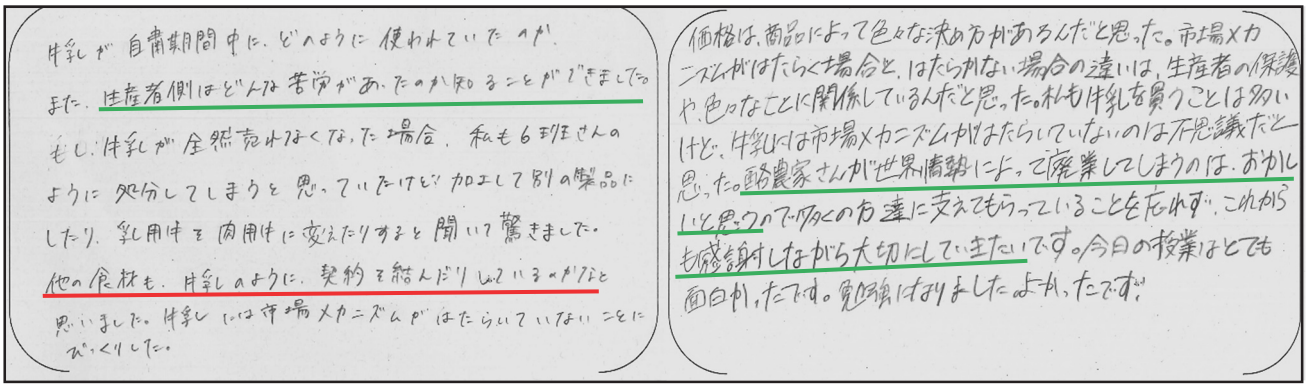
②　新たに生まれた「問い」

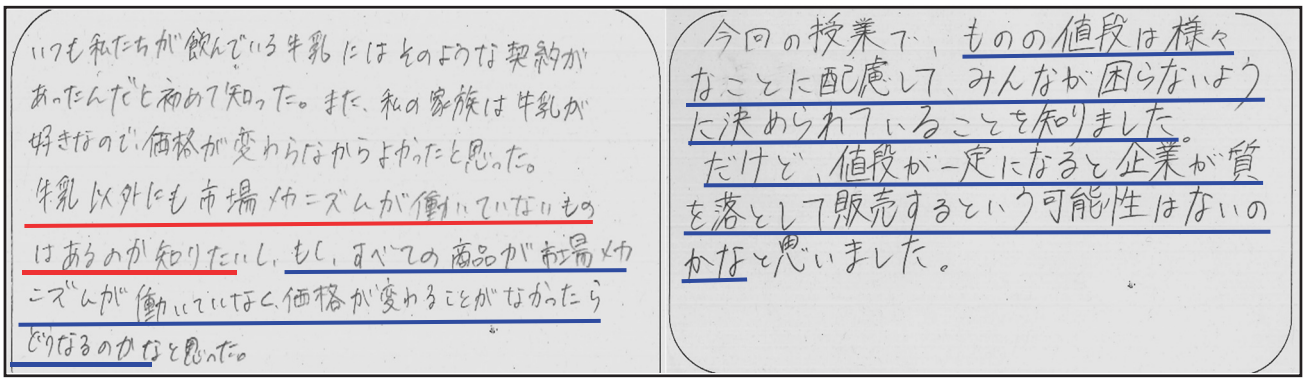
「牛乳以外にも市場メカニズムがはたらかないものがあるか知りたい」「他の食材も牛乳のように契約を結んだりしているのか」など，市場メカニズムや契約について新たに生まれた「問い」を記述しているものがあった。

③　「効率と公正」の視点から考えているもの

「もしすべての商品に市場メカニズムがはたらいておらず，価格が変わることがなかったらどうなるのか」「ものの値段は様々なことを配慮して，みんなが困らないように決められていること」「値段が一定になると，企業が質を落として販売するという可能性はないのか」など，「効率と公正」の面から考え，記述しているものがあった。

図７　本時の授業後の生徒の振り返り





これらの生徒の記述から，経済活動に主体的に関わろうとする姿勢や態度の育成につながっていると捉えられる。

（３）「ＧＴ（ゲストティーチャー）」の活用について

ＧＴのインタビュー動画を複数のチャプターに区切って視聴することで，生徒の予想の検証及び，新たな生徒の「問い」を引き出すために使うことができた。喫緊の社会的事象を課題に設定し，地域素材である阿蘇の酪農について取材したこと，ＧＴのインタビュー動画を複数のチャプターに区切って編集し，意図的に活用することは，汎用性のある教材の提案につながった。

（４）今後の課題

生徒から出された，牛乳の価格が一定の理由が，「家計」「企業」「政府」のどの立場からみた理由なのかについて考えさせると，より，理解が深まるのではないか。

また，「牛乳には市場メカニズムがはたらいていない」という表現よりも，より正確に「牛乳には市場メカニズムをはたらかないようにした」という表現の方が，この単元に相応しい学びになったのではないかと思われる。

さらに，牛乳の「契約」のしくみについて，「なぜ『契約』をするのか」「もし，『指定団体』がなかったらどうなっていただろうか。」を中心発問として考えさせると，更に詳しく追究していく活動ができると思われるが，規定の単元計画内で授業化することは困難である。この点に関しては，改善していく余地がある。

7　おわりに

今回，熊本県中学校社会科教育研究大会において授業を行うにあたって，県社研公民部会の先生方や，阿蘇郡市社会科部会，高尾牧場の高尾氏，らくのうマザーズの職員の皆様，助言者の熊本大学教育学部藤瀬泰司教授に，多くの示唆を頂いた。新型コロナウイルス感染拡大の影響の中，たくさんの方々の協力があってこそ，本研究の授業実践を行うことができたと痛感している。これからも，日々の授業実践に努め，社会科の授業づくりについて研鑽をさらに深めていきたい。

九州中学校社会科教育研究大会のあゆみ

回	開催年	開催県	大　　会　　主　　題
1	昭和 41 年	大分	社会認識を深める教材のとらえ方
2	昭和 42 年	佐賀	思考力を高める効果的な学習指導
3	昭和 43 年	長崎	社会科における授業の効率化
4	昭和 44 年	熊本	教材価値の再検討とその効果的指導法
5	昭和 45 年	宮崎	探求的な能力を育てる学習指導過程の研究
6	昭和 46 年	福岡	思考を深める社会科学習
7	昭和 47 年	鹿児島	社会認識の育成をめざす教材の再構成とその指導
8	昭和 48 年	大分	創造性を培う社会科学習のあり方
9	昭和 49 年	佐賀	主体的な学習を通して思考力を高める指導のあり方
10	昭和 50 年	熊本	社会科学習における概念の形成と指導
11	昭和 52 年	宮崎	社会科学習における概念の形成と指導
12	昭和 53 年	福岡	社会科における教材精選の視点に立った指導計画の展開
13	昭和 54 年	鹿児島	教材内容を精選し、社会事象についての社会認識をどう深めるか
14	昭和 55 年	大分	自ら考え、生き生きとした学習をめざす社会科指導のあり方
15	昭和 56 年	佐賀	自ら考え、わかる喜びをめざす社会科学習のあり方
16	昭和 58 年	熊本	自ら考え、わかる、できる社会科学習
17	昭和 59 年	宮崎	わかる社会科学習の創造
18	昭和 60 年	福岡	社会的見方考え方育成の視点からみた教科書活用の再吟味
19	昭和 61 年	鹿児島	自ら学習の主人公となり、社会のしくみを把握できる生徒を育成するにはどうすればよいか
20	昭和 62 年	大分	楽しい授業を展開するための魅力ある教材づくり
21	昭和 63 年	佐賀	生き生きと活動する社会科学習のあり方
22	平成 2 年	熊本	追求する喜びの中に基礎・基本を身につける社会科学習のあり方
23	平成 3 年	宮崎	変化する社会に主体的に生きることができる力を育てる社会科学習の創造
24	平成 4 年	福岡	自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応する能力を育てる社会科学習の創造
25	平成 5 年	鹿児島	社会の実現に問いかけ、ともに学び生きていく力を育てる社会科学習はどうあるべきか
26	平成 6 年	大分	国際社会に主体的に生きる人間の育成をめざした社会科学習のあり方
27	平成 7 年	佐賀	社会の現実に学び、自ら考え、判断し、表現できる生徒の育成をめざす社会科学習の創造
28	平成 8 年	熊本	自ら学ぶ喜びを味わい、社会的な生き方を求め続ける社会科学習の創造
29	平成 9 年	宮崎	「地域」に根ざした社会科「テーマ」学習
30	平成 10 年	福岡	豊かな学力を育てる社会科学習指導
31	平成 11 年	鹿児島	社会の現実と自分自身を問い直し、ともに学び、ともに生きていく力を育てる社会科はどうあるべきか
32	平成 12 年	大分	現実を見つめ、未来を拓く社会科学習のあり方
33	平成 13 年	佐賀	新しい時代を創る社会科学習のあり方
34	平成 14 年	熊本	基礎・基本の定着を図り、生きて働く力を育む社会科学習の創造
35	平成 15 年	宮崎	社会について考え続ける力を育成する社会科学習の創造
36	平成 16 年	福岡	基礎・基本の確実な定着を図る社会科学習の工夫
37	平成 17 年	鹿児島	２１世紀に生きる市民として、社会の現実から、ともに学び、ともに生きていく力を育てる社会科はどうあるべきか
38	平成 18 年	大分	基礎・基本の定着を踏まえた発展学習のあり方
39	平成 19 年	佐賀	時代を求める公民的資質の育成を考える
40	平成 20 年	熊本	確かな学びを育む社会科学習
41	平成 21 年	宮崎	社会について考え続ける力を育成する社会科学習の創造
42	平成 22 年	福岡	豊かな学力を育てる社会科学習指導

43	平成 23 年	鹿児島	地域を見つめ、未来を生きる力を育てる社会科教育とは
44	平成 24 年	大分	よりよい社会を形成する力を育てる社会科学習
45	平成 25 年	佐賀	社会とのつながりを深め、社会参画を目指した社会科学習
46	平成 26 年	熊本	未来を拓く力を育む社会科学習の創造
47	平成 27 年	宮崎	社会について考え続ける主体を育む社会科学習の創造 ～対比関係に基づく『問い』と『応答』を通して～
48	平成 28 年	長崎	社会の形成に積極的に参画する力を育む社会科学習
49	平成 29 年	福岡	社会的な見方・考え方を総合的に働かせ、公民的資質の基礎の育成を目指す社会科学習の工夫
50	平成 30 年	鹿児島	地域と世界をつなぐ授業 ～「深い学び」となる「主体的・対話的学び」の可能性を探りながら～
51	令和元年	沖縄	「地域を支え　未来を拓く力」を育む社会科学習
52	令和 2 年	大分	社会について問い続ける力を育成する社会科学習のあり方
53	令和 3 年	佐賀	社会に開かれた中学校社会科の学びをめざして ～学びの STEAM 化，学びの個別最適化，新しい学習基盤の確立を通して～
54	令和 4 年	熊本	民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求 ～社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を通して～

九州中学校社会科教育研究協議会会則

第１章　総則

（名　　称）第１条　この会は九州中学校社会科教育研究協議会という。

（事 務 局）第２条　この会の事務局は会長所在の県におく。

（目　　的）第３条　この会は中学校社会科教育に関しての研究と振興を図り、各県の連携を密にして相互の社会科教育の充実につとめる。

（事　　業）第４条　この会の目的を達成するために次の事業を行う。

１　中学校社会科教育に関する研究会などの開催。

２　各県研究会の研究内容・業績などの交流並びに資料の作成・推薦。

３　中学校社会科教育研究機関並びに他団体との連絡・連携。

４　機関誌等の発行。

５　その他、この会の目的を達成するために必要な事業。

第２章　会　　員

（会　　員）第５条　この会は九州各県の中学校社会科研究協議会の会員で組織する。

第３章　役　　員

（組織・任務）第６条　この会に次の役員を置く。

１	会長	１名	この会を代表し、会務を総括する。
２	副会長	若干名	会長を補佐し、会長に事故ある時は代行する。
３	会計監査	若干名	会計を監査する。
４	理事	各県２名	理事会の構成員となり、会務を審議する。
５	幹事	若干名	
６	顧問		置くことができる。

（選　　出）第７条　この会の役員は次の方法によって選出する。

１　会長・副会長・会計監査は理事会で選出する。

２　理事は各県研究会ごとに２名を選出する。

３　幹事は会長が委嘱する。

４　顧問は理事会の承認を経て会長が委嘱する。

（任　　期）第８条　この会の役員の任期は１カ年とする。ただし重任することができる。欠員が生じたときは補充し、その任期は前任者の在任期間とする。

第４章　会　　議

（会　　議）第９条　この会の会務を行うために会議を設ける。

１　理事会

①　理事会は、会長・副会長・会計監査・理事によって構成し、出席者の過半数で決定する。

②　事業の立案・予算の決定・決算の承認・その他の必要な会務を審議決定する。

③　この会は年２回（５月・１１月）もしくは必要に応じて会長が招集する。

２　幹事会

会務を処理し、各種の原案を作成する。この会は必要に応じ会長が招集する。

第５章　会　　計

第１０条　この会の経費は各県負担金及びその他の収入による。

第１１条　この会の各県負担金は年額１５，０００円とする。

第１２条　会計年度は４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６章　附　　則

第１３条　この会則の改正は理事会で行う。

第１４条　理事会並びに研究大会の開催地は持ち回りを原則とする。

第１５条　会費の納入は５月に１年分を全納する。

第１６条　この会則は昭和６２年５月１６日から施行する。

第１７条　この会に必要な細則は別に定める。

第１８条　この会則は平成２４年５月２５日から施行する。

令和４年度　九州中学校社会科教育研究大会　熊本大会役員

○九州中学校社会科教育研究協議会役員

会　長　米村　　均（熊本県熊本市立龍田中学校）

副会長
- 倉掛　高志（宮崎県宮崎市立佐土原中学校）
- 古賀　新二（福岡県福岡市立平尾中学校）
- 貞包　浩洋（佐賀県佐賀市立東与賀中学校）
- 久保　　隆（大分県大分市立碩田学園）
- 堀江　泰賢（長崎県平戸市立生月中学校）
- 上白石　修（鹿児島県日置市立伊集院北中学校）
- 伊波　寛仁（沖縄県沖縄市立山内中学校）

事務局長
- 野口　　哲（熊本県熊本市立北部中学校）
- 松尾　通成（長崎県平戸市立南部中学校）
- 坂口　洋幸（鹿児島県鹿児島市立西紫原中学校）
- 伊藤　　誠（沖縄県琉球大学教育学部附属中学校）
- 福嶋　　章（宮崎県西都市立三納小中学校）
- 大橋　道仁（福岡県福岡市立城南中学校）
- 岡山　慎司（佐賀県佐賀市立大和中学校）
- 玉井　鉄兵（大分県大分市立南大分中学校）

研究部長
- 福島　輝浩（熊本県熊本市立白川中学校）
- 近藤　武志（長崎県平戸市立中部中学校）
- 北　　浩明（鹿児島県指宿市立南指宿中学校）
- 大城　　司（沖縄県立球陽中学校）
- 木幡　佳子（宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校）
- 池田　　渉（福岡県福岡市立高宮中学校）
- 手島　将之（佐賀県佐賀市立城西中学校）
- 杉崎　恭介（大分県大分市立城東中学校）

○熊本大会実行委員

大会実行委員長　米村　　均（龍田中）

大会実行副委員長
- 村田　和人（鹿南中）
- 光山　　忠（佐敷中）
- 下津　光雄（めのだけ小）
- 小崎　洋之（東部中）

事務局
- **顧　問**　佐伯　綱義（熊大附属中）
- **局　長**　野口　　哲（北部中）
- **次　長**　山本　　翔（熊大附属中）

総務部
- **顧　問**　坂田　秀一（西山中）
- **部　長**　荒川　龍浩（日吉中）
- 栗木　良樹（長嶺中）
- 甲斐　寛斉（清水中）
- 早田　尚和（力合中）

運営部
- **顧　問**　佐方　法隆（江原中）
- **部　長**　江﨑　健二（錦ヶ丘中）
- 宮本　尚寿（湖東中）
- 川本　敏也（花陵中）
- **（配信担当）**　喜納　政直（合志楓の森中）
- 米　　貴司（中央中）
- 立川　桂佑（熊大附属中）

経理部	顧　問	坂本　正二（鹿南中）	
	部　長	髙木　清司（江原中）	藤本　　航（湖東中）
		丸山　彰仁（河内中）	
研究部	顧　問	郷　　英利（芳野中）	
	部　長	福島　輝浩（白川中）	
	地理部長	松山　誠一郎（米野岳中）	
	歴史部長	龍野　成敏（京陵中）	
	公民部長	松岡　政晴（合志中）	
編集部	顧　問	中山　　晋（城西中）	
	部　長	福島　輝浩（白川中）	中牟田　進（西合志南中）
		渡瀬　大智（竜南中）	

〇熊本県中学校教育研究会社会科部会各支部理事

熊本市	村田　和人（鹿南中）
玉名荒尾	丸塚　慎一郎（玉陵中）
山　鹿	下津　光雄（めのだけ小）
菊　池	野村　宗生（七城中）
阿　蘇	栗原　邦広（高森中）
上益城	堅島　尚記（木山中）
宇　城	村田　　武（小川中）
八　代	園田　英雄（日奈久中）
人吉球磨	西　　一喜（人吉第三中）
芦北水俣	光山　　忠（佐敷中）
天　草	大平　　宏（御所浦中）

大　会　紀　要

発　行　日	令和４年 11 月 18 日
発　行　者	熊本大会実行委員長　米村　均
大会事務局	熊本市立北部中学校　野口　哲
	〒861-5521　熊本市北区鹿子木町１番地
印　　刷	昭和印刷